# 青鞜

7

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 青鞜　七月號內容


うき人……（短歌）……一……三ヶ島葭
哀しき夏の夜……（短歌）……四……武山英
星の澄める夜……（短歌）……八……白川智惠
泣きぬれし友の眸……（短歌）……一四……柴田かよ
齒のなやみ……（短歌）……一八……岡本かの
菖蒲の家と姉……（小說）……二三……水野仙
朝霧……（小說）……三一……杉本まさを
イワノフ……（戲曲）……三四……チエホフ　瀬沼夏葉譯
響の影……（小說）……七四……マツコア　伊藤野枝譯
未來の王國……（小說）……一二七……アナトール、フランス　淺野友譯
戀愛と結婚……（評論）……一三五……エレン、ケイ　らいてう譯
染井より……一三六……野枝
編輯室より……一四二……同人

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# うき人

—三ケ島葭—

二人ゆゑはげしかりしをわが力ここに盡きぬと泣きにけるかな

あゝおのれこのうき人と別れなばわがおろかさも知る日無からむ

のがれむと思ふ心も失ひて泣く眼の前に開くる道か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暗にすらまぎれたまへる君見ればわがそむかれし心地するかな

み心にひとしきものをうき人の心の中に見いでし尊さ

つばさありあはれ自由と迫害のわが身を挾むつばさなりけり

苦しくも我に浮ばぬほほゑみを君に開けと待つべき身かな

疲れはて酔ひたる如くよろめけば花を踏みても危かりけり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

限りなきよろこびをもてうけむにもあまりあ
ればかなしみのわく

身の痩せぬ寄せくるものに導かれ疲るること
を忘れてあれば

その一つとなりておのれのとどまれるそを熱
愛の胸と言ふらむ

わがための熱さはやがて冷たさと知りておの
れをはかるたやすさ

かなしさに死なむと思ふ身にかくれ生きむと
するもおのれなるらむ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 哀しき夏の夜 ——武山　英——

露しろき母のうづまる夏の夜の谷中の土のあ
はれ戀しや

おもやせて君をおもひし高臺の都の夜の夏の
かなしき

その頃におもひやつれて死なざりし身は平凡
の女なりしよ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夏ふかうわがかくれ住むを君知ると人づてに
きく夜の涙かな

淋しき家に住まばさびしくなりやせむこの夜
のこゝろ君に涙す

さびしくもわが上にのみ涙する君ぞと今もな
ほおもひ入る

君ゆゑにつひに死ぬべき運命をひと日ひ日と
おくりゆくかな

たへかたしうつ伏してわがひとり泣くその哀
しみにわれのあるなり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こともなくみづからをおもひさだめつゝ輕く
瞼をあはす宵かな

京の夜に舊家をいでゝ遠く來しうらわかき友
に涙落ちぬる

ほとゝぎすしきりに啼ける高臺の空の夜ふけ
のこゝろよきかな

母なくて少女となりしわが淋しさ夕べの風呂
にそとなみだふく

あはれにも父母の家にはたらけるわがこのご
ろの醜きすがた

みにくゝなり働くをのみよろこべる繼母の心に咽び泣くかな

このごろの繼母のやさしさ心うく夜のしめりにうちぬれて立つ

わがわかさ何故に繼母はさは憎き、暗きなみだの夕ぐれに落つ

明日もまたなりふりもなく働かむ寢ねぎにはかく思へばなみだす

夜の風呂のかけし鏡に肉づけるわがうす紅き胸のうつれる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## 星の澄める夜 ―白川智恵―

しめやかに庭土ぬらし夕雨の濃くなりゆけば
胸のしづけき

おごそかにふと落ちきたる涙あり夜半のねざ
めのこゝろのうへに

かなしくも君がかたへにあらむ身とおもひさ
だめて遠くも來にけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仰ぎ見る峯にまぢかく初夏の星てる夜なり京の家を出づ

ひそやかに京を出でゆく夜の胸にかなへり空の星の澄めるは

ひとりのる夜汽車の外の雨の音のしづかにわれを眠らするかな

夜ふかむ汽車の灯かげに見入る時、時計の針のかなしかりけり

しらみゆく汽車の窓よりはじめての東海道の松並木見る

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初夏の駿河の海にてる陽かげものおもひなき
こころになりぬ

海遠く夏の匂はむ湘南(しやうなん)の晴れたる晝をおもひ
なつかしむ

かなしくも荒潮の音のしづまりぬ露白く夜の
ふくる磯濱

波ぎはにたゝずめば死をおもはする夜の砂路
の月のいろかな

退潮(ひきしほ)のあけの砂路に濱がらす二三羽見ゆれ旅
館のねざめ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆたかなるこゝろに見やる夕ぐれの潮さす川の海鳥のむれ

雨の音うしほの音こみだれあひしづ心なくふくる旅の夜

きりぎしの松に手をかけ潮の音に胸のひゞきを合せ海見る

しづかなる長谷のみ寺のきざはしをのぼる一足ごとに澄む心

わがこゝろ君がこゝろの哀しみのかげにまよひて泣く夕べかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まつはれる哀しみごともうちさけて君をし見ればうら安く泣く

くれゆけるみ空の色をなつかしみ雑木林に瞻(め)をやるならひ

六月の林の朝のさわやかに武藏野を吹く風のかよひ路

銀座通り五月の晝のアカシヤの風青やかに髪の香を吹く

そことなくマンドリンなど開えくる築地(つきち)の夏の夜のあさきころ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小雨の夜庭の木草のしづくにもわがおもふこ
とのしげくなりけり

六月の夜のアカシヤの街の燈(ひ)にすゞしき瞳(まみ)の
ごとくそよげり

ものすねて泣きたるあこの眼のつかれ街の燈
かげにあへば涼しき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 泣きぬれし友の眸

——柴田かよ——

淪落の
友の吐息に冷つこく
空氣が搖るゝ朝のカフエー

泣きぬれし
友の眸にアネモネの
花がちいさく映るわりなさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昂れる
二つの神經、冷えきりし
二個の紅茶にほつと息づく

呼吸つまる如し
あしごきアネモネに、まして
咳き入る君が苦悶に

わが外の
人には見せぬ泣き顔か
陽も曇れかし風も死ねかし

何日知らず
燻しがはげし赤銅の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

髱ごめがわが泪を誘ふ

これほどに
可愛ゆがられて住むことを
奇蹟のやうに思ふ日のあり

苛(いら)だてる
心のまへに虞美人草(ひなげし)の
緋の葩(はなびら)がほた／＼崩る

づき／＼と
むし歯がいたむ初夏の
まひるを紅く虞美人草(ひなげし)の咲く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雑踏(ひとごみ)の
なかを脱れて息づきし
我をかすめて蝙蝠の飛ぶ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 歯のなやみ

―岡本かの―

ことさらにほしいままなるくちづけをうくる
がやうに歯のうづくかな。

歯のいたみやや薄らぎてたそがれの雨すゞし
くも降り出でにけり。

ひとところ見つめてあればほろほろと何かも
知らぬ涙あふれぬ。

偉なる事業にむかへる心もてこの淋しさに打ち勝ちなまし。

指先の針ほどの血に張りつめし心ふとしも破られて泣く。

あさましや君待つ門のいばらの芽とげとげしくも育ちけるかな。

鈴蘭の薄ら冷たくつつましき情もよしとくちづけにけり。（鈴蘭を送られしかへしに）

またしてもなど争はん末遂に泣きぬれしまま寄る君と我。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かくばかり弱き性をば持ちながら何とて君に
泣きも得せざる。
ほしいままにおのがなげきをのみ告ぐる君の
ふとしも憎ふなりぬる。
うれしくも病めば日も夜もかたはらを君去り
まさずなほ病みてまし。
この日頃病みふすわれに訴(うた)へ得ぬ愁ひにやせ
し汝(なれ)がひとみを。
逸早く青桐の葉は音たててすずしき朝の雨を
知らせぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

漸くに青葉の色の濃くなるも我が黒髪の増すもなやまし。

責めたもふ君がみ膝に涙ぐむつぶらなる眼をむけて黙(もだ)しぬ。

芍薬の花一りんの明(あか)るさも眼に堪へぬほど病み疲れけり。

涙ぐむ我を見すててかへり行く心憎さもまれにはうれし。

あまりにも我をば知りて何事もゆるしたまふがややあきたらじ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほたほたと梅の實落ちぬやうやくに涙をさめしたそがれの窓。

汝が泣くをなど叱りけん我もまたかゝる悲しき夜のあるものを。

おとなしき汝(なれ)がたまたまののしるをかなしくもまたうれしくも聞く。

まづにじむ涙ぞわりもなかりける云ひ解(ご)かんとし瞳をば昂(あ)ぐれど。

あざやかにひなげしの花うつるなり泣き晴らしたる後の瞳(ひとみ)に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 菖蒲の家と姉　――水野　仙――



長林寺の竹籔に育ち過ぎた筍が、薄暗い中にによき〳〵と立つてゐるのを覗き〳〵、それに添つた道を曲ると、私はふと思ひ出したやうに、

『みんな、菖蒲（あやめ）の家さ行つて見ねがい』と友達を誘ふのだつた。

ほと〳〵と暖かさを保つて居る叢の間にうねつて居る道を、蒲英公が咲いて居るといつては立ちどまり、苺の木を見付けたといつては暫くそこに道草を喰つて、いつか小高い丘の上に出て居ると、こんもりとした墓地の杉森を後にして、一連の長屋が目にはいる。そこまで來ると私は急に、まだ草の實や花に心を奪られて居るみんなを呼び集めて急いで菖蒲の家へと下つて行く。少しばかり低くなつて居るところへの近道に、木の根に縋つてぴよいと崖を飛び下りるのが私は好きだつた。

『小母さあ――』といつも大きな聲を出して緣側の方から呼ぶと、

『おや、つうちやんかい。』いさつて小母さんが出て來る。細面ての目の切れの長い、赤味

のない顔がどつか弱々しく見えて、そんなのが私にも無意識に小母さんは此土地の人ではないといふことを思はせて居た。

家の前に水の古い池があつて、眞中にちよんびりと築かれた島みたいなものゝ裾に、苔が一つぱい生えて居た。腐つたやうな杭の根にも、細かな青苔がくつついて居る。岸の方に生えるまゝに委されて居る菖蒲の、勢ひのいゝ葉の直立の間に、時が來れば白や紫の花が咲いた。菖蒲の家と呼び馴れたのは、私がこの家のことをいふ時に、菖蒲の花を目に浮べてかう言つたのから初つたので、私の一家にばかり通用する言葉であつた。

菖蒲の家には時々父の姿が見えた。かうして私が、蓬摘みの歸りだの芹摘みの歸りだのに、友達を連れて寄つたりする時にも、私はよく父と顏を合せた。私の記臆の蘇る限りは父は一體留守勝ちであつた。默つてむつつりした顏が、家の爐傍に見える時は、なんだかかう氣にかゝるものがあるやうで、その時は私はおとなしくした。菖蒲の家で見る父は、家の者の誰にも見せぬやうな親しさを私に見せた。小母さんも遠慮つぽく私を可愛いがつた。家の後には李だの胡頽子の樹などがあるので、それの熟れる頃は友達を引張つて貰ひに來た。

小母さんには姉と同じ年位の娘が一人あつた。おくらちやんといふのを、おくちやん

〱と私は呼んだ。どういふものか私はおくちやんを好かなかつた。小母さんに似た顔立ちで、それのも一層ひき締つた、俗にいふつんとした顔であつた。その頃流行つた紫メリンスの前掛けをしめて、赤い半襟をかけてお針に通つて居た。同じ年頃の姉は上つ張りの筒袖を着て、下女と一緒に働いて居るのに、おくちやんは常にお白粉なぞをつけてぞろ〱として居るのが、姉思ひの私に不感を抱かせたのかも知れない。

いつ頃どうして行き初めたのかは覺えがないが、私はかうしてちよい〱菖蒲の家へ遊びに行つた。母や姉がめつたに其處に行つたことがないのにも、私は別段不審を抱かなかつた。

その頃、私の家の離れに下宿をして居る一人の若い男があつた。――私の家は旅舍である――佐伯先生〱と私達は呼んだ。といつて佐伯先生は學校の敎員ではなかつた。私にはそれが不思議でならなかつたが、先生の部屋には澤山ないろ〱の本があつて、繪本だの寫眞帖だのを私達に見せて吳れた。先生は子供が好きだといつて、私の友達を澤山集めた。私達は毎日〱學校をしまふと先生の部屋に遊びに行つた。一番私達が見て飽かなかつたのは、明治幾年かに起つた三陸海嘯の慘狀を描いた繪本で、髮を英吉利卷にした美人



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が、眞白な肌を風呂桶に浸したまゝ流れて來る圖だの、囚人を逃す爲めに巡査が牢屋を壞して居る光景だの、一番慄え上つたのは、累々とした死屍の眼玉を、無數の鳥が啄んで居る圖で、もうこそ見まいと思ひながら、また强請んでは見せて貰ふのであつた。

先生は又よくお話をして聞かせた。そして私達に讃美歌といふものを敎へた。そのあとではいつも、お菓子だの美しいカード（私達はそれを油繪〳〵といつて大事にして居た）だのが貰へるので、それが樂しみになつてなんでも先生のいふことを喜んで聞いた。私達はいつの間にか神樣といふ言葉を覺えた。そしてそれは、天神樣とか鎭守樣とは一緒に出來ない、不思議なぼんやりしたものであつた。床の間に懸けてある額は、聖母マリアであるといふことも知つた。それらのものがすべて異なる匂ひを持つて私達を包んだ。

或日のこと、私は離れから怡々として爐傍の母のところへ驅けて行つた。

『お母ちやん、また貰つたこれ佐伯先生に……… お菓子と本と。この本にはなえ、爲めになるいろ〳〵な面白いことが書いてあんだぞい』と得意になつて小さな本を見せびらかした。

『なんだそれ？どれ見せて見ろ。』と珍らしくそこに居た父が手を出したので、私は少し怖ち氣つきながらそつと手渡しすると、手に取つたまゝ一枚二枚默讀して、



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『なんだこんなもの！　誰に貰つて來た？』と見る〱父の顏色が變つて居る。私は思はずびくりとして母の背中のかげに隱れた。

『ん？誰に貰つて來た、ん、つね。』と何處までも追窮するので、母もおづ〱取なすやうに、

『離れのお客樣でつさえ、佐伯先生つていふ……』

『離れの？馬鹿！耶蘇は俺は大嫌ひだ、斷つちまへ〱そんな奴あ。』

『そんなことを言つたつて貴方、そんなことをいつたつて……お客樣ですもの貴方。』

『お客樣でもなんでもいゝ、耶蘇は俺は嫌ひだ！俺の家にはそんな者は置かれん！』といひ〱その小さな本をピリ〱と引つ裂いて、

『つね！こんなものア小便溜めにぶん投げて來う！』

私はどうしていゝかわからなかつた。おろ〱しながら俄に悲しくなつて、わつと言ひたいのを怺へるうちに、冷たい淚がほろ〱と頰を傳はつて流れた。私は急いで姉を尋ねに裏の方に出て行つた。

暫くの間私は母が猶くど〱と父を宥めて居る聲を聞いた。さうして納戸の積み重ねた蒲團に倚りかゝつて、探して居た姉が靜かにほろ〱と泣いて居るのを見つけた時、私は



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

體中の涙を絞り出すやうにわつといつて姉に縋りついた。

それからどうなつたのかは、私の記憶がきれ〳〵になつて居るが、なんでも佐伯先生は仙臺に行くと言つて私の家を出たのだつた。

菖蒲の家のおくらさんが駈落ちをした――いや男の後を追つかけて行つたのだ――かう言ふ噂さがふいとその時分の記憶のうちに浮んで來る――私が駈落ちなどゝいふ言葉の意味が解るやうになつた頃は、もうおくちやんのことなぞは忘れて居た。

倉の前の露路に、月見草の黄色がだん〳〵薄暗につゝまれて行くと、軒のあたりに綾を組んで居た蟲のかげも、靑味を失つて來た空の色に紛れて、急に家の中の灯影が戀しくなつて來る。なんとなく寂しい晩だつた。

日が暮れてから遲く草鞋をぬいだ旅商人の、しまひ湯を浴びる音がさびしく聞えて來る。その宵の靜かさが、子供心にも氣になつてならないやうな夜であつた。いつもの通り母と共に納戸に寢たまでは覺えて居るが、時はどの位經つたのやら、ふと誰かゞ叫ぶやうな大きな聲をたてたのに、むくりと起きた母の胸の下に私も目を開いた。

それからの光景は、私の小さな心に記臆も許さないほどの驚きを與へた。井戸から引揚



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

げられた姉のぐつたりとした屍が――その時は私は全くもう死んだものと思つて見て慄えた――泣き叫ぶ母や、何處からか驅けつけた父や隣家の人達に圍まれて、藁火の焰に煖められて居るのを、私はたゞ泣くことも出來ずに慄えて見て居た。ひら／＼と燃えたつ赤い炎の光りに、人々の顏は恐ろしいほど引きしまつて居た。絕えず姉の名を呼び生ける母や父の聲が、愬へるやうに、嘆くやうに、責めるやうに詫びるやうに、また悲しむやうな響を籠めて、更け切つた夜の冷たい空氣を顫はした。

一束の藁が灰になつて、また新な焰がめら／＼と暗い空にあがつた。狂氣のやうになつた母が、前後も忘れて父に喰つてかゝつた言葉のうちに、私は初めて菖蒲の家の性質を知つた。思ひ惑つたやうな父がおろ／＼と姉の胸のあたりを撫でゝ居る手も慄えて居た。しら／＼と白みかけた曉方から、しよぼ／＼と降り出した小雨が、輕く嵩んだ藁灰の上に僅かづゝの濕りを與へて居た。

姉は漸くのことで蘇生つた。

何を問はれてもたゞさめ／＼と泣くのみだつた姉は、それから暫くの間床について居た。日に幾度となくその枕許を窺ふやうに掠めて通る自分の影が、われながら如何にも寂しさ

うに見えて、私はその部屋の前の縁の柱にもたれては暮れ行く空を眺めた。そしてはいつか袂の先を噛みながら泣面をかいて居るのであつた。

菖蒲の家の小母さんは、現在母の從妹に當つて居る人で、それが父の妾なのであつたさうだ――私はだん／＼物事を考へる子となつた。

佐伯先生の形見らしい小さな金の十字架が、その夜の姉の胸にしつかと抱かれてあつたことは、母より以外に知るものはなかつた。私は一かどの女になつてからそのことを母から聞いた――。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 朝霧 ——杉本まさを——

（一）

菜の花の中を分けて走つてゐた汽車は、頓て酷い鳴動をさせて這入つて來た。鶴子は兩手で耳の穴を塞ぐ眞似して多くの客車の窓を見た。種々の頭が何處の窓にも一杯になつて外へ出てゐる。頓て其小い身體は青い二本の節の這入つた窓の戸の前に運ばれると何時の間にか内に這入つてゐた平さんの兩手が其前に來てゐる。鶴子はにつこと可愛らしく笑顏しながら其手に抱かれた。手から手へ鶴子を渡した梅吉は、

『左樣なら、また御機嫌よう歸つて來とくなはれませ』。と半ば平さんにと鶴子にと思う挨拶をして大きな鞄の一個と奈良漬の桶の二つとを乘せて去つて行つた。平さんは二十錢銀貨を一個掌に握り潰しながら

『まあ待つて。些と是れを持つて歸つて。』などと四方構はぬ大きな聲を擧げた。子供の鶴子も其無體裁な調子には他の美しい乘客の手前薄ら恥しく思つて小く腰かけながら下つ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐた。正直な百姓に生れた梅吉は父時代からの報恩の爲めに長く小杉家に出入してゐた仕事の間を見て他の多くの出入人の仲に混り荷持の樣な使者もした。平さんの差し出す銀貨に振返りもせず丁寧に頭を下げて汽車の搖ぎ出すのを狹いぷらつとほーむから見送つてゐるのであつた。平さんはきまり惡げに首を引込めて頓て鶴子の隣へと席を作つた。

『已う是れで安心や。さあ此れから此人を黑谷へ連れて行つたら仕舞ひか。』と言つて腰煙草入を拔き出して吸ひ始める。已う汽車は進行し出した。鶴子は首を揭げて梅吉の方を見る、黑い顏をした梅吉は頻りに合點合點しながら次第に小くなつて行く。

『あれが學校え。あの森の向方の屋根が。』などと鶴子は別れ行く村と人家との一群を指して、其中の黑く峙え立つ森を凝乎見詰めようとした。高等小學校一年生の鶴子は僅かの日數にしろ一里あまりの籔と川とを越えて朝から夕べ近くまで其處にゐた事を思ふと、花かな都會に入る激しい怖れの前に先づ儚なく淋しいわけもない涙を感じずにはゐられない。夫れでも泣くのではなかつた。平さんが剝いて差し出す林檎も好きな柿羊羹の這入つた袋も些と眺めた丈けで緊く口を噤んだ。黑い眼ばかり剝き出したのは又恐しくなり出したのだ。と平さんは秘かに夫れを知つて薄ら笑を眼の先きで見せてゐる。而して平氣で剝いた林檎を頰張り、大きく張らませた懷から新聞を取り出して讀み始める。千本松原が頓

て乳白色の窓を背負て描き出された様に窓を過ぎて行く。夫れが近づいて來て過ぎ行く迄鶴子は眼を追つて眺めつくした。此松原が先代の祖父の頃小杉家の所有であつた。老婆にきいてから必ず汽車の中では見落すまいとした。

『此松原を取り返す程に今の阿兄さんで出來やうかな。』と云ふ言葉も小耳に遺つてゐた。夫れを思つても田地の悉くを賣つて京都に出るといふ今日、數日前から涙ぽい眼をしてゐた老婆の顔を見ても或る寂寥を覺えずにはゐられなかつた。愚かな無智な而して鋭い吸收力を持つてゐる鶴子の神經は何處でも只妙なわけもない悲しさをのみ見出して、而して其中でぶるぶると慄えてゐた。

『汽車がな。久世の橋を渡つたら私を搖り起しやすや。』一寸の間寢ますさかいな。』と平さんはばさりと新聞を足許に捨てゝ柔かい天鵞絨の上に長々と横になる。車窓をゆきゝする雲や樹の頂きを見つめて鶴子は長い時て立つのを辛抱してゐた。頓て平さんは大きな鼻から深い寢息を吐き出して熟睡に入つて行く。夫れを見ても鶴子ははかりきれぬ淋しさにいつの間から凝と涙ぐんで仕舞つたのである。

（二）

七條驛に這入ると寢耄け眼をしてゐる平さんは乾いた口唇を濡らしながら大きな欠伸ば



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かりを續ける。而して窓から首を出しては赤帽を手招きした。乘客の過半が白く冷たい、ぷらつとほうむの敷石を摺りながら出て行く後から鶴子も隨つて降りて行つた。ぶら下げる樣に平さんは冷たい手を振つて改札口を出た。學校でもきき、阿兄からも聞いた電氣鐵道がまるでこれ迄見た馬車程な小さい汽車の姿して廣い街道の上を往復してゐる。平さんは京を立つ時一度乘つたきりで、矢張り珍らしいかして頓て鶴子の喜ぶのを幸ひと連れ込んで行つた。行李が一個夫れに持つて來た鞄、其二つを俥夫に黒谷の寺院の名と所とを鶴子の阿兄の名刺の裏へ認めて堅く約束して與へて置いた。然ういふ愚かな事をして迄平さんは珍らしさに止み難いといふ樣な眼付きをしてゐる。輕い音をたてて頓て電氣鐵道は靜かな京の春の町を走り辷つて行く。一區毎に向つて來る電車を待たねばならぬ。是れには多くの乘客も單線の不便を感じてぶつぶつ小言らしく頰を膨らます人もある。中には十幾分といふ停留の間を待ちあぐんで降りて行く人もある。果ては、

『切符を割戻ししとくなはい。己う茲で降りるさかい。晩うなつて何もならん。』などと汗を拭き拭き降りて行く。然ういふ性急な人達をにつこりして見送りながら平さんは悠然として乘り心地のよい顏をしてゐる。でも間もなく寺町丸太町といふ四辻の處へ來ると、其處で更らに俥にと乘り替へた。まだ合乘りが熾んに流行してゐる頃であつたから二人は



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

濁汚た車輪の付いた俥に乗り込んで小く狹い丸太町を東へ鴨川の橋を渡つた。鴨川では雨のない二三日の爲めに所々に多くの磧を見せて白く砂は乾いて光つてゐた。友仙の美しい布れが風にあほられあほられして橋の下からちらちらと端を見せた。鶴子は首を俥の上から伸ばし出して橋の下の多くの友仙を想像して見る。平さんは和々として、

『また明日歩いて連れて來たげますさかいな。』などと小い身體を緊と抱へた。其袖からはぷんと男の煙草染んだ匂がする。鶴子は例の黒い眼を剝いては橋を離れて行く東丸太町の狹くるしい町あいを見始めた。半分は都會で育つた樣なものだが、やはり込み合つた軒端軒端の店の樣などが珍らしくにこやかに眼に映つた。已う京都の子供だ、と然ういふ心持ちを感じた。丁度午後三時を過ぎてゐた。熊野神社の前を通つて行く時、小い身體をした學校の生徒がまるで驅け廻る樣な格好して向つて來る、中に洒落た被布を被てお下髮に結つた子供も混つてゐるのを見つけた。鶴子は振り返つて迄見送りながら都會の人の樂し氣な樣をしんみり羨しいと思ふのである、平さんは眦に小皺をよせて和々しながら、

『あんたもあんなリボンを買ふて貰たげますえ。なあんなリボンが流行る樣になつた。』捻じ返して自分もあとを見送つてゐる。而して平さんの住ひの西陣にも已うあゝしたリボンを織り出す樣になつて來てゐる。自分の家でも今にやり出すかも解らない。などと子供



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の鶴子を相手にして平さんは手柄らしく説き出して見た。然ういふ小學生徒の出て來る門が頓て俥の通る道の片側に向つてゐるのを見つけた鶴子は、其門表に錦林尋常小學校と書いてあるのを振り向き振り向きして讀み直した。多くの男の生徒の群がりも其處から出て來た。故鄕に遺した遊び友達の腕白な日燒した汚い顏を思ひ出しても、㥯う云ふ綺麗な京都の人達の間に住む自分と云ふ小な誇りが感じられた。然し其喜悅の中にも妙な畏怖に混ずる小淋しい思がある。鶴子は何時の間にか冷たくなつて縮んでゐた。

（三）

落着いた寺院は阿兄の下宿先きの樣なものであつて、一家が總て其處に集つてから更らに移轉する都合のよい借家を見付け樣といふ事になつてゐた。鶴子と平さんの黑谷へ着いた時、昨日高槻を經つて來た老婆が室の隅々まで掃除して待つてゐた。鶴子の母が十六といふ小娘盛りに嫁入つて來た際、老婆も生れる子供達の世話を燒くため小杉家に入り浸つてまるで母の乳母．といふ役割を務めたのである。老婆は黑ん坊を落して何時の間にか短かい切髮姿でゐた。其綺麗に梳き撫でられた白髮頭が鶴子の小い心を泣かせた。小淋しい眼をして鶴子は好物な奈良漬のお茶漬も一つで止した。はつきり口も利かず眼を大きく見開きながら一つ處に凝乎坐つてゐるのである。平さんと老婆京都へ移住するといふ事に就



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て亡き父といふのを中心にして立て續けに母と阿兄との惡口を述べ下して行く。夫れでも老婆は何方かと云へば阿兄の味方だ。大きい顏を撫で廻しながら老婆は

『お光さんが已う少し確乎してゐやはると申し分ないがなあ。』なぞと哀れ氣な聲音を出す。

『なんの、又何うなるや分らん。七轉び八起きといふ事もある。然う氣落ちしたもんでも御座へん。只お光さんが惡いのでもない。孝さんもようはないさかいな。』老婆には陰ばかり時としては面前で以て馬鹿々々と罵られる平さんも面と向ふと恁う思慮分別のあるらしい口を利いて見せた。「孝さんも好はない。」此れが鶴子の小耳に遺つて行つた。阿兄の事となると誰人一人其放蕩の非難をせぬ人はない。老婆はは頓て吻と吐息づいて、

『まあ、ちやんとお醫者さんらしい開業が出來るのは是から九三年か。三年すぎて開業した處で一年や二年では迚も元々通りの田地田畑に直す事は出來んさかいな。』と大きい皺深い兩手で肥つた額をつるつると撫で廻す。平さんは少し苦笑して見せて、煙草入を腰に差すと、

『そんな考へでゐなはると間違いですわい。成程卒業は三年後でもな、開業したでからさうさう流行ものやないさかいな。』少し憎まれ口が過ぎた



Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と思つたか平さんは中腰になると淋しく眼を伏せてゐる老婆を見下ろしながら突然陽氣に笑ひ出した。而して妙に慰める樣な事を言ひ言ひ歸り仕度をする。

『夫れで何です、悉かり移轉となるとまあ四五日は懸りますさかいな。お光さんは一先づ先きい行くちゆてはつたが、荷物は移轉してから送るつもりやろ。』大きい懷から手拭に紙入、種んなものを取り出すと一々夫れを疊み直して再び胸元へ入れ戾す。ぱたと小い名刺形の寫眞が落ちる。鶴子は犬が物を拾ふ樣な速かさで夫れを奪ふ。平さんはそつと老婆の方を見て和たりと笑ふのである『寫眞か。』と老婆も覗く。島田に結つた橫顏の凉しい眼元を見せた女の半身が深い光線の陰影をつかつて撮されてゐる。鶴子は夫れを返しがけに無意味ににつこりとして見せると、

『笑ひなはんな。あたいの別嬪だつがな。大事にして連れて步いてまんね。』とお壺口して戲けてかゝる。聞き逃さない老婆は意地惡く笑顏しながら、

『巳う女子は好加減にお止めや。何時までも、何時迄も。』

『實はあたいのやおまへんね。さる人のお妾に周旋しますのや。夫れで寫眞のお見合ひと御座い。』と言つて再び出した煙草管をぽんと叩いて筒に收める。老婆は人差指を出して「噓々」を爲ながら首を搖ると、



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『些と確乎して働かんとごもならん。生念を入れて金に身を投れる覺悟がなうてはごもならん。』とやり始めるのを煩さげに鼻先で笑ひ乍ら平さんはさつさと歸つて行く。

（四）

老婆は不愉快な心地を續けながら玄關まで送つて出ると、鶴子も素足を長く出して尾いて行く。

『已う此麼にお伸たんか。去年の衣類は短かうて着られんやないか。』と腰縫上げを兩手で引張り乍ら鶴子を引倚せる。細長い身體を自由にされながら鶴子は兩手で老婆の肩に掴まつて小い鼻先きを摺り倚せて見たりした

『なあ。小供の背が伸びるは直や。』と平さんは敷石の前に立つて高槻で貰つた奈良漬の一桶を片手で提げると輕く挨拶を述べて出て行くのである。また明日序があれば訪ねやう、と言ひ遺して行つた。

再び室へ引返しても何處となく物足ぬ寂しさが刻んで來る。毎夜の如く晩くなる阿兄は又今日も晩かとふと老婆は言つた。高槻から持つて來た鞄と行李が車夫の手から運ばれた儘で玄關の次の室に捨てゝあつた。

『彼を持たすのやつたのに。』と老婆は平さんの歸つて行つたのを惜しがり乍ら、阿兄の



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歸り迄待たなければならぬと思つた。生憎寺院の住職も施餓鬼に行つてまだ歸つて來なかつた。

『まあ茲へ來てお坐りおしやす。』と老婆は阿兄の机の前に小い身體を据え美しい罐を取り出して來た。干葡萄、ビスケツト、切り飴などと種々混つてゐる罐を開けて溢茶を入れる。向ひ會ふと偕て懷しいものであつた。何度聞いても同じ昔話を鶴子はまた聞いて見たくなつた。『長崎の話、浦賀へ來た黑船の話、目に見る樣な大きな恐怖が何處の家の人々をも捕へて行く樣な物おそろしい物語。夫れへ田舍で聞く樣な鐵を渡る風の音が來る。鐵は黑谷の西端に當つてゐる、丁度茲では其背後ともなつてゐた。夏阿兄を訪ねた時なぞは大きな縞蚊がやつて來て晝間でも惱まして行つた。

『何時ぞ銀閣寺へ連れて行たげる。けれどもあんたは學校を何うするつもりやな。京の小學校へ行くのか知ら。』

老婆も學校の事には氣を遣ふ樣な眼付をした。琴の會に出す爲に試驗の延期に行つて校長に小言を食らつてから夫では學校を退校さします。』と遣り返して恥を掻いた老婆である。學校の事を思ふと老婆に對する深い親しみも薄らいで行つた。琴ばかりでなく踊の手ほどきは阿兄の內密にして貰つて赤い扇子なぞを買つて來ては老婆の房の椽側で足拍子を



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

倫んでやつた。恁う言ふ風に遊藝と老婆とには怖々の姿で日一日と陥て行く事を子供心にも感知した。

『學校は早う入學り度い。』と太い手首を握つて自身の身と共に腕を搖る。深く斬り下げた前髪の中から美しく黒い眸がぽつちりと煌く。眼は夫れ程でもないが鼻やら頤の邊りまで何う見ても亡父の壯年時代を思はせた。

『此、よう似てさる。』と眼を細くして纖弱な小首を撫で廻す。亡父に似た顔といへば三人の兄姉妹内で鶴子が一等近いのであつた。

『亡父さまのお顔を覺えているか。』と言はれて鶴は淋しい眼を爲ながら障子に映つる恍りとした春の光線を覗入つた。其處からよく叱る事を爲た亡父の俤を描き出さとする。三歳位ゐの思出はさう鮮かに來る筈はなかつた。嫌な肺病に冐されて逝つた亡父は生前から乙子の鶴子だけを手馴付け樣とはしなかつた。自身の病魔の苦痛が子供の泣聲さへもうるさく腹立しかつたのであらう。

『あゝ、阿兄さんがお歸りや。』と老婆は大きな聲を擧げながらも老ひた腰は容易に立ち上れなかつた。廊下の端の障子を開けて制服の儘の阿兄の姿が其處に現はれると鶴子は耳の根まで紅くして小くなつた。少時く見ずにゐると何となく阿兄らしい威嚴で壓えつけら



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れる心持になるのである。

（五）

寂しい夜と晴れやかな快よい朝とが同じ調子で四五日も續いて行つた。裏の畑の前で眼を洗ひ口をそゝぐ、其洗面所は本堂の丁度横手に當つてゐる。大きな鐘の音と木魚の音に和する讀經の聲が寧ろ賑かに鶴子の耳に響いた。洗面所の草履を引かけた儘でよく老婆は畑の青い草叢に連れて行つた。田舍の深い思ひ出を誘ふ樣な小さい花をつけた名もない草が眼につくと捨てがたいものの樣に鶴子は手にあまる程省り採つた。黃色なのや中には眞白の蒲公英もある。長けて大きくなつた蓬がなめらかな表葉を光らせてゐる。ふと故鄉の小川岸の蓬を思ひ出した。夫れにまるで我家の軒端で見た樣な薄い光りを湛へた千斷雲が透けた春の蒼穹をゆききする。

『おい、鶴子、葉書を買つて來い。』と阿兄は齒磨揚子を啣へた儘で手拭をぶら下げながら下りて來た。金を握つて鶴子は小走りに車丁場の右隣の煙草屋へ飛び込んで行つた。硝子戸の中には小い人形の衣物着たのが飾つてある。夫れよりは美しく光つてゐるニッケル製の石鹼入れが欲しいと思つた。葉書を貰つて慌てて寺院の石段へと上つて行くと、昨夜遊びに來た阿兄の友人らしい男が見知らぬ學生と二人鶴子何か言つて通つて行く。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『阿兄さんに然う言つてベースボールを見に來給へ。』と言はれて何と答へて好か解らなかつた。其人の白い兵子帶を見覺えて阿兄の許へ歸つて行つた。

『老婆と二人で芝居を見物に行といで。』などと自分の手で剃刀を持つて鏡の前に座つてゐた阿兄は今日の日曜も又出かけて行かうとしてゐる。

『泣くもんぢやない。確然しなくつちいけない。已う幾ツだと思ふ。』恁う又言つて薄葉の紙に剃刀を卷き收めると小い金盥の湯をぱつと庭先きの植木に打懸ける。

何者かの大きな力で曳ぱられて行く樣な不安なさびしさが泣けば泣く程逆み上がる。

『此葉書でお母樣を早く來て貰ふやうに言つて遣るから泣かずに待つておゐで。』と言つて筆を取上げる。

『泣味噌は田舍者え。京の子供はちよつとも泣かへんえ。』と、洗濯物を座敷までぶら下げて來た老婆は鶴子の頭の頂きを些と押へる眞似して無雑作に障子を開けると丁度其障子の尻が机の端にはたと行當つた。憤として阿兄は何か言ふ、鶴子も何とはなしに泣き止まつて行つた。

頓て少し蒸し氣味な午が來る。筆記の淨書に務めてゐた阿兄も恍ゆい日射のかゞやく椽側に出て小い鶴子の身體を抱へ乍ら戲れる樣にきすなどを强ゐる。絣の襟の間から廣い胸



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を包む薄しやつの靑い紐鉛が眼に止つた。壯んな威壓する樣な異性の匂を然ういふ胸の間から吸ふ事が能きた。鶴子は慄へながら可懷しい觸覺に離れる事が能きなかつた。ふと二人の耳に違つた聞き慣れぬ若々しい女の聲が傳はつて來た。頓狂な老婆の聲も混つてゐる。阿兄は直ぐ誰人か訪ねた人の聲だと覺つたかして膝の上から鶴子を拂ひ退けて審氣に座敷に入る

『まあ孝さん』

『やあ。』と直ぐ夫れに返した。何處迄も老婆は慌て氣味を見せ乍ら鶴子を呼んで雨森のおみさといふ親戚の娘を連れて西陣に嫁てゐる姉がやつて來たと言ひきかせると、友仙の派手な袷に着替させる。然うした狹い次の間は座敷の話しが明きりと洩れて來る。構はずやの老婆が鶴子に言ひ告げる語さへ來客の耳を妨げ勝だ。遂々姉は唆かされる樣に覺えてか、

『まあ鶴ちやん。いつ來たの。』などと言つて這入つて來る、二十にしては少し老すぎた丸髷に結つてゐた。よく喧嘩をしたものだが離れてゐると妙に羞耻を覺えて行つた。

（六）

頓て座敷へも出て雨森の姉へも挨拶らしく頭を下げた。『おみさはん。』と言つた？『姉さ

ん。』と言つたりした。西陣の實姉から見ると七つも年を老けてゐ乍ら深い化粧と秀でた生れつきとが子供心にも恍然とさせた。『まだ單獨ですか。』と阿兄に調戯れ乍ら恥る氣色も見せなかつた。何うしても女連には蔑まれてゆく女で、當主の妾腹とでも云ふ樣な境遇が其餘計な原因をつけもした。

『琴は何處まで上達ました。』などと訊かれて鶴子は困つた。先刻から老婆も其前に座り込んで遠い耳を傾けながら苶然若々しい人の樣な話を撰んだ。談話は何うかすると芝居に長唄、阿兄も何時か吊り込まれて聞いた許しの流行の端唄を些し風邪氣味の咽喉で絞り出す。

『やつぱり祇園町へお行きやすのか。』とおみさは凉しい眼で探り氣味を仄見かすと、

『まだ菊勇さんとお斷縁やしまへんの。』などと露骨な問には順しい西陣の姉もそつと阿兄の顏と見合した。

其頃の槑谷は實の田舍で機會が不可ければ、すしすら滿足に取り寄せる事が能ない。乏しい茶菓で我慢しながら一座は何時の間にか花札を手にしてゐた。誰人が言ひ出したのか本物を賭け樣と言ふ段になつては流石に西陣の姉は秘と座を退つて鶴子を連れ出して行かうとする。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『卑怯だ卑怯だ。金を持つてゐるからつて逃げる奴があるものか。』と阿兄は次の間に立つて行く。四人は一人宛まとひを逃して次の番を待つた。濃厚な色彩を包む裏紙の紺色の滑つこい手觸り。鶴子は多く老婆の肩に掴まり乍ら座布團の上に飜がへる花やかな小いものを凝視した。

人々の眼も心もはづむ内にすぐ夕暮れがやつて來た。家を思ふ姉は歸らうとする。何時か閑の折に鶴子を迎ひに來るからとて身支度をすると、阿兄はそつと次の間に連れ込んだ。暗い陰氣な家を思ふと歸る氣になれない、などとおみさは老婆を相手にして鶴子にも解る樣な愚痴をきかせる。

『眞。』と阿兄に呼ばれて鶴子は金天狗の袋を持つて行くと姉は赤い紙入から紙幣を取り出し乍ら阿兄の手に握らせて、

『お母樣に是を貰ふた事はまだ良人へ言ふたおへん。』と言つて居る。敏い眼の鶴子には大方然うした容子が茫と心にうつる。妹にまで苦勞を分つに吝まぬ阿兄の非難は多くの大人の口から幾度きいてゐたか知れぬ。鶴子は淋し氣にしながら出て行く姉の背方に隨つて老婆と共に門前まで送つて出た。本堂の裏手を通ると花やかな笑ひ聲と全で怨鳴に似た高いおみさの聲とが阿兄のゐる座敷から洩れて來た。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

丁場の車に乘せて姉を送り出すと、流石に其後姿を見送つては振り返つて見る姉に合點合點をして見せた。

房に來ると戯れてゐた姿を二人は鶴子の手前耻ひ乍らも、何か阿兄の語ふ度におみさの白い手は打つ眞似して男の肩にかゝる。

『さあ、此度は本心やりまへう。』と老婆は自身の財布を搖つて見せる。まるで其皺ぶかい眼を煌せながら

『相變らず陽氣な老婆さんごすえな。』などと言ひ乍らもおみさは煙管を前に措いて撒かれた札を開きにかゝる。

『まお此不良い手。此度は孝さんが勝ごすせ。』

『何の。』と老婆首を搖る。然ういふ開け放しで遣りながらも正直で愚鈍な眼を据えてゐる老婆が大概幸運を占めて居た。

（七）

十日位ゐは間もなく經つて行つた。母が來て移轉可き家を見出すのも五日位は消ぎた。でも同じ岡崎で少し陰氣な嫌ひはあつたが至極低價な家が見付かつた。深い木立が已う清しい新綠の脂香を湛へて總ての疊に影を投げ込んで來てゐる。





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『まるで別莊建だ。』と阿兄はさも意に滿た樣に云ふ。

庭先きの比較としては疊數は少ない、六疊に四疊半八疊と云ふやうな室が七つしかなかつた。奥の客の間とした處からは平安神宮の甍が見えた。大極殿の丹塗の廂に綠の屋根瓦は深い木立の梢の中から拔き出してゐる。

わたましの日は阿兄の友人である四五人の學生の手で大きな種來調度を運ばれ、新らしく買つた物の外は大概高槻の我家で見た可懷しいもので飾られた。唐書の領土佐繪の屛風などは阿兄の居間に据えてあつた。

『孃さん、あんたはん高槻のお家と此家と何方がお好きどす?。』と小婢のお雪が小さい背に襷を懸けて閾の隅々までも拭いてゐた。此間ほど愚かに聞えたものはなかつた。深い故鄕の追憶が薄ら涙を誘つて來た。何の愛着もないお雪から見れば何れも同等の家としか見えないのである。餘儀ない生計の縮少が中働はもとより下婢までも追ひ拂ひ、辛じて此お雪だけで雜用に充たさうとした。一先づ老婆が歸鄕て行くと流石に此お雪だけでは困つた處から丁場のおかみが今一人の髮結ひと共に料理の手傳ひなどをして吳れた。學校のない間は琴ばかりで日課を追つて居たが、此處へ移轉つてからは夫すら長い時間のない程に人の出入が激しくなつた。一時斷た友人までもみな集つて來た。中には醫科ばかりか、阿



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄の些の素養と趣味とを愛でて美術學校の上級にゐる男までもみな自分の夫れ夫れの友人を誘つてはやつて來た。男爵の北園の次男が美術學校に居たのも丁度其頃である。北園は輕い大島揃ひの衣類などで洒落込んで先輩の人達の畫論を持ち込んでは得意がつて歸つて行つた。阿兄の人と結ぶ野心は友人ばかりではなく、亡父の知已である樣な人と見れば伏見までも訪ねて行つたりした。

移轉の雜用は大抵五日目位ゐで片付くと、其土曜日が手傳つて呉れた人、祝つて呉れた人、新らしい知已、などを呼んで熾んな酒宴を開かうと言ふ日である。

泣き疲れて夕方から母の房室で寢入つて仕舞つた鶴子は騷がしい響きの爲めに眼醒めて起き上つた。締め切つてある襖のすき間からは花やかな座敷を見せる樣な灯が桃色に射し込んで來てゐる。笑ひ聲や、唄ふ聲や、女の聲の群がる騷ぎが鶴子を寢間から誘ひ出した。

『さあ孃ちやん、舞が始まりますせ。』恁麽事を言つて新らしい友仙の着物と着替へさせに來た出入の女が心も身にそはぬ樣な眼付をした。そつと母の背に座つて人々の陰から菊勇と言ふ女の顏を見た。母と阿兄の仲に爭ひを起す原因の女が是だ。と鶴子は潰島田に結つた白い横顏をつくづく見詰めるのだつた。藝者は其他三四人も來てゐるらしかつた。可愛い舞妓も居た。客間と阿兄の室との隔の襖を除けて、正客も學生もみな居並ばせたのだ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれども洒癖の不良い人達の起居も吊洋燈の下を實にあぶながらせつゝ行き往する。折々拙ない爪彈の棹を持つ。

『素人では中々だつな。』などと春吉と言ふ太棹の妓がみすみすのお世辭を使ふ。多く集まつた人の中でも北園を措いて阿兄の他には些と目指れる樣な華美な容貌を持つた男はなかつた。まるで役者かなぞの樣にお召の羽織なぞ着込んで阿兄は盃を受けて廻つた。逝春と思へぬ程の薄ら冷氣を含んだ大氣が深い木立を搖する夜である。

（八）

多く飲み深く醉つぱらつた揚句鶴子の寢てゐた床に潛り込んで來た男が二人ゐた。其他には五條の端まで歸つてゆく勇氣がないからと言つて泊つて行く意りで四疊半の暗がりに仰向けで倒れてゐる男もゐた。夫れ等の人達をのけて他の人々は十二時が鳴ると共に歩く人、俥を需める人、勝手勝手に歸つて行くと菊勇の一行には阿兄と今一人の何時もの遊び友人が尾いて行つてやらふと云ふ。是れには母も少しは心を不快したが、夫れでも溢々インバネスを其上から着せてやる。

『若樣、さいなら。』妓達は此麽事を言つて北園の俥の周圍をとりまいた。篤く見送ると云ふ風に阿兄は其手を握り返して貴公子然とした背姿に別れると、途中で俥に乘らふと云



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて妓達を歩かせた。でも老妓と舞妓とは先刻に立つて行つたから阿兄の見送りにあづかるものは仲居と共で三人である。

『是れは好考へだらふ。』などと阿兄は提灯を首筋に挿し込んで、菊勇と並んで行く。

『まあ嬉しい。』妓達は家の周園の生垣を離れるまで黄色い聲を取り遺した座敷の人達へ送つて來る。三人の泊客は頓て六疊の客夜具の中で寢かされる。取片づけには丁場のおかみも一時すぎ迄働いて呉れた。

『ああ疲れた。』恁う言つて母は大きな丸髷を伏俯して長くなつた。飲めぬ酒の廻つた頰に冷やりと疊の潤りが觸れる。歸つて來る人達のためにまだ表戸は閉めてない。辛じて寢床に鶴子と共に這入つたものゝ容易に眼を合はす事が能きなかつた。若い人達ちの樣に沸騰しきつた心持ちはまだ明るい灯を凝視めてゐる樣な思ひがした。興奮のおどもりが年甲斐もない生若い空想を唆かし、妙に輕快にも前途の樂しい部分を斷らせては繼ぎ斷せては繼ぎして考へて行つた。

ふと雨戸を叩く樣な音がする、出て行つて見ると森(しん)としてゐた、夜の更けるに連れて風も少しは吹き荒れ始めたか頻りと夫れに似た音を何處となくさせた。裏の向方の畑からは折々蛙の音が通つて來た。月も明るからふ、と母は思ひつゝ又寢床に這入る。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眠る時間を眠つて了つた鶴子の眼も容易に塞がらない。熱い母の乳房の邊りに手を差し入れてまるで幼い頃の樣な鼻息をさせた。其夜程母の燥がしいそぶりを見た事はないと思つた。鶴子の小さい心持ちにもやつぱり先刻の騷がしい酒宴の場が忘れ兼ねたのである。——少し飲んだ酒のために薄化粧の頰が茫と上氣してゐる。夫れへ囁きを持つて行く若い男がある。然うした無禮な戯れをも妻である頃やつた樣に巧みに外して少しでも場の調子の亂れぬ樣に機密を見透かす、——何かは知らず鶴子の眼には快潤な若々しい女の樣に母を見た。

『まだ小杉君は歸りませんか。』恁う言つて這入つて來た泊り客の一人が寢床の側に座り込む。母も寢てはゐられなかつた。

『まあ一本お召りやす。』と言つて莨の箱を奥の間から運んで來る。

『先生泊り込む意りらしいな。』なぞと明るく燈された洋燈で眼をしふぼつか乍もら、派手な阿兄の寢卷の袖を抱へ込んでゐる。鶴子は薄眼して一渡寺院の一室で見た事のある、島田とか言つた人だと考へ出した。並外れた長大の軀幹を誇りにしてゐる男だと誰人かの話をきいた事をも思ひ合せた。少時く其人と談つてゐた母はそつと鶴子の耳元で我子の名を呼んで見る。今漸く夢に入らふとする鶴子は無言つて開けた眼を直ぐ瞑つた。頓て母と



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其人とは鶴子が欢で眼を醒した時已う側にはゐなかつた。

——未完——



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 戯曲 イワノフ（四幕もの）——チエホフ作——

## 第一幕

### 第四齣

シャベリスキイ伯。次いでアンナ・ペトロウナ。

シャベリスキイ伯。（登場からくと笑ふ。）いや眞實のところ、こりや山師ぢやない、哲學者だ、大天才だ、記念碑でも立てなけりやなるまい。詰り、奴は現代的の皆それぐの膿を何んでも有つてゐるのだ。譬へば辯護士のも、醫者のも、囚人のも、出納係のも。（エランダの低い段の方に行つて腰を掛ける。）さうして屹度何處の大學だつて、卒業したのぢやないんぢやないか、驚いて了ふね……それでゐて文明とか、人道的科學がとかを、辯別へてゐるこすりや、奴、所詮一通りの偉い代物ぢやないんだな！『貴方なんぞは……一週間經つて、二萬圓も儲かりまさあ……まだ手の中に切符の一を握つてゐるのだから、そらその伯爵の位でさあ。』だつてか（大笑をする。）『君なら誰だつて娘達が喜んで持參金で押掛

けて來る』と來たもの……

（アンナ・ペトロウナは窓を開けて下を見る。）

シヤベイスキイ伯。さうしてまだ云つたよ『お望みなら、僕があのマルフーシヤスに媒酌を致しませう』だつとさ。はて、彼女を誰だつけな、マルフーシヤ？　うむ、さうさ、苗字がバラバルキン、いやバヾカルキン……何んだか洗濯屋の苗字のやうだな。

アンナ●ペトロウナ。おや、貴方伯爵なの？

シヤベリスキイ伯。何ですかえ？

（アンナ・ペトロウナ笑ふ。）

シヤベリスキイ伯。（故さとエウレイの訛で云ふ。）あんだつて貴方、笑ひなさるだね。

アンナ●ペトロウナ。私ね、貴方の有仰つたことを考へてゐたの、そら、覺えてゐらしつて、午食の時に有仰つたでせう？　あの、赦された盗人だとか、何の馬が……奈何だとかつて、あれ、何になの？

シヤベリスキイ伯。あゝ、洗禮を受けた（譯者註基督教の信者になること、）猶太奴（譯者註エウレイ人を輕蔑して云ふ。）と、赦された盗賊と、病氣の治つた馬とは、其價値に於て同一だ、か。

アンナ●ペトロウナ。（笑ふ。）まあ、貴方は詰らない冗談にも、もうさう意地惡が先に立つの、



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本統に貴方は意地の惡い方。（眞面目になつて。）冗談でなく、貴方は伯爵、隨分意地がお惡いわね、貴方と一所に暮すのは私退屈ですわ、さうして私怖いわ。年中もう貴方はぐずぐずと滲して計りゐらつしやるの、貴方には誰でも皆碌でなしの、惡い奴計りね。でもまあ伯爵、貴方が何時にか誰れかのことを稱めて、善く言つたことでもあつて？

シャベリスキイ伯。こりやまた飛んだ試驗にあづかる譯だね。

アンナ・ペトロウナ。私達は貴方ともう五年の間もかうして一つ屋根の下に住んでゐますが、本統に私、まだ一度だつて聞きませんよ、貴方が人樣のことを焦慮ずに、冷笑しずに、穩かに有仰つたことなんぞは。一體甚麽惡いことを他人が貴方に爲たのです？　さうして又、奈何して貴方が那樣に皆の人達より可いのだと思召してお出でなの？

シャベリスキイ伯。何の少しも那樣ことは思やしない、俺だつて矢張皆と同樣に卑醜な男だ、帽子を被つた豚だ、下等な古いごた靴だよ、俺は始終自分を惡口してゐますよ。俺は誰だ？　俺は何だ？　なんてね。昔は金もあつた、自由でもあつた。幾何か仕合せでもあつたんだが、なあに、今はもう……食倒の、居候の、人格のない幇間の……俺が憤つたり、輕蔑したりすりや、人はたゞ笑つて答へるんだし、俺が笑やあ、すぐ人は、さも氣の毒さうに、頭を振りながら、やれ〳〵爺さん、とう〳〵氣が違つたと云ふ……



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

…てんきり俺と云ふものなんぞには皆は、この聲だつて聞き留めちやくれないし、氣にも留めちやくれないいんだよ……

アンナ●ペトロウナ。（落着いた樣子で。）あれ、また啼く……

シヤベリスキイ伯。誰が泣くのね？

アンナ●ペトロウナ。梟が、毎晩々々啼くんですもの。

シヤベリスキイ伯。構ふことがあるものか、俺等の生活が、今よりもつと惡くなりやうはないよ。（伸をする。）あゝ、ねえサラさん、俺はな、若し十萬か、二十萬も甘く勝つたら、そりやもう貴方なんかも魂消るやうな、思ひ切つたことを遣つて見せるがな、貴方にもたゞもうちらりと姿を見せたまゝで、俺を這麼穴の中から、這麼食倒しの、居候の境涯から逃げだして行つて、もう此處へは世の終りの公審判のその日まで、片足だつて踏込んだものぢやない。

アンナ●ペトロウナ。ぢやもし勝つたら、例へば何をなさるの？

シヤベリスキイ伯。（考へながら。）俺かね、さあ、さうなつたらなあ、何よりも前にモスクワに行つて、ツイガンの歌を聞かう、さうしてから……さうしてから巴里に飛ぶのさ、それで彼方で家を借りて住まうよ、さうして毎日露西亞の聖堂に行かう……





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アンナ●ペトロウナ。さうして其れから？

シヤベリスキイ伯。さうして一日中妻の墓場に附いてゐるだらうと思ふ、その墓場に一生死ぬまで附いてゐるだらう、妻は巴里に埋葬したのさ………（間。）

アンナ●ペトロウナ。あゝ何て退屈だらう、また二部合奏でもしませうか、え、奈何？

シヤベリスキイ伯。可ろしい、遣りませう、樂譜を揃へて置いて下さい。

## 第五齣

シヤベリスキイ伯。イワノフ。リヲフ。

イワノフ。（並木道からリヲフと一所に出て來る。）貴方なんぞは、まだ何にしても去年大學を出たばかりの若手で、元氣も盛んな年輩だが、僕なんぞは、もう年も三十五ですからなあ、然しながら、まあ左に右、僕は年の功と云ふ所で、貴方に向つて忠告をする權利はありませう。貴方は決して彼のエウレイの女や、不健全な病的な女や、靑踏の女なんぞとは、結婚なさらんが可いですよ、極く平凡の、灰色の、成るべくくすんだ色の、又餘計な音の立たないのをお取りなさい、一般に生活は何んでも在來の型通りになさるがいゝです。詰り。灰色のくすんでゐるだけ、又成るべく變化のない生地だけ、其れだけ猶可いんで



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す。さうして又ですなあ貴方、一人で數千人の相手になつちやいけませんよ。又風車に向つて格鬪しちやいけないです、又壁で額を打つのも矢張駄目です、それから又、合理的の農業だとか、普通外れの學校を經營するとか、熱烈の演說だとか、這麼ことは皆すべて遣らない方が可いです、まあ、自分を自分の貝殼の中に引込めて置いて、神から自分に授かつた小さい仕事に精を出すのが可いのです……其の方が何より暖で、何より潔く、何より健全です。實に是迄僕の踏んで來たところの生活なんぞと云つたら、甚麼にそれは自分に疲勞を與へたものだらう！　何と云ふ疲勞を！……幾度の失策、幾度の不條理、幾度の馬鹿を！……（叔父の伯爵を見てじり／＼して。）叔父樣はよくさう人の眼前に閃ついてゐるぢやありませんか、落着いて二人切で話もさせやしない！

シヤベリスキイ伯。（泣きさうな聲。）ほい／＼！　何うすりやいゝんだよ、遁場がないやな。

（飛上つて家の中に入る。）

イワノフ。（伯爵の後から叫ぶ。）いや許して下さい叔父樣！（リチフに。）何の爲に僕あ彼を辱めたんだらう？　いや僕は實際奈何かしてゐるよ、何とかこりや爲なけりやならない、何とか、どうも……

リヲフ。（急込んで。）ニコライ・アレキセエキチ！　（譯者曰アレキセエイチはその父の名アレキセイより出づ總て向つて呼ぶ時にこゝに父の名を添へて呼ぶのは



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（何々さんと云ふのと同意。）僕はこれで貴方のお話は皆伺つて了ひましてせう、それで……それで今度は僕が御免を蒙むつて、すべて迂諄くなく打附に申しますが、まあ、貴方の聲にも、貴方の調子にも、無論言葉の中にも、全然感情のない利己主義（エゴイーズム）が私には聞へます、隨分冷淡な、不人情な……貴方に最も近い人は、其の貴方に近いと云ふ、その譯で殺されつゝあるのです、もう生きてゐる日も數へられると云ふ今日、ねえ、貴方は……貴方はよく其の人を愛さんでも居られるし、歩き廻つてもゐられるし、人には相談も與へられるし、自分を猶飾り繕つてもゐられます……私はどうも上手に綺麗に貴方に云ふと云ふことは出來ませんが、然し……然し實際貴方は僕には徹頭徹尾氣に入らんです！……

イワノフ。或はさうでせう、或は……貴方々他の側に立つてゐるものには、猶よく見えるでせう……貴方は僕をお解りになつてゐるには違ひないでせう、多分僕には非常に罪があるのです……（聞く。）もう屹度馬を附けたのだらう、どれ、失敬して着物を着換へに行かう……（家に行き掛けて又立止り。）ドクトル、貴方は僕が嫌だときツぱりと有仰つて、それを少しも秘しはなさらん、こりや本統に貴方の眞正直なところです。

（家に入る。）

リヲフ。（獨語。）感心の出來ん人間だなあ……えゝ又好機會を取逃して了つた。肝心なこ

とを話し切れずに了つた……彼と到底穩かに話すことは出來ん！　やうやくに口を開いて、一言を云ひ出すか出さん中に、もう恁う此處が（胸を示して。）塞つて、苦しくなつて氣がむら／＼して來て、舌が強張つて咽喉に引着いて了ふ。このタルチユーフア（譯者曰くこの名はモリエルの喜戲中の主人公の名）この狡猾（ずる）い、横着もの、惡んでも猶飽足らん奴だ……うむ、出掛けるのか……可愛さうな妻君は彼が其側にゐるのを以て無上の幸福とし、たゞ彼によつて呼吸をしてゐるのだ。さうしてたゞの一晩でも、其間に夫のゐてくれるのを希つてゐる……然し彼は……彼には出來ないんだ……彼にはもう家が其程に息苦しく、窮屈でならないんだ、若したつた一晩だつて、家にゐるやうものなら、忽ち例の鬱悶（トスカ）でもう額を打抜くやうな騷ぎになるんだらう、哀れむべき人間さ……所が今度はまた、彼、何か新しい仕事を遣ろうと云ふ計畫で、廣い舞臺が要るのだらう……うむ、さうさ、僕は知つてるとも、何の爲にあゝして毎晩、あのレベデフ家に入込むのだか！　知つてゐるとも！

## 第六齣

リヲフ。イワノフ（帽を被り、外套を着て。）シヤベリスキイ伯。アンナ●ペトロウナ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

シャベリスキイ伯。（イワノフや、アンナ・ペトロウナ等と共に家から出て來て。）そりやニコライ、餘り酷過ぎるよ！　自分計り毎晩出掛けて行つて、俺等計りは何時でも殘される。いや、はや、もう寂しくて寂しくて仕樣がない、其處でもう八時と云やあ寝て了ふんだ、不體裁も甚しいぢやないかね、こりやまるで生活ぢやありません！　さうして又奈何云ふ譯で、お前さん計りには出掛けられて、又何云ふ譯で俺達にや其れが出來ないと云ふのかね？　えゝ、奈何云ふ譯でさ？

アンナ●ペトロウナ。伯爵お止し遊ばせ、お止めなさいますな、宜しいぢや御座いませんか、參つたつて、構やしませんわね………

イワノフ。（妻に。）だつてお前さん病人ぢやないか、病人が何處へ行けるのさ？　さうして又お前さんに毒だよ、日が暮れてから戸外の空氣に當るのは………よ、それ、聞いて御覧、ドクトルに。お前さん子供ぢやないだらう、なあ、アニウタ、よく考へて見なさいな………（伯爵に。）又お前さんもだ、何んだつて行かなけりやならんのです？

シャベリスキイ伯。いや〳〵、譬へもう鬼の宿だらうが、鰐の腹の中だらうが、構やしない、たゞもう此處に殘されるの計りは御免だ！　俺は退屈で、退屈で奈何にもならない！　餘りもう退屈なので、俺は近頃とんと氣拔がして了つたやうだ！　俺はもう皆にも厭き



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て嫌はれてゐるんだ。お前さんは彼女が退屈がらんやうに、俺を置いては行くがね、俺はもう彼女を嗤つて遣るんだ、小衝いてやるんだ！

アンナ・ペーロウナ。お止めなさいますな、よう伯爵、放つて置いて頂戴！　構ひませんわ、行つたつても、若し此の人に彼方が面白いのならねえ。

イワノフ。アーニヤ、奈何して那様物言ひ振さ？　お前さん知つてるぢやないか、私は何も彼家へ行くのは、面白いの何んのと云ふので行く譯ぢやないのを！　要事があるんだ、金の手形のことに就いて話をしなけりやならないんだ。

アンナ・ペトロウナ。おや變なのねえ、何も貴方那樣云譯がましいこと有仰らないたつていゝわ、お出でなさいよ、誰も止めやあ爲ませんわ！

イワノフ。然し沓お互にさう角突き合ふは止さう、奈何してさうしなけりやならないんだらう？

シヤベリスキイ伯。（泣き聲で。）ニコライ、なあ、おいよ、何卒ぞ俺を一所に連れて行つとくれ！　さうして彼方でいろ〳〵な奴等に遇ひでもしたら、屹度氣がまだしも紛れるだらう、本統になあお前さん、復活祭後、まだ何處へも出つこなしなのだからなあ！

イワノフ。（怒る。）ぢや一所に御出でなさい！　あゝ貴方々にや頽然して了ふ！



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

シヤベリスキイ伯。さうかい？　そりや有難う……（勇みて彼の手を自分の小脇に取つて些と歩く。）お前さんの麥藁の帽子を貸しておくれよ、可いかい？

イワノフ。可いです、たゞ成べく早く願ひます！

（伯爵は家に駈けて入る。）

イワノフ。あゝ厭だ、皆つくぐ厭だ！　いや、まあ、何んだ、下らんことを云つたけな！　だがアーニヤ、私はお前さんといつになく荒々しくものを云つたね、本統に是迄には那樣ことは些ともなかつたのだが、まあ、左に右、行つて來やう、アーニヤ、私は大抵一時頃にや歸るよ。

アンナ●ペトロウナ。コーリヤ！　ようう私の可愛い人！　行かないで頂戴！

イワノフ。（狼狽へて）なあ、私の小鳩や！　近い私の骨肉や！　この可哀さうな私の人や！　お前さんは賴みだからなあ、私の毎晩出掛けるのを止めないでおくれ、隨分殘酷のやうだけれども、さうしてあんまり勝手だけれど、どうかこれだけは許しておいてくれ！　家にゐるのは堪えられないのだ！　日が暮さへすればすぐもう初まるのだ、例の鬪鬪の氣分が、胸に喰入つて來るやうに襲ふて來るのだ、そりや何と云ふ鬪悶の氣分だらう！　だが、そりや何故だと聞かないでおくれ、私は自分でも解らないんだ。全く誓つ

ても解らないんだよ、あゝ、家では鬱悶(トスカ)の氣分に苦しめられ、彼方のレベデフの家へ遁げれば、彼方は又一層惡いんだ。それで又も家へ戻つてくれば、矢張相變らずの鬱悶(トスカ)の氣分にとぢられる。さうして一晩中を苦しみ悶える……あゝ、もう全く絶望だよ！…

……

アンナ・ペトロウナ。コーリヤ……ぢや行かないでゐらつしやいな！ 先のやうにいろ〳〵して見ませんか、話をしたり……一所に二人でお夕飯を食べたり、さうして何か讀みませうか、ね……私ね、お前さんに聞かせやうと思つてね、あの不平家(こぼしや)さんと澤山二部合奏の稽古をして置きましたわ。(彼を抱く)ね、行かないでゐらつしやいね！……(間。)私お前さんを解らないのよ、もう彼れ此れ一年も這麼風なんですもの、よう、奈何してなの、奈何して那樣に變つてよう？

イワノフ。知らない、解らない……

アンナ・ペトロウナ。さうして何故なの、私を一所に奈何してお連れ遊ばさないの、ねえ、何故一所に毎晩出掛けないの二人で？

イワノフ。其れを强いて云へと云ふのなら云はうが、いや、少し酷いかも知れないけれど、言う方が増だらう……私が鬱悶(トスカ)の氣分に苦み出す時には、私は……私はお前さんも



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

可愛くはなくなるのだ、私はお前さんから此の時には遁げて遠ざかるのだ。早く云ふと、まあ、家から出なけりやゐられないんだ。

アンナ●ペトロウナ。鬱悶(トスカ)の氣分？ さうですかねえ、解るわ……ぢや、ようコーリヤ、ねえ、まあ試して御覽なさい、先のやうにね、そら、歌つたり、笑つたり、怒つたり……ね、行かないでゐらつしやいよ、さうして笑ひませう、ナリフカ(譯者註果物の酒)でも飲みませう さうしてお前さんのその鬱悶(トスカ)の氣分を、もう一分間に追ひ出ししてませう、それとも、お望みならば私歌ひませうか、又それとも、あのお前さんの書齋に行つて、ゆつくり座つて話をしませうか、よくねえ、そら先に、あの書齋の薄暗でしんみりとお話をしたやうに、さうしてお前さん私にその鬱悶(トスカ)の氣分の苦しみをお話爲て下さいな……まあ何と云ふ其の苦しさうなお前さんの眼色(めつき)は！ 私はその眼を瞶めて、さうして泣きますわ、さうして後で二人屹度輕くなりますわ……(笑ふ。忽ちまた泣く。) それともコーリヤ奈何お爲なの？ あゝ『花は春ごとに繰返しては咲くが、喜と云ふものは又と返らぬ』、だわね、ぢや、さあ、行らつしやい……

イワノフ。アーニヤ、お前私のことを神に祈つてゐておくれ。どれ、それぢや行かう。(彼は行きかけたが、ふと、思ひ直したかのやうに立止つて些と考へる。)いや駄目だ、出來ない！ (退場。)



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アンナ・ペトロウナ。行つてゐらつしやい……（彼女は椅子に腰を下す。）

リヲフ。（舞臺を歩いてゐる。）アンナ・ペトロウナ！（譯者曰くペトロウナは彼女の父の名ペトルより出づ。）もう六時が打ちましたからね、それと同時にすぐ貴方はお室にお引込みなすつて、翌朝まではお出になつちや可けません、夜の濕氣は貴方には大毒ですから。どうぞ之れは規則として守つて頂きたいです。

アンナ・ペトロウナ。はい、畏まりまして御座います。

リヲフ。何で『畏まりまして御座います』なんです、僕は眞面目で云つて居るのですよ。

アンナ・ペトロウナ。でも私、眞面目になるの厭ですもの。（咳をする。）

リヲフ。それ御覧なさい、もう貴方は咳をしてお出ぢやありませんか。

## 第七齣

リヲフ。アンナ・ペトロウナ。シャベリスキイ伯。

シャベリスキイ伯。（帽を被り、外套を着て家から出て來る。）ニコライは何處です？ もう馬を附けたらうか？ （急いでアンナ・ペトロウナの手に接吻して。）さてお美しいお方、お寢みなさい。（ひよいゝ、つさこのやうな顔をして。）さて事だ！ （エッレイの眞似。）ぢや御免を蒙りますよか！ （急いで退

場）

リヲフ。暫間！

（間。遠くから手風琴の音が聞える。）

アンナ●ペトロウナ。何て寂しいんでせう！ あれお聞きなさい。馭者や下女なんかゞ、あゝして夜會をしてゐますわ。然し私は……私はまるで棄てられたねえ、エウゲニイ●コンスタンチノキチ、（譯者註コンスタンチノヰチそはの父の名コンスタンチンより出づ）何處を那樣に歩いてお出でなの、此方へゐらつしやいましよ、まあお掛けなさいな貴方！………

リヲフ。僕は掛けちやいられません。（間。）

アンナ●ペトロウナ。臺所で『鶸よ、鶸よ、』を彈いてゐる（歌ふ。）『鶸よ、鶸よ、何處へ汝は飛び行きしぞ？ 山の麓で酒を飲み來ぬ。』（間。）ドクトル貴方にはお父樣も、お母樣もおありなの？

リヲフ。父親は有りませんが、母親は未だ生きてゐます。

アンナ●ペトロウナ。貴方お母樣と離れてお出でになつて、お寂しくないの？

リヲフ。僕にや寂しがる閑もないです。

アンナ●ペトロウナ。『花は春ごとに繰返しては咲くが、喜といふものは又と返らぬ。』さう、

誰れが此の句を私に敎へたのだつけ？ えゝと……多分ニコライが自分で私に言つたのだつた。（聞く。）あれ、また梟が啼く！

リヲフ。なあに構やしません、啼いたつて！

アンナ●ペトロウナ。ドクトル私考へるのですがね、本統に運命は私に相應の酬をしてくれないんですわ。世の中には、隨分、私なぞより、もつと惡い、さうして自分の幸福の爲になんぞ何の値も拂やあしない人達が、それでも可也に幸福の酬を受けてゐますわね、でも、私なんぞはもう總てを皆悉皆拂つて居るのです、皆、すつかりもう！……さうして甚麽に高く拂つてゐるのでせう！　何で私ばかり那樣に酷い利息を取られなけりやならないんでせう？……ねえ、貴方。貴方々は皆私には那樣に氣を着けて、又那樣に親切にして下すつて、私に本統を打明けては下さいませんが、然し私、自分の病氣のことを知らないと思召して？　私がね、甚麽病氣だかを知らないと？　私、よく存じて居りますわよ。だが這麽ことのお話は、あんまり退屈ですわねえ。（エッレイ語のアクセントで。）失禮ですがねえ貴方！　何か貴方は滑稽な話でも知つてゐらつしやらないの？

リヲフ。出來ませんなあ。

アンナ●ペトロウナ。でもニコライは出來ますわ。ねえ、人間と云ふものゝ公平でない



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のには私は全く驚いて居りますの、奈何して愛に對して、愛でなく答へるし、眞實に對しては僞善で酬ひるのでせうね？ さうしてまあ聞いて頂戴、ねえ私、本統に何時まで父や母の怨恨を受けてゐればいゝんでせう？ 兩親は此所から僅か五十露里(ウエルスタ)ばかりの離れてゐる所に住んで居るのです、私もう晝にも夜にも夢にまでも、しみ〴〵と兩親の恨みを感じてゐますの、さうして又私、奈何云ふ風にニコライの鬱悶(トスカ)の氣分を解りませうねえ貴方、敎へて頂戴、どうぞ。彼の人は言ふの、毎晩氣が鬱して來て、この鬱悶(トスカ)の氣分に苦しみ出すと、もう其時には私をでも愛さないつてえの、そりや私解りますわ。さうだらうと思はれますわ。でも若しやひよつとして、彼の人は私をもう厭になつたのぢやないのかしら！ いえ、まさか那樣ことがあり得べき筈もないが、でもひよつと？ いえ、無いわ、無いわ、もう那樣こと思ふにも及ばない。（歌ふ。）『鷗よ、鷗よ、何處に汝は行きゐしぞ？』……（飛上つて。）何てまあ私這麼恐しいことを考へるんでせう！………ドクトル、貴方は家族をお有ち遊ばさないから、よく這麼ことお解りにやならないわねえ……

リヲフ。貴方は人のことを驚くと過刻有仰つたが……（並んで腰を掛る。）いや僕は……僕は貴方をこそ驚いてゐます！ 僕にまあ說明して下さい、貴方は那樣利口な、正直な、



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

全然聖人のやうな方であるのに、何で貴方は自分を欺いて、這麼梟の巣に御自分を引込ませましたか？　何の譯で貴方は這麼所へ？　さうして這麼冷血な、不人情極まる人間と、何の貴方に接近してゐる所があるんです……いや、止さう、貴方の御良人のことを云ふのは！　だが這麼空虚な、卑劣な人間達と、貴方と何等の接近した所があるんです？　何と云ふ因果なことかなあ！……この一年中不平家の錆びた狂人の伯爵やあの腹黑のあの佛頂面のあの惡黨中の惡黨のミーシャ……奈何して貴方のやうな方が這麼中におゐでになるのです、奈何して又這麼所に引掛つたものなんでせうな？

アンナ●ペトロウナ。（笑ふ。）お丶丁度さう云ふことを彼の人も何時だつたか云ひましたつけ……丁度さう、丁度さうよ、然し彼の人はもつと眼が大きいの、さうしてよく何かをその熱烈に云ひ初めるとそりやもうその眼がね火のやうにまるで燃えるの、さあ貴方、もつと何か有仰いよ、もつと、もつと！……

リヲフ。（立上つて手を振る。）何も言ふことなんぞありやしません！　さあ、お出でなさいお室へ……

アンナ●ペトロウナ。貴方ニコライのことを憾うだとか那だとか有仰いましたけれど、貴方彼の人を奈何して知つてお出でなの？　まさかに貴方、半年や其所らで人を知ると云



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふことが出來て？　ドクトル本統に彼の人は何とも云へない立派な人なの私殘念で堪らないわ、貴方がもう二年か三年も前に彼の人を御存じでなかつたのが。彼の人ね、此の頃は例の煩悶でもう無口にもなり、仕事も何にもしなくなつたのですが、でも前には……何と立派な人だつたのでせう！……私初めて見たばかりで、もうまるで、取られて了つたの。（笑ふ。）そらね、あの捕鼠器でね、ぱたんと私もう取られて了つたのですわ！　さうして彼の人にお出でと云はれた時、私は何でも皆一切、鋏で朽葉を切棄てるやうに、すつかり切つて棄てゝ、而して此處へ參つて了ひましたの………（間。）だけれど今はもう………今ぢや彼の人はあゝして始終レベデフの家に行つて、他の女達と遊んでゐますので、私は………庭にぼんやりと腰を掛けては、たゞ梟の啼く聲を聞いてゐますわ………（夜番は柏子木を打つ。）ドクトル貴方には御兄弟がお有りぢやないの？

リヲフ。有りません。

（アンナ・ペトロウナ聲を立てゝ泣き出す。）

リヲフ。奈何したのです？　え、奈何しました貴方？

アンナ・ペトロウナ。（立上る。）私ゐられません、ドクトル、私參りますわ、彼方へ………

リヲフ。何處へ？

アンナ・ペトロウナ。彼方へ、あの、宿の居ります處に………私、參りますわ………どうぞ馬を馬車に附けるやうに有仰つて下さいな。（家に駈出して入る。）

リヲフ。厭だ、御免だ、這麼間尺に合はん治療はもう謝つて了ふ。一錢の禮も貰はんでからに、まだ其上に馬鹿々々しい、這麼に腸までを下から上へ轉覆り返へせられる！……

……厭だ、僕は謝つて了ふ！遣り切れん！（家に行く。）

幕

瀬沼夏葉譯



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 響の影 ―マッコア―

何故に全ての人々わが室に走り來りしにや？人々は何物にかいたく恐怖やかされしがごとし。わが父は全く色を失なひ震えつゝあり。

「卿は何故に叫びしや、何事の起りしにや、とく語り給へ」

父君は聲ふるはせて訊ね給ひぬ。其の時父は卓上に擴げられたる樂符の草稿を瞶めてまたも色を變じ給ひぬ。

「卿の身體を打忘れてまでも此如きことをなさざる可らずといふにや。何故に卿は夜を徹し曉迄も卿の仕事をなさゞるべからずといふにや卿は晝間時といふものを持たずといひ給ふか？」

人々のいぶかしき容貌とその語る處によれば渠等はわが室に恐ろしき叫聲を聞きつけて馳けつけたるものゝ如し。人々の入り來れる時われは室の眞中に直立し兩眼を据えて渠等の見ること能はざるものを瞶めつゝあるかの如く見えたる由。われは彼の肉聲と樂器の全



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く融合し渾一なる一大樂聲となりて高まり行くを感じたる時遂にわれ自からも歌はざるべからざるに到り、狂亂せる人のごとく叫びいでしものなるべし。

七月一日

われ今日はいたく倦れはてぬ、何事もせずわが眼を半ば閉ぢつゝ窓にもたれゐぬ、眼痛み四肢萎へ全身著しき衰へを感じぬ。

菩提樹の花の薫の甘きことよ！　われは恰かも長き病氣より快復しつゝあるがごとく感ず。家の人々皆われを遠ざけつゝあり。われいたく人々を畏怖がせし故なるべし。かの折奈何なる事をなせしや全く記憶せず。それにしても父君の煩き事よ。奈何なればかの如く氣遣はしげにわれを監視なし給ふにや？　われも父の樣子に絶えず氣を配りてその理由を發見すべし。

七月三日

わが父はわれに隱しつゝあれど、其處に何等かの悲劇あるがごとく思はる、されどわれは推する事能はざるなり。

今はわが仕事も終りたれば務めて父の秘密を索りみん。父はわれのまたピアノに少しく遠ざかれるを見て、稍々氣を緩めたるが如く見ゆ。われはまた近頃「アヴー」を調べつゝ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ありかの曲より或は秘密の糸口を見出すやも知れざれば。

七月十四日

時のすぎゆくことよ！　われ暫時作曲と彈奏とを見合せ居ぬ。われは父の事のみ思ひ廻らし、奈何なれば父のあれ程に音樂を恐るゝかを理解すべく務めつゝあり。

われは今朝父に對し、甚だ大膽なる態度に出でぬ。共に連れ立ちて公園を散歩し、とあるベンチに腰打かけ暫時の間雜談に耽り居たりしが軈て話題も盡きぬ。われ等は其處此處を走り行く馬車など打眺めぬ。折々思ひ出る樣に暑きことよと互にひとりごちぬ。われはやがて父の方を向き正面に父を瞶めつゝ靜かに、しかも熱心に訊ねぬ「父よ卿は何故に音樂を恐れ給ふにや？」かく言ひてわれは少しく顫えぬ。われは訊ねるともなく遂に口を開きたるなり。われは言ひ終りて恰も自から言ひたる言葉を全く打忘れたるが如く第三者の好奇心もて父の答へを待ちぬ。深き悲哀の表情父の面にあらはれぬ。

「昔の事よ……そはいと悲しき物語なり……」追懷に耐えざるもの丶如く父は漸く口を開きぬ。

たゞそれのみ。父の遁辭はいつも乍ら同じ。われは父に訊ねつゝある間、到底渠の秘密を打ち明くる事なかるべしと信じぬ。よし、われは必ず發見すべし、否、せざるべからず。

われは當然の權利あるものゝ如く感ず。

七月二十日

われ等は近日に旅行することゝなりぬ。場所の撰擇に就て人々兎や角と論じたる末遂にテキナードと定りぬ。われは何處にても可し。喜びて行かん。われはこの半年を全て忘れて新なる生活に入らんことを望みて已まず。これはたゞ新らしき場所に至りて新らしき連想を形ち造ることによりてのみなされん。われ等は遲くも十日の中に出發する豫定なり。

七月二十三日

ものとして準備ならざるはなし。衣服などあれこれと煩さきまで買ひ整へらる。母君は既に荷物の用意整へたりとなり。われは人々に打ち混じりて手傳はんと思へどかゝる時出でなば、又々人々に迷惑などかけんは氣の毒とそのなすがまゝに任せ置きわれは獨りわが室に閉ぢ籠りぬ。かくしてわれはまた訪問の人を避くることを得。渠等の來る度に旅行につきて種々樣々の方法などさも興ありげに述べゆく可笑しさよ。

多數の人々は今や三々伍々群をなして倫敦を去りつゝあり。窓よりかなたの家々を打眺むるに階上より階下に鞄荷物などの搬び下さるゝを見て兒童等の小さき顏に溢れん許りの喜を漲らし居るが見ゆ。あゝ渠等の如何に旅行を愛することよ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは幼き時旅行を無上の樂みとせるを今に記憶す。あゝ旅行――奈何に人の心を刺戟するよ！　海を渡りて異郷に着き、われと全く異なれる言葉を耳にし、或は夜汽車の中に眠りて遠く故鄕の空を夢みる等一として感興なきはなし。中に就きてわが好むは旅行中は人々皆平等にわけへだてなき事なり。われも、わが父母のなせしが如く振舞ひ父母も亦時にわれのなすが如き兒童らしき戲れ等なしぬ。

七月廿五日

依然として準備の爲め混雜を極めつゝあり。

われは作物を打眺め如何になり行くならんと獨り怪しみぬ。

われはわが作を示すべき人を有せざるなり。樂界に僅かの友あるも、それさへ近頃は言ひ合せしごとく面を見せず。恐らく父の所爲に相違なかるべし。不思議なり、父はあくまでわれを音樂より遠ざけんと努めつゝあり。

七月廿八日

遂にわれは全てを發見しぬ。あゝ思ふも恐ろし。あゝ何故にわれはかくまで父の秘密を知らんと務めたるにや？今は最早悔ゆるも遲し、知らざらんとするも、得ず。

今更悔ゆるも何するものぞ、われはなにとは知れず發見せざるべからざるがごとく餘儀

なくせられたるが故に發見せしのみ。如此き事に理由あるべからず。

星一ッ一ッ見えそめぬ、高き處よりわれを見下しつゝあるが如く思はる。われは窓を閉ぢん。わが悲嘆を見らるゝに忍びず――われはまた美しき夜を願はざるなり。われは今美はしき夜とかゝはりなし。寧ろそを厭ふ。

六時頃なりき。われは父の書齋を覗きぬ。戸は半ば開かれたり。父はわれの戸口に彳立めるを知らず。父は机の抽斗の中の何物かを頻りに眺めつゝあるをわれは見ぬ。忽ちわれはかの日父の寫眞に打ち臥して歎きつゝありしことを回想しぬ。わが好奇心は愈々擧まりぬ。われは父に知られざる樣忍び入りぬ。

暫時の後、僕は父の許に手紙を持ち來りぬ、急病の患者の父を迎ふる信書なりき。父は直ちに室を出でゆきぬ。出づるを遲しと、待ちたる我は忽ち父が机の抽斗に手をかけ少しの躊躇もなく拔き出しぬ。中に一冊の書物あり。綠の布もて表裝せられ、いたく手擦れたり、小さき金の釦金附けり。われはその下にもしや寫眞のあるにてはなきかと探し見たれど何物もなかりき、われは靜かに釦金をはづして書物を開きぬ、頁は美はしき手蹟もて認められぬ。墨痕薄き鳶色に變じ紙面もまた黄味を帶びぬ。中に一葉の白金寫眞の挿入せられたるをわれは發見しぬ。形は小さき楕圓形なり其の中に女の姿うつれり。顏容美はしく



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼光特に際立ちて見えぬ。されど何等の表情なく、濃き厚き髪にスカーフ捲きつけありぬ。われは寫眞を瞶めつゝ次第に魅せらるゝがごとく感じわれを忘れて見とれぬ。軈てわれは草稿にわが眼を轉じぬ。われは窓の傍に至りて徐ろに讀み初めぬ。そは露西亞語もて記しあれど明らかに父が手蹟の題はれて見えぬ。そは日記なり、わが開きたる處は今より三十年以前の月日記しありぬ。

われは辛らうじて二頁程讀み終りぬ。わが父のペテルスブルグ大學に在學中に書きたるものにして友と共に飲酒の競爭をなしたることども記しありぬ。競爭終りて酒場にて皆々舞踏せりとあり。こは餘り譽むべきものにあらず、父もそを自覺して書きつゝあるが如き言葉折々見えぬ。こはかの寫眞と何等の係りなし。寫眞は恐らく偶然に此の處に挿まれたるものなるべしとわれは一人合點しぬ。それより數頁を繰りて讀み初めぬ。學生々活を眞に躍如たらしむ記事あり。又所々に情熱的なる言葉もて演奏會に關する記事並びに故郷よりの信書に就きて感想めきたるもの錄しありぬ。わが開きたる處の日附より一年程經たる處にショッパンが「小夜樂(ノクターン)」を歌ひたる一編の詩あり。詩はわが祖母に當るエリザベス、カフタルにデザケートせられたり。われはフトかの寫眞は祖母のそれに非ずやと思ひ手にとりて父の顔と比較し見るに果して類似の點を發見しぬ。われは心に新なる確信を得たり。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これより稍々後に、母（祖母）の心地兎角勝れず、いたく疲勞せる有樣を記しぬ。これ母の餘りにその職に耽るが故なりと父はかきつけたり「母は決して音樂を棄つるが如き事なし。われ等もまたその愛好者なれば强ひて母を止むること能はざるなり」それより母の健康の爲父も共に田舍にゆきぬ。其處にて悲劇は起りしなり。

田舍にゆきてより彼女が健康益々衰へぬ。折々心狂ひて周圍の人々を、辨別へず、異樣なる調子もて歌ひ初め、人々を驚かしなどしぬ。或夜熟睡せる人々は遽かに異樣の物音に目醒されぬ。人々は階下に怪しき足音を聞きぬ急ぎ燈火をとりて階下にゆきぬ。客間の戸は開かれて颯々と人々の面にあたりぬ。燈火風の爲めに搖めきぬ。室内にて彼女は人々の入り來れるも知らでピアノを彈じつゝありき。

彼女は寢衣のまゝ室を拔け出し、芝生に面する佛蘭西窓を開きて、冷やかなる夜風を入れたるなり。月光隅なく室内を照しぬ。彼女は眼を据えたるまゝ微妙なる曲を奏でぬ。人々の室内に至るやピアノに合せて靜かに低く歌ひ出でぬ。彼女は「アヴー」のメロデオーを歌ひしなり。突如として彼女は聲高く笑ひて傍に打倒れぬ。人々は彼女を二階に搬び行きぬ。彼女はそれより全く理性を失ひて再びたゝず。それより數年の間彼女はペテルスブルグにひとりの看護婦と共に住みぬ。とある朝人々は彼女の病室に逝けるを見出しぬ。床



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上に「アヴー」の數行を記せる紙片落ち散りゐぬ。われは今全てを語り終りぬ。最早疑ふ處あらず。わが父の恐怖と………

われも恐らく心狂へるならん。然かり、多くの人々はわれを屢々狂と呼びぬ。されどわれは自から然らざるを知る。われはわが一擧一動を悉く意識せるにはあらずや？　意識とや、そは餘りに過ぎたる程なるを。或はそは狂の一種なるやも計られず。人々は大方われを狂人として取扱ひつゝあるが如し。われは是迄氣附かざりしなり。われは欺かれたるなり。渠等のいかに粧ふもわれは必ず觀破すべし。あゝいたく疲れぬ。夜もいたく更けたりと覺ゆ。寢に就かん。

七月二十九日

終夜激しき不安に驅られて一睡だにもせず。をり〳〵物に襲はるゝが如く月光を浴びつゝピアノ彈ける人の影あり〳〵とわが目に映じぬ。あゝ彼女の美はしきことよ。

われは何となく自から定めがたく、わが動作をは一々反省みぬ。心確かなりしや？　卿は卿のなしつゝあることを知れりや？　われは姿見にわれを映じ見ぬ、われもまた美はし極めて美はし。嘗て如此く美はしと思ひたることあらず。

自から如此く思ひ惱むも畢竟何するものぞ？　われはなるがまゝに任せ置かん。自から



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

責任なし。神ありと人はいふ。

七月三十日

人々の忙がはしきことよ、彼處にも此處にも荷造りなしつゝあり。わが母の眼には勝ち傲れるごとき色あり。母は今迄帽子などの箱と爭ひつゝ遂に打ち勝ちて箱は鞄の片隅に押込められたるにてもあるべし。

人々はわが顔の蒼白きを氣附けるものゝごとし。われは昨夜眠らずと言ひぬ。人々これを聞きて喜びぬ。大方の人々はその病める時自から煩悶しぬ。又絶えず他の人に逼りて渠等が病源を暗示するまで人々を苦しむ。われは自からの恐怖の原因をば餘りによく知れり、されどそれを以て滿足しがたきを奈何せん。

いかに暑きことよ！　われは少しく散歩を試むべし。未だ九時なり。戸外に出でゝ他の人々の上を思はゞわれを忘れて幾分の慰安を得べし。

われは眼眩めき殆んど知覺を失ひたるものゝ如し。

瓦斯の火爛ゆく街上を歩みつゝ、大なる窓硝子上瓦斯燈の反射しつゝあるを見ぬ。燦然として黄金の流るゝがごとく、往來の人々の姿黑き影をその間に落しぬ。われは周圍の事物を悉く打忘れ反影を實在せるものゝごとく想像しぬ。われは窓外にありてその實在に達



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

する能はざるがごとき感を抱きぬ。

われは身動きもせで不亂に窓を瞶めぬ。多くの影刹那に來り刹那に消え失せぬ。

「奈何に不思議なる世界よ！」われは思ふともなくひとりごちぬ。其時われ靜止せる一個の影を認めぬ。われ正面(まとも)にその影を凝視(ぎようし)せんとする時、影はいつしか朧朧たる形に變りゐぬ。われは遂にわれ自からの影なるを氣附ける時全身に冷水を浴びたるが如く感じわが幻想はそれと共に破れ去りぬ。往來の響き遽かに烈しくなりまさりたるが如く烈しき恐怖に襲はれつゝ家路に急ぎぬ。今われは睡魔の襲ひ來るを待てり。全身の力悉くぬけ出でし如き感あり。されど何物かのわが眼瞼(まぶた)を抑へて閉づる能はざらしむ。

八月二日　ジエルシー

われは疲れず。わが心地かぎりなく美はし。わが小船は巨大なる海妖の頭に乘り、うちふる鬣(たてがみ)の搖めきにつれ、かなたこなたに漂へるがごとし。われ等は只不斷の動搖を覺ゆるのみ何處方に向へるにや定かならず。われは大概甲板にありぬ。莊麗なるは海の曙の景なるかな。初め鈍色の重く冷やかなる衣つけたる空は次第に微かなる薔薇色を帶び來り、須臾にして曙光は地平線上に漲り朝紅流れては空を染め海を彩る。海と空とは覺醒しぬ。微風あり、何處ともなく吹き起り潮遽かにどよみ渡りぬ。



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八月四日　デキナード

われは此處を愛せんかな。わが心に適ふかず〳〵のものあり。島には別莊數多きに過ぐるがごとし。されど何處に至るも風光明媚ならざるなし、海灣傾斜せる綠の芝生所々に散點す、うるはしき草花咲き香ひ、水面にその頭をうなだるゝもあり時々きまぐれの潮赤く金色にかゞやく海草を齎らし、砂上に波紋をえがき、或は斷崖の下を洗ひてさはめきぬ。灣のかなた――聖（セント）マローの尖塔は金色の夕靄に包まれて聳え立ちぬ。灣の中央に橫はる小さき島々は羅曼的（ローマンテイツク）の面影を宿し、薔薇色の雲ほのかにその上に搖曳す。

八月七日

われは最早過去を憶はざるべし。そは我にとりて何等の意義を有せず。奈何なること起り來るも忽ち現實の姿を失ふ。否、起りつゝある間もわれはその現實なるや否やを認むることは能はざるなり。さらば、われはわが父の日記中に發見せる事柄の故に如何ぞかくの如き徒らなる惱みを覺ゆるにや？　そは既に遠き過去に屬す。わがかの日記よみたるより早や數十日を閲するにあらずや。さるにても祖母の姿のわれに付纏ふことよ。われは彼の女が白き衣をつけ、月光を浴びつゝピアノ彈ける姿をまざまざと見ることを得、われは又開け放ちたる窓より冷やかなる夜風の肌に觸るゝを覺ゆ。「アヴー」の曲奏でつゝ彼女は大な



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る瞳をはりて何物かを瞶めつつ遂に他界にさまよひて不歸の人となりぬ。

　われはもの思ひに疲れぬ、外出すべし。

　靜かに美はしき午後。われは綠なせる灣のほとりを逍遙して展けたる果樹園（オーチャード）に來りぬ。われはやがてたわわに實のれる林檎の木影に腰を下しぬ。木の間を洩れ來る日影靜かに强くわが面を照しぬ。丈高き草の中に熟せる木の實の落ち散りたるがかすかに香ひぬ。潮は遙かなる方に引き去り、一帶に銀色の縞を殘しぬ。縞の盡くる處白浪日光に舞い狂ひぬ。

　われは眼を閉ぢぬ。靜寂の中に自から融けゆくがごとし、聞ゆるは妙なる虫の羽音と微かなる流れの歌のみ。

　われは半ば目をひらきつつかなたの流れの岸に一群の婦人を見ぬ。かれ等は白きリンネルをまとひ、或は立ち或は跪坐づきぬ。われは何故とも知らず朧ろ氣に‘Ich horte ein Bachlein rauschen’（われは小川の囁きをきく）の曲を吟みぬ。われは再びわが眼を閉ぢぬ。二時餘り彼處に橫たはりしと覺ゆ。われは二度三度まともに太陽を瞶めぬ。われは直ちに眼を閉ぢぬ。暫時は煉瓦のごとく燒けたる海中に漂へる白き斑點わが眼に映じぬ。

八月十一日



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは此處にありて屢々無聊に苦しめらるるに至りぬ――僻く耐へがたき一種の感。われその思ひに襲はるる時は眼前にわが瞶めつつあるものの他は絶えてわが意識にのぼり來たらず。われは全く唯だ一つなる想ひに囚はる。

今朝もわれは靜かに坐しつつ海を望みぬ、その時われは海の他なにものをも考ふる能はざりき。聽てわれは眼を轉じて別莊のある方を眺めぬ。わが想ひ忽ち別莊に囚はれて、その他のことを忘れさりぬ。われはわが眼に映ずるものを周圍のそれと關連して思惟すること能はず、かくしてわが神經は著しき疲勞を覺えぬ。われは眼を閉じて全てを忘れんと試みぬ。殘れるは只だ僻く不快なる感情のみ、

八月十二日

われは再び不安に驅られ、不滿絶えず心の中に生じつつあり。われはわが事業を成し遂げぬ、されど奈何にして場に上すべきやを知らず、何人か克くわが音樂論に耳傾くるものぞ? 世の人はわれを狂へりと嘲笑せざるや、或は習俗(コンヴエンシヨン)を破壞するものとしてわれに拳を擬することなきか? わが依り賴むべき人この世に唯一人あり。われはかの君の何處にあるやを知らず。かの可憐なる少女の故に決鬪をなし給ひてより何處にゆき給へるにや? 恐らく君はわれに對して最早何等の與味をも感ずることなかるべし。われはかの折相互



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にわれ等が心を許しぬ。われは今切に君を求む。われはわが勝利（トライヤンフ）を共に別つべき何人かを要求す。わが作物は何人が奈何に嘲るも必ず勝利なり。渠はそを全く了解すべし。おお何故にわが生のかくのごとく常に孤獨なる？　われはわれを解する何人かを得てわれを完成せん。こはわがあらゆる思想と感情に於て全く孤獨なる時奈何ともなし能はざるところなり。われは今も尙ほ君の注目をひくべしと思へり。われは依然として美はし——否初めてかの君に遇ひまつれる時よりも更に美はし。——わが肌雪のごとくわが眼は大なり。われはかの君をよろこばしむべくあらゆる力を注ぐべし。若し君のわが傍にありてわれの君を愛するときは人々はかの戀になやめる眼（liebes—kranken Augen）を持てる少女の故にわれ等の間を遠ざくべし、ああ彼女は憐れなるかな、されどわれはともすれば羨ましき念にからる。

八月十三日

終夜われは一睡だもせず。わが心は空虚（ブランク）にしてなにごとをも考ふる能はず、床上に悶え苦しみぬ。蒸暑く耐へがたきまま窓を開き帷帳（カーテイン）を排しぬ。されど微風だに入り來らず。萬籟寂たり。われは横たはれるまま眼を見開き暗黑を瞶めぬ。われは不安の苦悶に驅られ、わが頭を床中に埋めぬ。奈何なる痲醉劑もわれを癒すこと能はざりしならん、われは全く



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

絶望しぬ。かくて身動きもせず黎明を待ちぬ。

激しき身内の疲れは遂にわれに打ち勝ちたるなるべし。われは漸やく不安の眠りに落ちぬ。軈てわが耳になにとも知れず合唱(コーラス)の聲きこえ、現實の世界にわれを醒まさんとしぬ。われはその聲を强ひて退けんとつとめぬ。されどそは次第に高くなりまさりぬ。われは遂に眼を開きぬ。

日の光わが室に流れ入りぬ。わが窓の樹上に集まれる小鳥の群れ、淸らかなる朝の大氣に翼をふるはせつつ喜々として囀づりぬ。

オオ、われを壓する如き懈怠の感よ。生活は再び初まりぬ。世界は自然の聲に目醒めぬ。百鳥の歌に充ち溢れつつある純潔なる活力(バイタリテイー)！

われは全く疲れはてぬ。われは歩調を共にすること能はざるかの永遠の活力(バイタリテイー)を忘れんことを願ふ、否、この世の全てを忘れ去らんことを願ふ。われは床上より窓の傍に蹌めき戸を閉ぢ帷帳(カアテイン)をひきて日光の入るを防ぎ再び床上に横はりて眠りぬ。

八月十四日

今尙ほ不快なり、不滿足なり、苦痛なり、煩悶なり。われは書くこと能はず、讀むこと能はず、一切をなすの勇氣全く失せはてぬ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八月十六日

昨夜の榮光（グローリ）はわが憂欝（メランコリー）を全く拭ひさりぬ。われは殆んど神のごとき滿足を覺えぬ。ああわれはかくのごとき默示に接することを得んとは！　幼きより憐れに呻きつつあるわれのごとき者のかくのごとき至福を身に受けんとは！

ああ奈何に靜かに風の吹きつつあるよ――われは今窓に倚りつつ輝やける海を望めり。今日われは全き海の美を感受することを許さる、病的なるわが精神は何れにか消え去りぬ……日は綠の葉蔭を洩れて美はしく輝きぬ……ああかの哄笑せる偉大の太陽！　ああ莊麗なる自然の姿！　名もなき小草に至るまで歡樂を以て鼓動せるがごとく見ゆ。百鳥歌ふ。かれ等の歌に哄笑あり、理性の思議する能はざる純潔なる至福の哄笑――われは悉ゆる苦痛、悔恨、希望を嘗めつくしぬ。われは今全く生活の樂に醉ひつつあり。

完全無缺の世界よ！　太陽は赫焉として萬物を彩る。鳥はそれを歌ひ、海はそを囁く。われも又莊大なる創造（クリエーション）の一部を形造れるなり。かくいへばとて何人かよくわれを咎むるものぞ？　若し咎むる人あらばそは狂人なり。渠は只その病的なる幻想（ファンタジー）を通じてのみ世界を觀じつつある人なり。

われは奈何にしてかかる變化のわが心に生じたるかを記さざるべからず。そは誠に奇蹟



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のごとく來たりぬ。

抑も水晶莊(ピエノクリスタル)と呼べるは洞窟のごとき土臺の上に立ち幾多の神秘なる高臺を有する驚嘆すべき場所なり。われは昨夜まで一度もその價値を認むること能はざりき。

莊の一面は海に向ひ、廣濶なる土地の上に建てり、そは美はしき夜なりき。水は穏やかに澄み渡りぬ。灣を迂回して遙かかなたに見ゆるは倶樂部の建物にして色彩燦然たる飾光(イルミネーション)を海の面に投射しつつあり。脚下に靜かなる漣の音きこゆ、神秘(くす)しく光れるものあり、いづくともなく輝きぬ。空は紺青に深く星辰燦爛として高く天上に懸りぬ。九時頃なりき。

われは微かにわが座せる上の高臺に建てる塔の輪廓を見ることを得ぬ。

われは又わが座せる處より洞窟の階段を眺むることを得たり、階段には飾ある瓦斯燈あまた點せられぬ、デキナードの人々は人波をつくりて、かなたの道より流れ入りぬ、渠等は廣場の卓(テーブル)に座を占め、ビール、珈琲(カフイー)などとり〲に飲みつつ夏の夜の歡樂に耽りぬ。柱廊(コロンネード)の下には匂牙利曲(ハンガリヤミユージツク)あるはストラウスのウオルツなど奏でつつあるチガネスの管樂隊(バンド)あり。淺黄の服付けたる男によりて指揮せられつつ曲はいと輕快に進みゆきぬ。渠はいみじき節奏(リズム)につれ身體を前後左右に打振りヰオロンを彈きつつ舞り狂ひぬ。聽て一しきり曲の終りを告ぐや卓上は遽かに談笑の花咲きいでたるがごとく色めきぬ、給仕の忙がはし



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

げに奔走せるが見ゆ。

高臺(テレース)の周圍をめぐれる巖窟の界に雅致ある柵ありて處々にナスタリアムの蔓這いまつはりぬ。微風徐ろにその間を渡りて戰ぎぬ。綠葉は瓦斯の光に照されて蒼白き色を呈しぬ。

さなり、そは驚嘆(ワンダーフル)すべき夜なりき。偉大なる自然の姿は隨處にあらはれぬ、淸らかなる星辰の光りに　海の囁きに、靜かなる空に。

われはかくの如き自然に對して何等の畏怖を感せず、只が微かなる驚嘆の懷に抱かるる心地す。人々の高き談笑と奔放なる樂の音とは微妙なる調和の極を盡しつつあり。われはひとり超然として歡樂の聲に耳傾けぬ。そは尋常に、官能を刺戟する單なる肉感の曲節(メロディー)にはらあず、又は個々なる音符の配列にあらず樂そのものの體(エンボディメント)現にしてありとあらゆるものその中に宿れり。恐らくかくの如き印象は奔放ありのままなる演奏によりて生じたるならんも一ッには微風と潮の音によりて喚起せられたる感覺と、樂の表現せる情緒との不可思議なる諧調とによりて生じたるならん。

實に生々活動の光景なるかな。給仕は山盛りなる盆を抱へ、忙がはし氣に東西に蠢めきぬ。人々が談笑の絕間に球の音かすかに聞こえ、又激しき管樂隊(バンド)の樂轟きぬ、さはいへかかる騷擾も茫漠たる夜の靜寂の中にありて無意義なる出來事とみえぬ。われは半ば眼を閉



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぢ心ゆく清涼なる夜風の氣を呼吸しぬ。

臺の外側には處々に大なる赤土の丘あり、勞働者の群、三々伍々丘の上に散在しぬ、渠等の中には女子も打混じりぬ。渠等は靜かに樂の音に醉ひつつ脚下の海灣を眺めつつあり。渠等の姿幻の如し。折々柔かき土と小石の丘より轉び落つる音微かに聞えぬ。

匈牙利曲(ハンガリアノロディー)の終りを告げたるにてもあるべし高き拍手の音はわが瞑想(レヴエリー)を醒ましぬ。われは眼をみひらきぬ。初めわれは何物をも明らかに見ることを得ざりき。軈てわれは遙かなる丘の彼方に朧氣なる二人の姿を認めぬ、渠等は次第に近づき來りぬ。

右手に立てるは黑き疎らなる鬚を有する痩形の男にして顏色稍々黄味を帶びぬ。渠は黑淺黃の服をつけ頭には黑き縁廣の帽子を頂きぬ。渠は瞬きもせず黑き瞳をみはりて何物をか瞶めぬ。傍にあるは妻にやあらん、頭にはなにも打被らず黑き縺れたる毛髮額にかかりぬ、顏色蒼白く大なる黑き眼をもてり。彼女は質素なる黑き服をつけたり。懷には眠れる幼な兒を抱きぬ。

われは二人の姿に恍惚として見入り周圍の人々を次第に忘れ去りぬ。渠等は靜かに怪しむが如き眼光もて熱心に臺の方を眺めぬ、渠等の周圍には詩的なる神秘の香漾へり。われはわが想像より造り出せる幻にあらずやと思ひまどひぬ。婦人の面には肅かにして神の如



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

き滿足たたへられぬ。ああ樂は全ての樂の體現にしてかの婦人は全ての女子の典型なりとわれは思ひぬ。

* * * * * * * * *

幻兒は少しく動きぬ。愛らしき小さき手は母の胸に觸れつつあり。彼女の面は神の如く輝き渡りぬ、彼女は身動きもせず、可愛ゆき手は彼女の頬にのびてそを輕く叩きぬ。
その時われは「聖母像（マドンナ）」が何故に多くの偉大なる畫家の好愛せる畫題なるやを初めて悟りぬ。かの婦人の面は嘗て畫かれたる「聖母像（マドンナ）」の奈何なるものよりも更に美はしく思はれぬ。その面は恰かも月光を浴びたるがごとくくすしく光りぬ、美しく縺れたる毛髮は後光の如し。幼兒の顏は仰向になり小さき手は天上の星を捉へんとするがごとく差延べられぬ。

* * * * * * * * *

われは立上りてかの姿に近づかんと丘の方に歩を運びぬ。されどわれ等の間には柵ありてわが近づくを拒みぬ。已むなくわれは巖石の階段を少しく下りぬ、われは永刧にかの姿の消えざらんことを祈りぬ。

八月十九日

全ては過ぎ去りぬ。最早つぶやくの要なし。われは一週の樂しき日を享樂しぬ。われは



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此の上尚ほかかることを貪らんと願へるや？　七日の間われは凡そ聞きたること、見たること、感じたることの全てを愛し、愉快なる生活を續けたるなり。われは何等の恐怖、煩悶をも懷かざりき。われは完全無缺なる世界を見たり。幼な兒のわれの傍らを過ぐるを見て微笑みぬ。時に人生の美に對して高く笑ひぬ。ものとして階調ならざるはなし。全てのものは起らざるべからざるが故に起りぬ、われは讀むことと書くことを願はざりき、只だ至福至幸を以て滿されぬ。

　されど今全ては過ぎ去りぬ。われは徒に太陽の光の中にそを求めぬ。われはうるはしき花に求めたれど何物をも見出す能はざりき、海はわれにとりて茫々たる沙漠のごとく星辰の光もわれに對して冷やかに輝りぬ。

　われ若し斯のごとき幸福を束の間にても味ふを得んにはわが持てる全てを與ふるも苦しからず、舊き煩惱は再び歸り來たりぬ。

　わが窓側に咲ける花の上を懶げに飛びかふ一匹の蜂あり。自然は常のごとくその樂器を奏でつつあり。われは啞然たり。わが聲はわれに來たらず。わが眼しきりに痛み頭は施轉しぬ。

八月二十一日



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今は此處もわれにとりて中々うとましき處となりぬ。われは最早一日も早く去らんことを願ふ。水晶莊すら全ての美を失ひぬ。殘るは淒婉の趣きのみ。われは唯だわが作物に就てのみ思を凝らし、何處にて場に上すべきやを思ひ廻らしては失望しぬ。

八月二十二日

われは遂に渠の君に遇ひぬ！　われは遂に渠の君に遇ひぬ！　わが頭は火の如し。ああ實に氣高き姿なるよ――かの驚くべき夜「クロイツエル、ソナタ」を奏でしをりと少しも異ならず。セヴエライン、セヴエライン、同音にあたりの空氣は鳴り渡りぬ。われ書きつつある間も數千の顏わが周圍に群がりぬ。そは全く渠の君の姿なり。

われは海に沿へる並木の陰はしき道の下に佇立みゐたり。折々微風來りて塵埃をあげぬ。太陽は赫焉として白砂金色に照り輝きぬ。渠とある丘の上に顯はれし時、全身紫金の色に包まれぬ。渠は暫時靜かに立ちゐたりしが、軈て帽子を脫ぎ身體を搖り動かし渠の脚下に海灣を望める時淸新なる空氣を吸ひ入れぬ。

渠は兩脚を堅く蹈みしめつつ、ヴエラスケスが畫ける像の如く立ちぬ。渠が姿のなんぞ莊麗なる、頭を後方に傾け漆黑なる毛髮は靑白く透通るが如き顏に垂れぬ。われはわが眼

の痛む迄渠を瞶めぬ。われは又渠の上方に頭と肩の幻を見たり、眼はヴヰオロンの弓の行方を追ひつつさながら、かの一節に達せるが如く

われは丘の下に立てる木に倚りかかりぬ。われは渠の君の跫音すら聞かず。わが傍を過ぎつつふと、わが姿を認め歩みを止めぬ。われは心穩かならず、わが胸頻りに波打ち思ふことすら容易に口に上らず。

極めて打ちくつろげる樣に、君は少しく散歩すべしと告げ給ひ聽てわが父母の安否を問ひぬ。この時われはかの薄命の少女の事なにとなく思ひ出しぬ。されどそは忽ちにして消え去りぬ。われ等はありとあらゆる事をそれよりそれと樂しく打語らひぬ。われは長らくの間君に遇はざりし如くには感せず。務めて君は親し氣にわれに對し給ひぬ。われ等は佛語もて語らひつつ凡そ二十分の間其處此處を彷徨ひぬ。われはその間わが作物に關し絕へず語りぬ。君は若し差支へなくば一見すべしといひ給ふ。われは感激に心狂はん許り、殆んどわれを忘れて草稿をば必ず〳〵仔細に見給へと切に乞ひぬ、君は甞て露國に於ける劇

場の頭取(ディレクター)を務めしをわれは知れり、われは君がわが爲に多少の力を盡し給はんことを深く信ずるものなり。われ等は後日を約することなくそのままにして別れぬ。君は近き内に再び遇ひまつるべしと慇懃に頭を下げ靜かに去り給ひぬ。

われ等は目眩めき、心さみに亂れぬ。そは全く時のまに起りぬ。われ等の邂逅は果して何の意義なるやを捕捉する暇もあらざりき。われはまた再會の日を約せざることを今更ながら悔ひぬ。

奈何に愚かなりしよ！　われは君に會ふべき日をいかにして語り得ん？　われ等の再會を父母に告ぐることすら敢へてなし得ざるを。われ若し、君の事を語らば父母は直ちにデキナードを去らん。われはかの君の何處にあるやをさへ知らず、されど君はわれを見出すに左程苦しまざるべし。われは君のわれに對して少からず興味を持ち給ふを知る。ああわれは今暫時待たざるべからず、その時何事か起りきたらん、しかもわが不安の念何故にかくは烈しき。何故に……

かく書き記しつつある間もわれは思考すべきことあり。

八月二十三日

終日われは君の姿を見ず。われは殆んど待ちあぐみぬ、されどわが心には動かすべから



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ざる信仰あり。君必ず來るべし。海は君の御名をつぶやき、風はそを囁く。綠の葉に、日の光りに、靜かなる水の流れに、いたる處にわれは君の面影を見る。自然は君が氣高き姿を宿す額緣（フレーム）なり。ああセヴエライン、セヴエライン、セヴエライン……。

八月二十四日

ただ束の間なりしが――再びわれは君に遇ふことを得たり。君はわが作物に關して語るべき時と場所とをわれに訊ねぬ。われはとりあへず明日を約しぬ、父母は二三の友と晩餐を共にすべく夕より出で行く筈なれば。君はわが手に名刺をすべらしぬ。われは必ず行くべしと約しぬ。われは今只だ一刻もその時の早く來たらんことを待ち望めるのみ。

われは君を思ひ君に關してわれの知れる限りを回想しぬ。數年かの莫須科の夜に於ける君の姿はもつとも深くわが腦裡に刻まれて忘するること能はず、これに次ぎてわが聞きし君か不德なる行爲?を想像せんと試む。ああ哀れの少女よ、今何處にかある? 彼女は怨めるごとき眼もてわれを瞶めつつあるがごとく思はる。そはわれに對する戒めなりや? ああわれは奈何なる事ありとも君の許に行かざるべからず。なんぞ危惧するを要せん。されどわれは長居せざるべし。

八月二十五日



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは身仕度調へぬ。夢見つつあるがごとし。なにとは知らず能ふかぎり美はしく裝ふべくわれを誘ひぬ。われはかのロリマー家の舞踏會のをり着せるものを撰びぬ、われは又肩と首に紗のヴエールをかけぬ。われは今姿見に打向ひ自から美はしさに眩めきぬ。今夜は徒に過ごされざるべし。君は必ずそを認めん。われは嘗てわが惡める多くの人々より心地惡しき賞讃の辭をききぬ、今はわが………

行くべき時は來たりぬ。

八月二十七日

目路の限り開けたる海上に帆を揚げ小舟を曳きつつ走り行く船のかづ〳〵。われ此處にあるはいぶかし。

紺青の水はわれ等の進みゆくままに白き泡沫を飛散しぬ、日の光われ等を照せども微風たへず心地よくわが毛髮吹きわが眼瞼を冷しぬ。

われの他にただ二人あり。一は言ふまでもなくセヴエラインの君にして他はわれ等の雇へる船夫なり。二人は共に何事をか語らひつつ凧を捲き初めぬ。帆索の軋むことよ、遙かにわれは岸邊を望みぬ。何處へ？ 何處へなりとも、そはわが問ふべき處にあらず。われは尙ほ夢む。夢永久に醒めざれ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君を訪ねし夜の美はしさよ、恰もわれかの水晶荘(ビラクイスクル)にありし夜のごとかりき。君はデキナードより程遠からぬ高き絶壁の上に建てられたる別荘に住ひぬ。われの彼處に近づきし時開かれたる窓よりオキロンの音漂ひ來ぬ。海は漾々たる月光に照らされ銀色を帶び靜かなる湖の如く輝きぬ。風凪ぎ渡りて夜暑し。見上ぐれば晴れたる空に星辰微かなる光を放ち遙かに黑く神秘の色を帶びたる小さき島々は妖怪の如く水面にたちぬ。耳を澄ませば岩打つ波の音僅かに聞こえ、濱邊は細き銀線もて縁とられたるごとく見えぬ。

館の前に小さき森あり。樹木鬱蒼として高く聳立ちぬ。われの室に導かれし時セヴエラインの外に二人の客の姿を認めぬ。われは少しく躊躇しぬ。半白の髮を頂ける老婦人と丈高く美はしきその娘となり。彼女は今課業を終へて晩餐を共にすべく薦められぬ。客は突然われの入り來りしにいたく驚ろける樣なり。わが服裝の彼等の注意をひけるはいふまでもなし。老婦人はセヴエラインの方をいぶかし氣に打見やりぬ。

客は軈て辭し去りぬ。われ等二人は靜かに相對しぬ。わが胸頻りに波打ちぬ。いまし出で行きたる客のわれに對する素振なにとなく穩やかならずわれは見てとりぬ。君の黑き瞳はわれを全く虜にしぬ。今は奈何なる災厄身に逼るもわれは一寸も動くまじ。

別荘は可なり整ひゐぬ。われ等が座せるは灣に面せる室なり。われは窓側に至りて海の

方眺めぬ。君の姿至る處にあらはれわが方を瞶めぬ。

やがて君は草稿を持ち來れりやと訊ねぬ。われは卓上を指さしたるまゝ尙も海を瞶めぬ。君は包を開きぬ。われは紙の音を聞きぬ。約一時間餘り君は靜かに座しぬ。われは君の精しく、わが作物を讀みつゝあるを知りぬ。

ものみな靜かなり、輝くは海の面のみ。折から微風輕く起り、わが毛髮を掠めて去りぬ。紙の音再びカサコソと鳴りぬ。われは程なく傍に君の足音を聞きぬ。

「わが讀みたる處によれば、普々のものにあらず」君は靜かに口を開きぬ。

われは君の言葉を解する能はざりき。わが魂はいつしか脫け出でてわが身體は空蟬のそれのごとく思はれぬ。われは幾度か「普々ならず」といふ言葉を繰り返してその謎を解かんさせり。われは漸く夢心地より醒めたるもののごとく視線を轉じぬ。君は窓側に座を占めわが作物に對し樣々なる批評質問など試みぬ。君は曲中の言辭光景等に關するわが幻想を悉く解しいたく驚き怪しめる樣なり。軈て君は機よければ共に一曲奏でんと云ひ出でぬ。

「共に奏するに仔細なからん――クロイツエル？」

われ思はず身內震へぬ。なにものか君の暗示の中にわれを恐怖せしめしものありたるなり。われ奈何で躊躇すべき。かくの如き好機の奈何であるべき。

「さなり、なになりと――」かく云ひてわれ等は共にピアノにゆきぬ。

「樂譜をば………？」

「否　われは悉く暗誦じたれば」

「卿もか………さらばこのまま彈ずべし」

君はピアノの上に立てたる燈火を吹きけしぬ。月光室内に流れ來り、君の姿を照らしぬ。白き肌愈々白く見えぬ。

われは奏でつつ奈何に物狂はしく感じたるよ！　われは全く何處にあるやを忘れぬ。二の大なる力ありて絶えず同情の極致に働き全神經を擧げて他の缺けたるを補ひ全個性を融合し完全無缺の大調和を計りつつあるるを感ずるのみ。われは何物をも思ふこと能はず、また見ることも能はざりき。われは只自然の法則に從ひて動きつつなにものもわれ等を止むること能はざるがごとく感ぜるのみ。

われ等は遂に一點一劃の誤謬なく奏で終りぬ。曲終りを告ぐるやわれはそのまま打倒れ、次でわが瞼に激しき痙攣を覺えぬ。その時われは白熱のごとき光室内に充ち溢れたるがごとく想像ひぬ。漸次にわれはわれと共に他の人あるを意識し一種の恐怖に襲はれぬ。われは遂に正氣にかへりぬ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

セヴエラインはピアノの傍に腰打かけつつわが方を瞶めぬ。君の弓手より落ちぬキオロンは尙も左手を放れづ。

* * * * * * *

その夜われは再び夢に白百合の花となり森の中に咲きつつありぬ。風折々わが面をかすめぬ。軈て傍に人の跫音を聞き身内に鋭どき刄先を覺え、夢見るがごとく垂頭れたるまま何處ともなく搬び去られぬ。

オオ母君………われは卿のものにあらず！　卿は決してわれを解すること能はざるなり、白き衣を纏ひたる婦人は然かわれに告げぬ。彼女はわれに從ひつつあり。今し彼女のわれ等が船に水を渡りて幻の如く近づけるを見ぬ………。

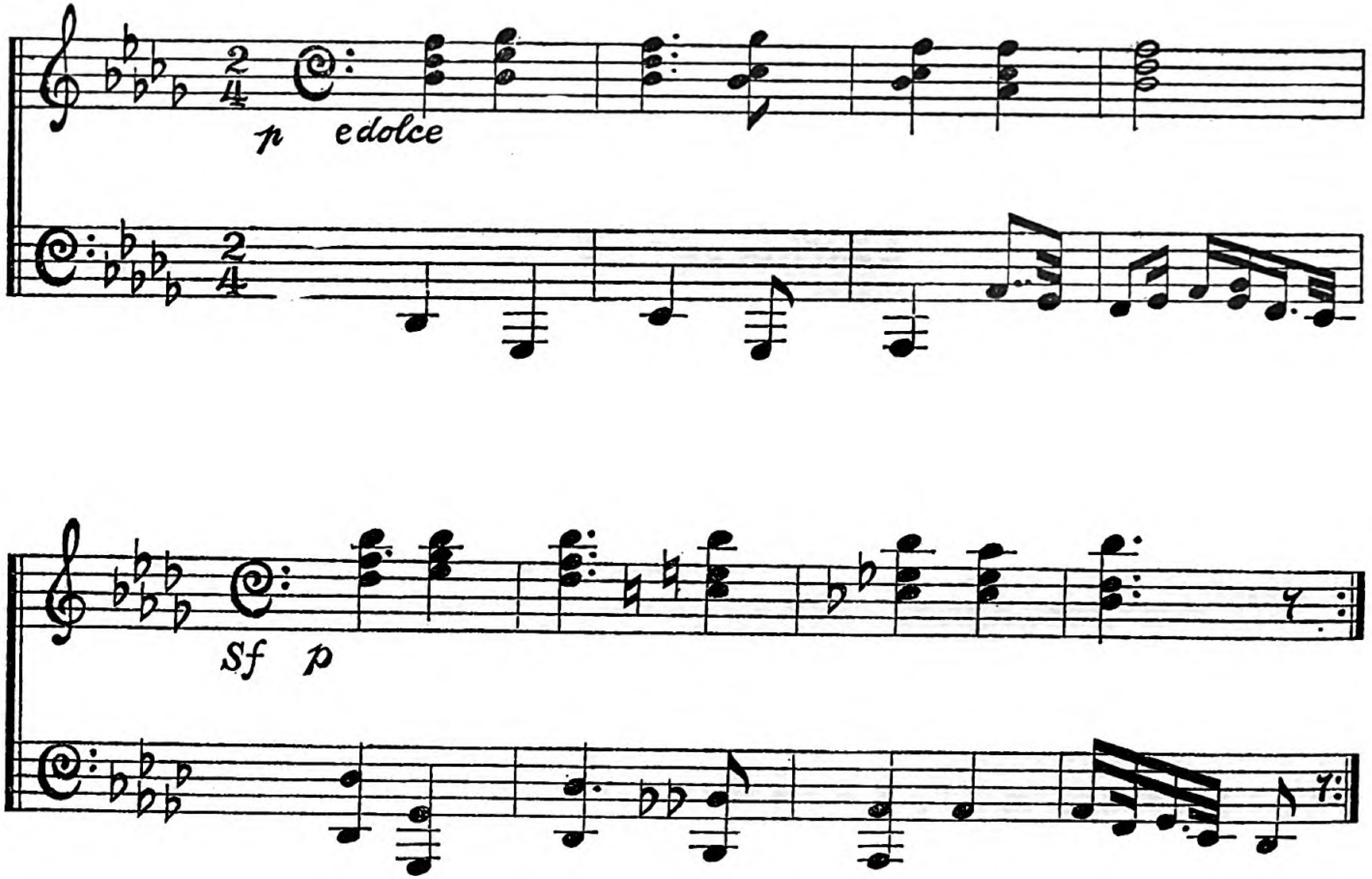
八月二十八日

汽車飛ぶが如くに走り、窓外の景色畫のごとく移りゆく！　うるはし！　特にわれ等のためなるが如く思はる、日の光一面に緋の罌子粟畑を覆ひ、中に男女の姿あり。實に風情ある姿なるよ！　思ふ間もあらず、忽ち小なる白き家の一群眼前に横たりぬ。そは家禽養成所なり。平かなる一望限りなき原野は低き生垣を隔てて遙かに展かれぬ。

「ヒヒヒー」生垣に昇れる腕白は嘲笑しつつ頻りにわれ等が方を見て手を打振りぬ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER






Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奈何に電線の踊るよ！　われ電線に對する毎に挫折せる野心の象徵を見るがごとき心地す。あちらに！　あちらに!!　止まりて考ふる暇など奈何であるべき？　われはアパショナタの第一進動を奏でつゝあるがごとく感ず。セヴエラインはわが爲に低音部を試みつゝあり。さなり、われは、高音部なり。

なほわれはアパショナタを思ふ。日今やますます沈んさすわれ等はアンダンテにあり。

（前頁樂譜は此の次に來るべきもの）

八月二十九日

田園は次第に低く貧弱に傾きつゝあり。鈍き灰色の田畝には只だ見るかげなき小屋と小さき流れあるのみ。かくのごときもの數百哩。荒寥の面影至る處に擴がりぬ。

われ等は軈て豫定の處に着すべし。

八月三十一日　莫斯科。

セヴエラインはわが作物に關し樣々物語りぬ。渠は此處の劇場にわが作を上すべくわれに薦めたるなり。われは感激の渦中にあり。われに對する君が好意何ぞ切なる。われは昨日奈何にして君はわが父を知りしやと尋ねぬ。一八四五年ペテルスブルグの大學にて君の父君とわが父と同窓の友なりし由語り出でぬ。同じく四六年君の父君は結婚の式を擧ぐると共に莫斯科に行きぬ。わが祖母は五三年に逝かり、祖父と父とはその折露都を去りて



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

セヴエラインが家族と居を同じうしたりしなり。

われはまたエリザベス、カフタルに關し知る處を君に訊ねぬ。君の兄君なる人は父君と共に露都に行きし際彼女を見たる由、その時兄君は漸く四歳未滿なりしとか、その後二人の兄弟は幼な同志のともすれば口論などなせる末兄君はカフタルの姿見ざる弟の共に語るに足らずと嘲笑せるを君は今尙ほ明らかに記憶すと話りぬ。

九月九日

ああ時の迅やかに飛び行くことよ！　此處に來りてより早や一週を閲しぬ。每夜われ等の外出せざること稀なり、セヴエウインは多くの人々を知れり、それ等の人々に一々われは紹介せられぬ。わが草稿は幾多の推薦狀を附せられ既に歌劇會社に送られぬ。われは豫習を監視しわが指圖を與ふる手筈なり。全ての事わが意のごとくならざるなし。聽集は絕對に暗黑中坐すべし。管絃隊及び唱歌者は音の疏通を妨げざる限り薄き不透明の幕によりて隱さるべし。

全て滯りなく通行せば最初の試演は十二月の半は頃なさるべし。

九月十五日

われは過去を回想するの時を有せず、萬事はわが作物の成効如何に懸る。セヴエライン



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の君も演奏に加はる筈なり。終日君とわれは共に練習を續けぬ。夕に至れば殆んど豫習ならざるなし。

今宵は若き詩人われ等と共に豫習に出席すべしとなり。われは特に美しく裝はん。君もそを好み給ふがごとし。われ夕に盛裝を凝らす時、身に著しき力を感ず。黑色に對するわが好みは今は全く消えて殘をも止めず。

九月三十日

わが以來の生活今は朦ろ氣に恰かも夢幻のごとし、われはかの灰色の古き家を目前り見る心地す。十字街の塵埃に蓋はれたる枝風に搖めきつつあり。かなたの長屋の窓には新聞紙の貼られたるが見ゆ。

人々は未だ暑避の快樂に耽りて家路に戻らず。されどわが父母は既に歸宅したるべし。渠等はわが姿を見出さざりし時奈何になせし。恐らく階上の大なる醜くく冷たき室にわが唯一の財寶なるピアノを茫然と眺めつつ立盡しつつあるべし。わが父の面は陰鬱なる影に被はれて再びはるることなからん、わが母は——、

われは何をなしつつありや、過去をのみ憶ひ居るにあらずや？　われはそを願はず。言ふまでもなくわれに罪あれどそをわれにのみ歸するは餘りに殘酷なり。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われはわが室のピアノの上に懸かれるわが肖像畫にかへりたるが如き心地す。そはわが六歳の折書かれたるものなり。青白く憧憬るるがごとき眼光に一點の微笑を帶べり。そは畫家の惡戯にて、われは決してさる微笑をたたえしことなし。されどわれは今相對して垂頭れつつある父母を見下ろして微笑みつつあるが如く感ず。われは畫家の點じたる微笑を變ゆること能はず。われはまた物言ふこと能はず。われは一個の肖像畫にすぎざればなり、されどわれは頻りに「あはれ、あはれ……」と叫ばんことを願ふ。顏には依然として微笑を帶びつつ。

われこの最後の頁を殆んど裂き捨てんとせり。われ徒らに悲嘆に暮るるもなんぞ？　われは遂に幸福なるにあらずや？　もしかくの如きことを思ひ續けてわが幸福を破るが如き事あらばそは即ちわれ自からの過失あらずしてなんぞ。

わが兩眼赤くはれたり。瓦斯の光にては分明ならざるべし。われは急ぎ衣服調のへ出で行かん、然らざれば遲刻すべし。

十月三日

眠安からず。今朝限なく心地惡し。わが美はしさ次第に消えゆくがごとく感ず。未だ嘗てあらざる皺の如きものわか顏に顯はれきたりぬ。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヴセエラインが友なる人々屢々われを恐怖せしむ。かの人々の言ふ所悉く淺薄にして聞くに堪へず、われは冷やかに嘲笑ふのみ。昨日渠等の姦しかりしことよ。

われはまた百合を夢みはげしき恐怖もて醒めぬ。わが肉萎縮しゆくがごとく感じぬ。夜に至りてわれは頭熱り風邪に冒されたるがごとく感じぬ。獨り暗中に坐しつつわれは傍に祖母の姿のごときもの佇めるがごとく覺ゆ。われは彼女の何事か云ひ出づるならんと息をも吐かず耳傾けゐたれど遂に一言も發せざりき。軈て彼女は彼處ともなく消え失せぬ。輕き衣摺の音かすかに聞えぬ。

セヴエラインの君、今までわれと語りぬ。君は昨夜友の許に行きて終夜語り明かしたる由、友なる人々の樣々なる噂をわれは聞きぬ。豫習の後にて約八名の友一團となりて三鞭(シャンパン)を拔き煙草を燻らしつつ藝苑の物語に皆自からを忘れたりと。かの詩人はその席にて「幻想(イリュージョン)」と題する自作の新詩を朗讀せしとなり。そは男子の獸性に對する婦人の熱烈なる戀愛を歌ひたるものなりとか。セヴエラインはそをいたく賛へぬ。それより渠等は共に歌ひて思ふ樣醉ひくづれたりといふに話を結びぬ。われは答をもなし得ざりき。君もわが心地すぐれざるを見給ひてか話を他に轉じぬ。最後に餘り心身を勞することなく次の豫習の時迄暫く休養せよとの忠告を與へぬ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは君の友の事とし言へば其の物語りもなにとなく面白く聞きたるにこの度は如何しけん、何等の興味もあらざりき。君の來る前われは早く氣萎へ身内わななきいたりしなり。

十月十日

恐怖決してわれを去らず。この後も絶へず付纒ふなるべし。そは外界より來りしにはあらでわが心の内に生じ日々成長し行くなり。わが全身悉く恐怖に包まれたる時は奈何に—何人かよくそれを知らん？　わが顏も日に瘦せ衰へつつあり、セヴエラインもそを氣付きたる樣なり。眼もまたその表情を失ないつつ次第に大きくなりゆくがごとし、すべての智慧も眼より逃れゆくなるべし。われは最早わが姿を眺むるに耐へず。

今朝われはフトわが病氣の後夕の沈みつつある海上を茫然と眺めつつありし時の事をば憶ひいでぬ。海は一面に狹霧もて包まれぬ、霧は次第にわが方に進み來てわれはそれより奈何にしても逃るる能はず、遂にあたりは暗黑になりはてぬ、………されどわれは死力を盡してこの中より逃れ出づべし。

かくのごときことを思ひ續けつつわれはなすべき事多きを忘れぬ。わが作は滯りなく演ぜられつつあり愈々公演の日來らば大なる勝利(トライシヤフ)を贏得ることと疑なしと人はいふ。曲中の

旋律絶えずわが耳に響きつつあり。われは今又それのみを思ひ續けぬ。最早二ケ月餘り、わが生涯のわが日（ザ、デイ、イン、マイ、ライフ）。

セヴエラインはわれに對しいと親切なり。渠がなし得る丈の全てをわが爲めに盡しつつあり。わが姿の變りゆくにも渠は少からず心痛めつつあるが如し。渠は醫師の許にゆくべくわれに薦めぬ。されどわれは片意地にそをあくまで拒みぬ。渠は遂に怒りぬ。他の場合ならばわれ渠を恐れたるならんも、われはその折靜かに面をも變ずして確くわが言葉を翻がへさざりき。渠は種々わが片意地を責めわが將來を戒めて去りぬ。われは默して答へざりき。

十月二十日

昨日われ戸外を眺めつつわが室に坐し、例の如く夢幻の中に彷徨ひぬ。セヴエラインは露臺にありぬ、渠は折々種々なることをわれに問ひぬ。その時君の聲かすかにわが身に響き、この世のものとしも思はれざりき。われ周國を見廻せるに物として柔かく朧ろ氣ならざるはなかりき。

畢竟わが世は夢ならずしてなんぞ？　何故にわれはしか恐怖に襲はるるにや。わが夢の變りゆくのみ、ただそれなり。恐らくはわれ幸福になりゆくならん。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月一日

枯葉ハラ〱と木より落ち初めぬ。蕭殺の季は來りぬ。今はわが情調にいと適はしき時なり、とはいへ夜にいたれば赤裸々の樹木は妖怪のつきまとへるが如く、長く瘦せたる枝のかず〱或は下に萎縮せる骨許りなる指を延ばしつつあり。そは何を意味するにや？

わが樂の進み極めてよし！　人々の歌は見事に、管絃樂(オーケストラ)の豐麗なることよ。全ての演奏者はわれを希異なる天才と仰きぬ。わが作の祭壇には絶えず大なる崇拜あり。

若き詩人われ等と共に屢々豫習(リヒヤーザル)に赴く。或時渠はいぶかし氣にわれを瞶め、「今宵卿のいろつや惡し」と言ひぬ。されどわれは何事も氣に止めざりき。渠わが秘密を知るや否や？恐らく全ての人々は知りてわれを愚弄しつつあるにはなきか。恐ろし。われはわが父を管視せしごとく務めて渠等を注意すべし。

わが悶へわれを殺しつつあり。最早ながからざるべし。

十一八日

疲勞日に日に甚だし。われ誤たず心の內に感ずれど、これはと明言し能はざるあるもの次第にわが心を領しつつあり。

われはわが周圍の人々を觀察しぬ。されど渠等は何等の疑惑を懷けりとも覺えず、われ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は暫時人々の面前にありて正しく振舞はざるべからず、されど時に全てを放棄しわが胸中のありのままを打開けんことを願ふ、ああそは何人にか？

十一月十三日

渠の言葉は誠なり、われは次第に青白く瘦せゆくのみ。われ街を歩きつつ人々のわが姿をいぶかし氣に熟視しゆくが如く思はる。わが形左程に變れるにや？

十一月十七日

怪しき物の氣屢々われを魘ふ。昨夜われ床に就くや否！　大なる楕圓の顏壁上に顯はれぬ。顏の左右には波のごときもの搖めきぬ。われは直に燈火を吹き消しその形を忘れんと試みしかど遂に能はず終夜殆んどまどろむ暇あらざりき。

十一月二十六日

昨夜窓の傍の化粧臺にわれは扇子を置きたりと覺ゆ。今朝何處を探したるも見當らず。何人の持ち行きしにや？　誰も知らずといふ、われ確かに昨夜かしこに置きしものを、確かに？　然り、とは云へわが眼に映ずるもの果して眞實なりや？　われは莫科斯(モスコー)の――街のとある家の一室にあるにあらざるやも知れず。又暖爐(ストーブ)の傍に腰打かけ讀書なしつつあるはセヴエラインに非らざるやも計りがたし、恐らく――ああかくのごとく懷疑ふも畢竟



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なんするものぞ?

十二月三日

壁上の怪しき影次第にその數を增し、或は伸び或は縮みつゝあり。われは燈火を消したる後も依然として影はわが眼に映ずるなり。再びわが睡眠安からず。

午後公園を散步す。空の色青白く天氣穩やかなり、日光靜かに强く照り渡りぬ。園の周圍に砂道あり、低き鐵柵によりて道路と區別せらる。われは暫時疲れを息めんとて、ある腰掛にもたれかなたの往來を打眺めぬ。

不眠のためにやゝわが眼いたく痛みぬ。われは車馬の轟きに耳を澄ましぬ。多くの人々は皆戶外の歡樂に耽るべく外出しぬ。丈高く美はしき婦人を乘せたる馬車幾度かわが眼にとまりぬ。われは又鞭の音と馬を叱呵する別當の怪しく急なる叫びとを聞きぬ。

われは帽を脫し暖かき日光をわが毛髮に感じぬ。わが眼は忙がはしき往來の眺めより黃なる砂道の上に落ちぬ。

次第に車輪の音と馬丁の叫びとは鈍き響に變じ、遂にわれは往來のどよめきをば人と馬と鞭によりて生ぜられつゝあるを忘れはてぬ。われはわが身の何處にあるやを怪しみ初めぬ。往來の家々、園中の樹木など全て靄の中に消え去り行き、わが眼は唯だ砂道の上を





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舞ひつつある二匹の蠅の上に注がれぬ。蠅は相互に追ひつ追はれつ同じ處を飛びかひつつ何時去るべくもみえず。今は周圍の光景わが眼前に消え失せ蠅の姿のみわが心に映じぬ。

われは蠅につきて種々なる想ひを廻らしつつその蠅なることをも全く忘れ去りぬ。唯だ黄なるものの上に二個の黑點の廻轉せるかごときを感ぜるのみ。

われは腰掛つつ暫時まどろめるがごとし。フトわれに返り帽子をとりあげ家路に急ぎつつ肌寒きを覺えぬ。日は既に重き灰色の雲のあなたに隱れ去りぬ。往來の響以前に增して沈痛の趣きを加へぬ。

十二月四日

わが扇子抽斗の中に見出されぬ。われは決して抽斗に入れ置きたる記憶なし。

昨夜われ水中に沈める夢を見ぬ。容易すくは沈まず、次第に落下しゆくがごとく感じぬ。わが顏は遂に粘りある土に觸れぬ。われはやがて土中に吸ひ込まるるがごとく、わが毛髮は長き葦のごとくわが上に漂ひぬ。われは次第に土に化しゆくごとく覺えぬ。遂には只長き葦の根より引き拔かれんとしてかなたこなたに搖らつつある外何事も意識にのぼらずなりぬ。（未完）

野 枝 譯

# 未來の王國（つゞき）



「我々の防禦法は確實なものです。それと云ふのは我々と戰爭の出來るものは、アメリカ人とオーストラリア人だけであつて、其の他の人種は學術上非常に我々よりは劣つて居てとても比較になりません。そしてアメリカやオーストラリアは、太洋を距てゝも居る事ですし、趣味の一致する處から親密の度が深く、戰爭など、と云ふ馬鹿げた事は、夢にもする筈がありません。

其の他黑色人種や、黃色人種はどうかといふに、その文明は鋼鐵の大砲、彈丸等すべて二十世紀の遺物を利用して居ます。どうしてこんな舊式の武器を以て、我々のY光線の發射に對抗することが出來ませう、我々の境界は電氣で以て防禦されて居ます、燦爛たる光線の帶が、我々の同盟國の周圍を取り卷いて、小さな眼鏡をかけた者が、何處に居るか知れないけれど鍵の前に守衞して居ます。これが我が同盟國唯一人の兵士で、若しかれが一寸でも鍵に手を觸れさへすれば、立ち處に五十萬の軍隊を粉韲することが出來



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ます」

モレンはこゝ迄話を續けて來て一寸休んだ。そして更に一層流暢に話し出した。

「若し我々の文明が脅かさるゝ樣なことがあれば、それは外部の敵からではなく、多分內部の所謂獅子心中の蟲によつてゞせう」

「そんな惡い者がありますか。それは何者です」

「我々の內には無政府主義者が居ます。彼等は多數で智惠もあり、情熱もあります、現代に於ける化學者及び文藝學術の敎授は何れもそれです。彼等は現代社會の苦しみつゝある多數の弊害を以て、何れも勞働の分配及び、生產の調節に基くものとして居ます、彼等はまた文明を破壞して自然の儘の調和に歸らなければ、人生は幸福でないと論じて居る、彼等は實に危險であるのみならず、これを壓迫すればする程、一層危險の度を增します。そうしてこれを壓迫し、または脅迫する手段も希望もありません。そういふことをしなくとも、現在の處では十分安寧平和を維持して行くことが出來ますから。曾て二十世紀の野蠻時代には、刑罰の實効如何と云ふことに關して、大なる誤解が懷かれて居ました。現在では最早そんな必要はなくなりました。私有財產が禁せられてから、詐欺とか竊盜とか云ふものは全くなくなつた、また電氣を應用した防禦物が出來てか



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら、容易に人を殺傷することが出來ないようになりました、人と人とは互に尊敬し合ふ様になつて、たゞ感情上の犯罪のみ依然として存在し、將來もまた容易にはなくならないでせうが、こんな犯罪は罰しなくとも漸次減少する傾向があります。我々の時代の裁判制度と云へば、公選された名譽職の仲裁人が、犯罪や爭論を仲裁して治めるだけです」

私は立つて彼等の親切を謝し、更に最後の一問をモレンに向つて發した。

「ではあなた方は宗教と云ふものをお持ちではないですか」

「イヤ全く正反對我々は多數の宗教を持つて居ます、そして其の中には殆ど、小說に類似したものもあります。今一寸フランス國內にあるものだけを擧げても、人道敎、實理敎、基督敎、精神敎、などがあつて他の國にはまだいくらか羅馬舊敎も殘つて居ます。然し二十世紀に起つた宗敎分裂以來、無數の小派に分れて、其の信仰者も極めて少ない、從つて法王といふものがなくなつてから、隨分もう久しいものです」

ミシエルが急に横から嘴を容れて云ふ

「あなたは間違つて居ます。まだ法王は依然として存在して居るではありませんか、私はフツトした事から彼れを知つて居るんですが、彼れはピオ三十世と云つて羅馬のヴイア、デルオルソーに住む一染物屋であります」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ナント、法王が染物屋ですつて!!」
私は驚いて叫んだ。
「何もそんなに驚くことはないぢやありませんか。今ではもう法王でも誰でも、一般に職業を持つように强制されて居ます」
「然し彼れの教會はどうして居るんでせうか」
「彼れの信徒は歐羅巴全體を探しても二三千人以上はとてもありますまい」
こんな問答で以て我々は漸く分れることになつた。ミシエルは近所に下宿屋を見つけたらよかろうと云つて、シエロンがその家へ歸る途中、私を案内するやうにと話した。

街道へ出て見ると、多少强弱はあるが、何れも乳のやうに柔かな光線で照らされた家屋の模様は、何れも琺瑯質のやうに光つて居る。私はシエロンと並んで歩いて行く間に、屢々シエロンの姿を眺めた彼の女の底の平たい靴は、彼の女の歩き振りに强みを與へ、その身體に平衡を取らせた。彼の女の男裝と異ならない衣服は、餘程其の身長を低くしても、またその一方の手をポケツトに入れて歩いて居ても、何處となく品位があり威嚴があつて、侵し難い樣である。彼の女は自由に前後左右を見廻した。その態度、容貌は極めて垢拔けのしたものであつて、私を刺戟しチヤームしなければ止まなかつた、が私は密かに彼の女



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が、私を馬鹿であり嘲笑すべきものだと考へて居やしないかと危んだ。然し少なくとも私の人格は絕體に彼の女に無關係であり、彼の女は私を少しも重要に見て居ないこと丈けは事實であつた。ところで突然彼の女は、私の商業は何であつたかと質問したので、私は周章て電氣技師であつたと答へた。すると彼の女は自分もそうであると云つた。話はこれで途絕れて、二人の間に數分の沈默が續いた。

特別に大きな騷音は聞へないが、夜の空氣は靜かな音律のある響に滿ちて居た、私はこの新らしい世界の摩訶不思議な天才の呼吸を半ば、怨めしそうに聞いて居た。そして私がこの婦人の電氣技師を眺むれば眺むる丈け、益々彼の女に對して一種の慾望を起さずには居れなかつた。然しその慾望の中には多少反抗心も加はつて、益々これを煽つた。そこで私は突然彼の女に云つた。

「あなたは電氣技師であるから戀愛も科學的に調節してお出なのでせう。だから誰にも不安の念を起させないのでせう」

と彼の女が答へるには

「イヽヱそれは違つて居ます。私どもは自然に舊時代の發狂に類似した精神狀態の上に超越して來ましたのです。人類の生理狀態は今では法律上の野蠻主義や、神學的の脅迫か



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら自由に脱出いたしました、私どもは最早義務といふ誤つた殘忍な觀念の犧牲になることは致しません。けれども人と人との間に存在する自然の引力は依然として私どもには判りません、性的の情愛は過去未來現在の三世に通じて存在するものでして、其の力は強くまた變現、出沒極まりないもので御座います。今でも以前でも同じく本能は理性より強う御座います、私どもの古代より優れて居るのはそれを知つて居るばかりでなく、それを宣言して居る點なのです、私どもは私どもの内部に人生を創造し、人生を實現し人生に熱望する力を持つて居ます、從つてこれを調和しなければなりません。私どもは最早野蠻人では御座いませんが、まだ十分賢くはなつてません。團體主義が完成して男女の性的關係は全く交渉する所がありません、この關係は時としては甘い蜜のやうであり、時としては止むを得ず忍んで行かなければならぬこともあり、また或時は極端に恐ろしいこともあります。然しそのために戀愛は最早、何人の念頭にも存在しないと思はれては困ります」

私はこんな六ヶ敷い問題を議論して居ることが出來ないから話を婦人の性的の方面へ向けた。そしたらシエロンは婦人に三種類があつて、その一は好色の性情を持つたもの、その二は好奇心に驅られて居るもの、その三は全く男女の關係に冷淡なものであると云ふ、そ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れでは彼の女はどの種類に屬するものかと問ふたら彼の女は私の方を稍々高慢げに眺めて云つた

「男子の方にも種々の種類があります、殊にその中一番極端なのは無禮な方です」

この答は如何にも現代的であつて私の今迄想像して居たのとは餘程異なつて來た。それだから私も今迄使用して來た言葉を改めて、二三のつまらない問答を彼の女と交換した後

「失禮ですがどうかあなたの御本名をお聞かせ下さいませんか」

「私にはありません」

彼の女は稍々驚いたやうな風にこう云ひながらなほ口をいつで

「あなたは婦人が男子の方を喜ばせるために舊時代の婦人のやうにマーゲリットとかテレースとかジアンとか云ふ洗禮の時の名を持つて居なければならぬとお思ひですか」

「あなたはいつでも私の反對々々と出て來て困ります」

私は驚くだろうと思つて彼の女を眺めたが、それは殆ど彼の女には響かないらしく、彼の女は聞かぬ振りをして居たので、最早疑ふ所もなく彼の女は媚を賣る類の婦人であると思つて、露骨に彼の女はチャーミングであり、彼の女を愛して止まないことを數度繰り返して述べ立てた彼の女は平氣でそれを聞いて居て最後に云つた



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あなたは一體何をおつしやるんです！」

私は大いに當がちがつて狼狽した。そこで彼の女はまた壓迫的に私の餘り口不禮なことを鋭く非難した

「あなたのやり方は全く野蠻人その儘です」

「ですがあなたはどうして私の云ふ事を容れて呉れませんのです」

「私はそんなことは今云つて居ません」

我等二人は大きな楡の木の影にあるベンチに腰を下した。私は彼の女の手を握つて、自分の唇に押し當てようとしたら、俄然私は何物をも感せず、何物をも見ないやうになつて、昔の儘の布團の上に横たはつて居た。

私は朝の日光に襲はれて、眼を擦つて居ると、下女が私の眠むたそうな樣子をしてる前に立つて云つた

「あなた、もう九時ですよ。あなたは私に九時に起こせとおつしやつたものですから起しに參つたのです。更めて申しますが九時ですよ」

（完了）

——六月十四日——

淺野友譯



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 戀愛と結婚（續き）——エレン・ケイ著——

## 性的道德發展の過程

### 五

自制が却て只人生を阻害するものとなる時でも、性的本能支配のための醫藥として只自制のみを推擧する暴禁欲主義の徒は、疾病から只熱を驅逐しようとばかり試みる醫者の如きものである。即ち彼によつては治療のために病人が死んだといふには一毫何でもないことなのだ。

併し暴禁欲主義の徒も異なれる二つの道によつて、彼等の迷信に到達したものらしい。一つの群は——それは女性の禁欲主義者を最も多く含むでゐる——愛の神（キユピツト）が曾て一度として何の恩惠も自分達に示して はくれ なかつたとい ふ理由で愛の神を憎む。他の一つの群は——大多數の男性禁欲主義者を含む——愛の神が 曾て一度も自分達に平和 を與へ ては くれなかつたといふ理由で彼を呪ふ。併し、とかくする中に、純潔を極度に重ずる人達と、



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

快樂に狂ふ人達とは戀愛發展の可能性に對する不信といふ點に於て共通の地盤の上に出會ふ。禁欲主義の徒にとつて戀愛とは欲求(デザイア)の外他の何ものをも意味しない。若し心靈が戀愛の中に入るなら、それは友愛となるばかりである。彼等は言葉の最も嚴密な意味で、創造的なものである戀愛を決して經驗しない。不生産といふことが——心と身と心身の三者に關する——此二群の人達が知れる唯一の戀愛の印號(しるし)である。性欲(エロティシズム)の奴隷は、かのチエスターフィールドの告白によつて遺憾なくその特質が表はされてゐる。彼は少くとも廿人の婦人を熱愛した。併し彼はそれらの婦人の總てに對し、個人的に全く冷膽であつた。かかる奴隷は限りなき中から撰ばれた只一個の人に對する靈的欲求に就いては、又はこの靈的欲求がその根ざしの深い時、その相手たる一個の愛人の欲求によつて答へられたるものだといふことに就いては何事も知らない。彼等は撰擇的同情の親私力は一個の人としてその相手たる一個の愛人の眼から總てに打勝つやうな強い活力を自己の內に聚めさせるものだといふことを知らない。

何故なら彼等は欲求の強暴なるに當つて、只賣淫と彼等の一層高尚なる實在に對する屈辱とを經驗するから。又別種の敏感な人はその奴隷的境涯から脫せむがため、今總ての婦人の死を願ふかと思ふとすぐ次にはカリキユラがローマ人に望んだやうに彼等が只一個の首

を持つことを願ふほど——併しそれを斬らむが爲ではない——それほど性慾に惱まされてゐるものらしい。性慾に對する是等の人の憎惡はかの自分が神にかゝはる身であることを信じ、且自分の運命は彼に飜弄されてゐることを知つてゐる野蠻人がその忌はしき神に對する憎惡と一般である。斯くの如く考へられた戀愛は、人を墮落させ、馬鹿々々しくさせるより以上の確實な何ものでもない。最保なる心靈に於て悲劇を愛し、滑稽劇を憎む人さへ、この戀愛の引力の下にあつては兩者の中間を跛行し、又は悲劇的喜劇にその生活を轉ぜしめられる。何故なら眞の悲劇的偉大に達する爲には、人はそれにまで無條件に身を任せ、その人の天性と最深自我に於ける最も偉大なるものを通じて苦しむべく準備されてあらねばならぬから。併し悲劇的運命は人間最深の意志に反して行き過ぎる傾向がある、その時丁度上に記載したやうな悲劇の不能な形が生ずる。斯くて單に戀愛に於ける新鮮な刺戟を求める男女は、遂には戀愛をそんな風に解さない人、又は其要求を永久遂げさせないやうな人に出逢ふ。よし又彼等が偶々偉大な情緒に把握されてゐても彼等の過去は神聖な林の中で神を崇拜することを許されてゐるこの現在の望みを破壞する。何故なら彼等は今迄其神の爲に騷擾な市中で只紙の提燈を點じてゐた丈なのだから。最も多くの場合、悲劇的喜劇は大酒家と同じ形をとる。即ち滿足を得ることが益々不可能なこととなる、この



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

足るを知らざる者は或程度にその欲求を止めむが爲に一層劣等な手段に出たり、喜ばざの度を次第に減じつゝも増々耽溺せざるを得なくなつたりする。この種の中毒に罹つた者は次第に意志薄弱の如く、不人情の如く、かの大酒狂のやうに性格と良心を缺き又等しく彼の肉慾圏内の撰擇及評價の能力を失ふに至る。かの大酒家はライン葡萄酒の黄玉液のその香と露のやうな新鮮さとを感じないと同樣、かゝる人は遂には最も崇高なる婦人の愛から見捨てられるであらう。「戀愛の自由」もかゝる人にとつては責任と思慮と、危險と、損害から免れるといふことの外、仕舞には何の意味もなくなるであらう。この種の自由戀愛に比較すると賣婬は一層健康に危險なことは疑いもないが、併し人格を毒する點に於ては遙に少い。何故なら賣婬は心靈を度外にする戀着力によつて、人格を毀損するけれど、一個の男子が賣婦でない婦人達を買ふ所謂「戀愛」の如く人格を滅却するやうなことはしない。

若しも婦人達が、かゝる男子に、彼の證券に對し眞貨を支拂ふことを期待するならば、彼等は失望するであらう。といふのは彼の信ずるところによれば、戀愛は何等の純正な價値も有たないのだから。即ち彼は常に自然が人間――殊に婦人の協力を恃むがための僞造手形として戀愛なるものを考へてゐるのだから。

この戀愛はその快樂を買つたり、偸んだりした寢室の空氣の外何の空氣も知らない。それは決して野の空氣も、日光に震へ、嵐に搖れる空氣も、更新に對するあらゆる生命の憧憬と未知の標的に向つて時代の上に時代を築くところの幸福に對する飢渴より生ずる永遠を默想するあらゆる直觀とをつぶやく空氣も、生活力を不斷に吸收し、無限に增大なる空氣も、未だ殘忍と狂氣の消滅せず、男女は彼等の永遠の爭鬪を戰ひ、彼等が永遠の苦痛に惱む廣大なる空間の空氣も知らない。ルフレティアスさへ苦痛の源泉は二元であることを知つてゐた。

併し只一致和合、これのみがこの源泉を閉塞し得るものだといふことは實に現代に至つて始めて知られたのだ。

文學上に於ける戀愛は、時としては寢室より、又時としてはこれらの野より、性的本能の支配に就いて起る不平である。

道德に關する著者の少なからざる著述中、には是等人間生活の荒野に就ては少しも見出されない。是等の敎師達は人性の最も大切なる問題をこんな體操や入浴器械見たいなものの中に含めるやうな、そんな無限に狹隘な心をもつて彼等の無智を表示してゐる。短見なる彼等にとつて、不道德は賣婬としてのみならず「自由戀愛」の形に於ても現れた。彼等



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は自由戀愛にも結婚にも兩者の大多數が見出される倫理的零度以上に或は以下に昇降する道德と不道德との多くの等級あることを疑はない。

それ故に自由戀愛にせよ、合法戀愛（ローフル、ラブ）に（譯者曰、結婚を意味す）せよ、醜惡に、復讐的に又殺人的になつたものと、たとへ自己の生命を奪はうとも愛人の生命は斷じて奪はぬものとの間には自然差別の大なるものがある。併し生命增大の見地から見れば、熱切な、勇敢な、自己犧牲的な、忠實な自由戀愛と——合法的戀愛でも——全く人間最良の性質を働かないものとの間にも大なる價値の差別がある。これと同樣に、賤しき虛榮の不生產な性欲的冒險即ち感覺に對する下劣な飢渴と、人間が新創造力をそれによつて得る情熱との間にも亦差別の大なるものがある。情的の嵐に身を任せるといふことは一方の場合に於ては旆旗の如きもので、今一方の場合に於ては帆の如きものである。

藝術家的氣質は屢々戀愛の更新を要求する。然るに或者は斯くの如くして彼等の强さと健康とを增進するが、其他の者は常により貧弱に、より醜惡になる。ゲーテは前の部類に屬する一人であつた。ジョーヂサンドも同樣だつた。此のタイプ性質は更新の驚くべき力を有つ。彼等は戀愛の價値を輕減することなしに幾度も戀する。南國の火山性の土壤の如き彼等の心靈は三度の收獲を得て疲れ果てない。併しこれは人類一般の心靈及土壤氣候でも

ない。しかも斯かるオリンピアの男神女神達さへ、戀愛が彼等にその眞相を現はさないのではあるまいかと疑ふ。來生に於ては只一度戀するやうに求められることを運命に向つて祈つたゲーテは、

汝自身の心を見よ…………

との驚嘆すべき言葉を以て記載されたかの不可思議な夢を見ることを許されたダンテよりも戀愛に就いていたる處が少なかつたかも知れぬ。偉大なる戀愛の火照を神々に切願したジョーヂ、サンドは

汝、大なる頭腦の女と大なる心の男…………

を以て始まる立派な詩で彼女に對する自己の同情を證明した彼女の姉妹詩人、エリザベス、バアレット、ブラウニング程には決してさう十分に燃やされてはゐなかつた。

併し偉大なる戀愛も偉大なる天才の如く、決して義務でありえない。兩者ともに其の撰ばれたる者にとつては人生の惠深き賜である。一度以上戀する人にとつても、只一度戀する人に於けるより以上に――即ち生命增大のそれ以上に、何等他の道德的標準もありえない。新しき戀愛に於て、涸れたる泉の鳴るを聞き、枯枝に樹液の昇るを覺える人、彼の新しき戀愛に於て、更に豪俠と眞理と、溫順と大量とに就いて敎へられ、强さと、醉ひと、養ひ



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と歡びとを見出す人——その人こそはこの經驗に對して權利を有つ。是に反しあらゆる新しき戀愛によつて人性に普通なる性質及力の自覺を貧しくし、意志を弱め、働く力を減ずる人達、かゝる自己減損に對して人生教の見地から何等の權利も有たぬ。總て戀愛は且つ結果によつて知られる。局部的敗德といふやうなことはないといふことほど眞實はない。彼のあらゆる他の行爲に於て健全であり、純正である人、又仕事に於て不斷に强壯であり、正當である人は最も多くの場合、性的事件に於ても亦彼の良心に從つて——たとへ一夫一婦の教義と調和せずとも——道德的である。是に反して、彼の他の行爲に於て、詐欺師又は惡漢と見える人は、戀愛事件に於ても、彼の道德が一夫一婦なりと、一夫多良なりとに拘らず恐らく同樣であるであらう。それ故に彼の性的律法から他の事件に於けるその人の道德を判斷することは、他の問題に於ける彼の倫理的立脚地から彼の性的道德を判斷するよりは一層不條理なことである。尤も後者とても確實な規矩ではない。何故なら偉大なる戀愛に於て、彼等の天性の頂點に達しながらも他の事柄に於ては遙に下にあるものも隨分あるから。又彼等の戀愛的行爲をどうしても彼等の人格の他の部分の水準まで高めることの出來ない人達もあるから、とはいふもの丶後の標準が前者に勝ることは化學藥品商の秤が古風の桿秤に於けると一般である。ともすれば人の他の發表は或意味に於て、その人自

身よりもより大きく、又はより小さき場合が屢々あるが、戀愛は是に反して殆ど總ての場合彼が最保自我そのものである。彼が戀愛に於て、ある如く偉大若しくは野鄙に、豐富若しくは貧弱に、純潔若くは不純潔に、人は人生に於けるその他の重要な關係に於ても亦彼を見出すであらう、それ故に人間一切の概括的特質の中で、戀愛によつてその人を見ることほど確實な何ものもない。

* * * * * *

斯くの如くして、人生敎の敎徒は性的道德に對するトルストイの律法を甚しき不道德と見做すとはいへ、彼はその起原に純なるものと不純なるものの二者あることを認める。

前者は、彼等が今、他の人々に彼等の平和の爲めに根絶することを忠告するその情熱によつて深く惱まされてゐる人達、又は人生がなほ眠りの中にあり、自然が秋の如き色を以て蔽はれてゐる彼等の年齡の早春期にある人達の場合である。

後者は生來の虛弱の爲め、その人にとつては全生涯が總て秋であるといふやうな人達、又は常に戀愛に關する現世の神曲を作る生殖狀態の弊害や苦痛の犧牲であつたがために、是等の狀態に對して憎惡の念を抱く男女の場合である。しかもその神曲はダンテの神曲の如く地獄、天堂及煉獄の雰然たる組立もなく、又それに空間及時間上の一定の關係を與へ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るでもなく、寧ろその中に三狀態が岸打波の如く相繼いで來る一種の戲曲である。性的生活の憎惡は疲れ果てたる者も、拒絕する者も不生產なものも、未だ成熟せざるものも、衰弱せるものも、毒あるものも等しく個人個人として確に多少の寬大を受けることが出來やうふけれど、彼等の道德に對する敎義は我々が述べた理由によつて全然價値なきものとして放棄されねばならぬ。

性的問題を人類に對する考案を無視して恰も個人の自由の權利と同一なるが如く解決する人達に對しても同じ議論が有効であるこの人達は飢渴を渴す權利と性的欲求を滿す權利とを比較する習慣がある。是に反して禁欲主義者はこの比較は守り難きことゝして退ける、何故なら人間は終生禁欲するとも健康に生活し得られる、ことは勿論だらう。その代り彼等は戀愛的情熱と俗見がそれを自制することを勸め、意志は之れを可能とする賭奕又は飮酒に對する情熱の如き他のものと比較する。併し兩者の考ふるところは等しく淺薄である。自然生活の根本的條件及文明生活の原動力なる、戀愛と飢渴とを相互以外に他の情欲と比較することは問題に關する記述全體を虛妄に陷れる。戀愛の本能は飢渴の本能の如く、或程度迄禁ずることが出來、兩者の場合は只に其附帶的結果として一定の方向に於ける力の增大が得られる。併し若し個人及人類が生活し、向上發展に於ける生命の目的を果すの



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ならこの二要求は正しき方法に於て、滿されねばならぬ。戀愛問題に於ける禁欲者は彼等が他の方面に價値なきが如く、生命增大にとつても左程の價値もない。

（未完）

らいてう譯



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 染井より——野枝——

○

R様、こないだの金曜日はゐらつしやるかと思つて待つてゐました。私は午前から行つてゐました。小母さんといろ〳〵な話をしながら待つてゐましたら勝ちやんが來ました。でもすぐに歸つて行きました。私は四時頃まであなたを待つてゐました。私は堀切へ行つてから非常に疲れてその日までなんだか大變に倦怠い氣持ちが去らずに居ました。

それとその朝、私は全く知らない——姓名位は知つてゐましたが——Kと云ふ方から手紙を讀んで、それにも可なり惱ましい氣持ちを抱かさせられてゐたのです。小母さんも可なり疲れておゐでのやうでした。私と小母さんと二人きりでは何だかあの涼しい八疊の座敷もだるい空氣が漲ぎつてゐるやうで、何となく氣分が重くなつて來るのでした。あなたでもゐらしたらまた堀切の話でもしてすこしは氣分をはづます事が出來るかと思つてました。

でもどう〳〵ゐらつしやらなかつたのですね、私はまた重い頭を抱えて小母さんの處を

出ました。例の蜓の道を歩いてゐますと、あの林の前の叢の眞靑な笹や草が目にしみて、ツン〳〵した靑い薄が頭の中を突きさすやうでいやな〳〵氣持でした。その日だけは林の中に、はいつて見る氣もしませんでした。

歸つてぐつたり机の前に座りますと同時におつねちやんがはいつて來て今朝の中央新聞に靑踏社の事が出てゐて、それには私の私行上の事が書いてあつて、それは全く虛僞で意外な事が書いてあると云ふ事を知らしてくれました。私はおつねちやんに、大體の記事の內容を聞いて、たゞもう腹立たしくてたまりませんでした。

屹度あの男なんです。中央新聞の記者だと云つて尋ねて來た、白田天坡とか云ひましたねあの男に違ひありません。本當に世の中に新聞記者ほど下等な、度し難いものはありませんね、後で私はその記事を讀んで見ましたが實に下等な記事なのです。あらん限りの惡意を持つて書いたものです。靑踏社と云ふ團體が實にだらけ切つた、今にも亡びさうな情ないものになつて出てゐます。「屛息せる新しい女」と云ふ題です、甚だしく侮辱を加へたものなのです。私の事にしろ小母さんの事にしろ、まるで間違つた事を書いてあります純然たる名譽毀損なのです。然し私はその記事を讀んだときに腹立たしいよりは寧ろ滑稽に思えて相手にする氣にはなれなくなりました。むしろ私はあんな下等な愚劣な俗惡な新聞記



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

者に同情されたり賞められたりする程私共が低級でないと云ふ事を快よく思ひました。私共の仕事がそれほど平凡な下だらない事でないと云ふ事を確め得たやうに思ひます。そして、彼等との間が氣持のいゝまでに隔つてゐる事をうれしく思ひました。數多い新聞の中でも最も俗惡な低級な中央にあんな愚劣な記者のゐるのもふしぎではありませんね、私は本當に會はないでよかつたと思ひますよ。けれどもあの記者は私たちが會はなかつたと云ふ事を非常に不快に思つたんですよ、で何にも種がとれなかつたので自分勝手にいゝかげんな事を綴り合はして記事をこしらへたんですね。

然しいつも〳〵青踏社の事を云ふと紅吉を引つぱり出されるのには閉口ですね、紅吉は皆の墮落の犧牲になつてらいてうから退社を命ぜられたなんて書いてありましたよ、大分青踏社も紅吉の犧牲になりましたね。併しこれはもう過去のことです。過去は過去に葬りませう。

私は本當に俗衆の愚論を相手にする馬鹿々々しさを痛切に感じます。多くの人の愚論が如何に多くの俗衆をあやまらふとも私たちはそんな事にかまつて尊い精力を無駄に消耗する事はつゝしみませう、私共はたとへどのやうな迫害を受けやうともたしかな立場さへあれば決して恐るゝ事はないと思ひます。私共は或る所まで行き或るものをつかむ迄は强情



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に默しませう、私は、我々の團體に對して、また、仕事に關して、世間の人の聲を聞く毎に、目を瞑つて何も云ふまい、何にも云ふまい、と思ひます。全く何も云ひ度くなくなります。云ふ時はいまに來るでせう。然し俗衆に向つては或は私共が生きてゐる限りの間に於てもさう云ふ時は來ないかも知れません。私は外に向つて默してゐればゐる程內に向つて饒舌になれると思ひます。そうして私はそれによつて、私共がたん〴〵に成長して行く事が出來ると信じます、私はもつと壓迫がはげしく來てほしいと思ひます。私共の立脚地を搖がす位の大きい、力づよいはげしい、壓迫が來て欲しいと思ひます。團體の形式なんかどれなくなつてもかまひません。あくまで內に潛む眞實なる自己の爲めに、戰つて行き度いと思ひます、私共はこれからどの位壓迫を受けるかも知れないと思ひます。然し、その度に不確な者が退いて眞に自己を愛し眞を愛する者のお互ひの間隔が近づいて、愈よ結合が固くなつて行く事を思ひますと何だかさう云ふ大きなものが我々の眞中にはやく手ごたへ強くおちて來ればよいと思ひます。

漸くに惱んでゐた問題が片附いて落ち附いたやうな氣でゐますと、もう大きくあいた双の目が奥の方を睨みつめてゐた、何か大きな動搖を期待するやうな態度でピンと張つてゐます。やゝ平靜に澄んだ頭に大きな目が光つてゐます。暫く障らないやうにしたいのです。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この平靜が破れて、また嵐のやうにさはぎ出されると、私全體がまごつかなければならなくなります。何にも書かないやうにしてゐます。書かうとしても書けません、そして書けないのがさ程苦しくもありません。

林もます〳〵綠が濃くなつて行きます。染井はだん〳〵眞靑になつて來ました。田圃の菖蒲が半ば咲きました。また、夕方ゐらつしやいまし、私は何處へも行きません。そつとおとなしく靜かにしてゐます。堀切から持つて來ましたスウヰートピーは土曜日まで生きてゐました。毎日曇つてばかりゐますのね、でも夏らしくなりましたね、私は海を戀しがつてゐます。泳げなくとも、面だけでも見たいと思ひます。長崎の游泳會ぢや來月の十日頃から泳がせるのですよ、校正がすんだらきれいな海邊へでも行きませうか。

――六、一八、――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 編輯室より

□此の間中央新聞の白田天坡といふ記者が事務所に來て皆に會ひ度いと云つたさうです。丁度面會日でもなんでもなかつて、小母さん一人だつたので斷りますと、その記者は玄關先きに立つて、いつまでも一人で勝手な事をシヤベツて出て行つたさうです。その日私は頭痛がして臥つてゐますと。矢張りその記者が來ました。勿論私も斷りました。らいてうもゐすで會はなかつたさうです。それでちつとも種がされなかつたわけです。そうしますと此度は十二三日頃に中央新聞に出た「闊息せる新しい女」といふ題の下に書かれた青鞜社の記事は滅茶々々なものでした。いゝかげんにこしらへ上げたものです。それが實に下等な事ばかしならべてあるのです。事務所にあてた小母さんの家の家賃までかつぎ出してあつたのには驚きました。

□先月號の表紙の裏に廣告を出したのが大變に感じを惡くしました。青鞜ではあんな事をした事はないのです。あれは書店が禁を犯したのです。以後はきつとあんな感じの惡い事は致さないつもりです。

□青鞜社の事務所を巣鴨においたと云ふ事に就いていろ〳〵な臆測をする人がありますが、別に何にも大した事はないのです。前から東京に出たいと云つてゐた小母さんが茅ヶ崎から出て來て、さがした家が大變いゝうちだしそれに、萬年山は市區改正や何かあつて、面倒ではあるしするので越したのです。

□らいてうは此の號の編輯をすますと同時に廿六日の夕方東京を立つて旅に出ました。多分行先は赤城だらうと思ひます。白樺の葉の貼つたはがきを送つてもらう約束をしました。私はそれを待つてゐるのです。

□街路がどれも勢よく葉を出しました。あの御徒士町の通りのツン〳〵したプラターヌスの葉も眞青になりました。

□歌津ちやんはお芝居や寄席や新内や歌澤で日を暮してゐます。私は、うちにゴロ〳〵して、いつからいてうと岩野さんと歌津ちやんと私と四人で堀切に行つたときに買つて貰つた小さな獨樂をまはして遊んでゐます。

□小母さんのうちにはいろ〳〵な花が咲きました。大變きいれです。いまに小母さんの家は花でかこまれるでせう、

□校正つて本當に嫌やな仕事です。厄介な仕事です。出ない間ボンヤリして機械の廻る音を聞いてゐますと氣が遠くなつてしまひます。一昨日歌津ちやんは眠つてしまひました。こゝの校正室は風通りがよくていゝ氣



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

持ちに眠れるのです。

□今日は岩野さんがゐらしたのですけれども歌津ちゃんとしんこ細工を見に行くつて出て行つてしまひました。(野枝)

□野枝さんが丁度こゝまで書いたところへ岩野さんとしんこを買つて歸へつてまゐりました。――おいてきぼりをした代りに隨分惡口を書かれて了ひましたれ

どうもお天氣のせいでせうかいやに暗い穴にひきづられて行く樣な氣分がしてせうがありません。――校正なんて面倒くさいものはぬきにしてどつかへ遊びに行きたくつてせうがありません。

□今月はすつかりボンヤリして了つたんでたいがいは野枝さんのお厄介になつてしまひました。すまないすまないとは思ふんですけど時々駿こんぢつやたり、するんでございます。惡口をあんまり云ふばちが當つて口のはたにお腫物は出來るし………だけど來月は一人で働いて見せますから。(歌津)

□岩野さんに何か編輯室よりを書いて下さいと申しましたら「何にもせずにしんこおせんべをたべてたつて書いてないて下さい」とお仰るんです。そいでそう書いて置きます。(歌津)

□エンン、ケイの「戀愛と結婚」の拙譯について懇に御敎へ下さつた無名のお方に申上げます。過日はわざわざ御手紙をありがたうございました。二回まつてあと頂けなくなつたといふことは私にとつては誠に殘念なことです。けれどああ仰有るのを強て御願ひいたしたいなどゝは申せません。私はあれを譯すことは自分の語學力には重荷過ぎることを益々感じてゐることを申して、一々精細に誤りについて御話し下すつたあの親切を今一度感謝いたしておきます。(戀愛と結婚の譯者)

□らいてう氏の「圓窓より」はあの中の「世の婦人達へ」の一文がわるかつたのださうです。當局の話によると家庭組織を破壞し、從來の女德を害し、其の上用語が露骨にすぎていけないのださうです。

それから六月五日の讀賣に當局の談として、「今回禁止されたものの中には既に雜誌に掲載された當時に於て責任者に注意して置いたのにたれを顧みずして出版されたものもある」とありました、多分「圓窓より」のことだらうと思ひますが、さうとすれば少し事實と相違いたします。本社の責任者は五月號の「編輯室より」に記したやうな注意をうけた時、私共にはどうも何處がわるいのかよくわからないから明に指摘して頂きたいと云つたのでしたけれど、當局者の答は漠然としたもので、決してあの一文に對しては何の注意もなかつたのです。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□らいてう氏が鏑木清方氏について畫を習つてゐると傳へられて云るさうですが同氏は夢にも知らないことなので、何の間違ひだかさつぱり分りません。

□同氏に近い中に旅行に出るさうです、ネスフイールド只一冊を持つて行くのださうです。いづれ旅先から面白い便りがあることでせう。山のことでも。

□柴田かよ子氏に御寄附の御禮を申します。

## 六月號正誤

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 4 | 10 | 別れまし | 別れきし |
| 25 | 2 | 腹詰 | 膓詰 |
| 27 | 2 | 爭音ひし業の | 爭ひし言葉の |
| 42 | 7 | 空は全たく | 空は全く |
| 43 | 4 | おそひきたり | おそひきたる |
| 44 | 10 | 訊れたるとこもなし、 | 訊れたるともなし |
| 45 | 2 | 穩やなる | 穩なる |
| 45 | 15 | 取去ずや | 取去らずや |
| 48 | 11 | 速にか下り | 速に下り |
| 49 | 7 | 座寂しく | 座し寂しく |
| 49 | 7 | 冷かなり | 冷かなる |
| 49 | 15 | 解る | 解する |
| 56 | 3 | 堪え | 堪へ |
| 58 | 8 | 常議 | 常識 |
| 58 | 9 | 快活 | 快活 |
| 52 | 2 | 高く高…… | 高く高く…… |
| 85 | 9 | 結婚に階級 | 結婚にも階級 |
| 91 | 2 | 到達 | 到達 |
| 96 | 13 | 茶化すよう | 茶化すやう |
| 98 | 5 | 議するよう | 議するやう |
| 98 | 7 | 熱重 | 熱望 |
| 98 | 7 | 露西亞のような | 露西亞のやうな |
| 99 | 6 | せればならぬよう、 | せればならぬやう |
| 100 | 9 | 煩悶するよう | 煩悶するやう |
| 101 | 10 | 供せられるよう | 供せられるやう |
| 307 | 3 | 云へないよう | 云へないやう |
| 10 | 4 | 狼籍 | 狼籍 |
| 110 | 7 | 禦者 | 御者 |
| 110 | 7 | 交わして | 交して |
| 114 | 14 | 悲慘は | 悲慘な |
| 117 | 10 | 威嚴 | 權威 |
| 118 | 10 | 外冦 | 外寇 |
| 正誤 | | シマイナルシンホニー | Cマイナルシンホニー |

## 寄贈雜誌

現代の洋畫　學鐙　相對　早稲田文學

婦人世界　新女界　精華　帝國文學

| | | | |
|---|---|---|---|
| 少女世界 | 婦女新聞 | 女子文壇 | 近代思想 |
| サンデー | 文學世界 | 新人 | 三田文學 |
| モザイク | 新小說 | 喜望 | 白樺 |
| ホトヽギス | 新潮 | 世界の日本 | 中央公論 |
| 人生と表現 | 劇と詩 | スバル | 馬上大學 |
| 聖盃 | 歌舞伎 | 日本國事新報 | 六合雜誌 |
| 心の花 | 婦人評論 | 府民 | 自由講話 |
| 藝文 | 層雲 | アラヽギ | シバヰ |

## 寄贈書籍

□心の扉(小說)　ザイツェフ作　昇曙夢譯

本書は氣分藝術として印象的描法の優秀なるザイツェフ氏の姉、客、狼の三篇及、アンドレーフの「獸の呪ひ」を集めたるもの。

發賣所、海外文藝社　(四十五錢)

□かろきれたみ(歌集)　(二十五錢)　岡本かの　東雲堂發行

□圓窓より、　(九十錢)　らいてう　東雲堂發行

□扃ある窓にて、　(九十錢)　らいてう



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らいてう著

再版印刷出來
定價金九十錢
送費金八錢

# 扃ある窓にて

「圓窓より」
改版發行

さきに著者「圓窓より」一卷を世に出すや、風俗を害するの故を以て不幸發賣頒布禁止の厄に逢ひぬ。今、そのうちより忌避に觸れたる一篇「世の婦人達に」を割愛して、之れを世に出す。敢て自己の問題に思ひを潜むる篤實なる婦人達の熟讀を望む。

東京日本橋區
檜物町九番地
**東雲堂書店**
電話本局一八一七番
振替東京五六一四番

與謝野晶子女史序
吉井勇氏序歌

原阿佐緒著

西野義雄装幀

小形頗美本
著者小肖挿入
本文二百數十頁
歌四百首
定價六十錢

# 歌集

# 涙痕

新装發賣

―内容―

戀と死
涙痕
孔雀艸
悲しき母と子
あきらめ

この涙つひにわが身を沈むべき
海とならむを思ひぬはじめ

發行所 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四） 東雲堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

中村吉藏氏著

正宗得三郎裝幀

# 最近劇論と劇評

著者は我が新興劇壇の創作家として又評論家として兼れて舞臺監督の實際家として、已に世に證認せられたる先覺者也。本書は其温蓄と經驗との結晶體たる最近劇論と劇評を纂め、新代の俳優、作家は勿論、普く演劇の温仰者の鑑讀を俟つもの也。

菊半截形美本
本文四百十餘頁
定價金六十錢
郵稅金六錢

東京淺草
下平右衛門町

**岡村書店**

振替口座東京
一九〇六五番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代女子の趨向を知る

# 女學世界

第十三卷第九號
七月一日發行

▽赤坊……佐藤紅綠
▽高女卒業生の生活情調……夕陽丘女學校長 伊賀駒吉郎
▽稚子の記憶……松平鋭子
▽其日々々の氣分……內藤千代子
▽椰子の下蔭（印度の避暑地）……揚羽の蝶
▽女人崇拜……栗原古城
▽女學校參觀記……からたち
▽名流婦人の廿才前後……婦人記者
▽令孃訪問……花びし
▽家庭小說 愛の光……柳川春葉

▽風俗鏡……磯千鳥
▽我家の銷夏法……横井博士夫人
▽七夕物語……太田三郎
▽風俗詩中の女……前田芳柳
▽旅のおはなし……仁尾繁子夫人
▽家庭科學の智識……川瀨秀子
▽夏季と掃除……
▽夏負けの豫防……木內幾子
▽女裝いろいろ草……小泉迂外
▽商人の前で儉約ばなし……覆面記者
▽覺え帳……紅梅
▽婦人とトラホーム……井上眼科病院長 井上溫
▽一家の打明け話……比志島中將夫人
▽滑稽歌問答……春がすみ
▽實說名婦の面影……牛屎堂
▽夏季と消毒……

菊判紙數二百八頁
美麗口繪如例豐富
正價廿錢 郵稅二錢

東京本町 博文館

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故 石川啄木著

# 詩と感想 啄木遺稿

（新裝發賣）

四六版四百頁美本
總洋布製著者小肖入
定價金九十錢
送費八錢

年二十、すでに詩集「あこがれ」一巻を以てその鬼才を稱へられ、のち「一握の砂」「悲しき玩具」の二歌集を出して僅かにその片鱗を示し、二十七歳にして早くも世を去れる故人の變化多き生涯は知る人をして大なる暗示と、深き瞑想に入らしむ、然もその內生活に至りては未だこれを知るもの甚だ罕なり。今故人の遺稿より、「あこがれ」以後の詩作と感想とを整理して、これを公にす、蓋し、本書によりて始めて故人の思想生活及人生批評家としての抱負の一端に觸るゝを得んか。「人」として啄木を知る好個の資料たるなり。

■石川啄水略傳……文學士 金田一京助

■跋……土岐哀果

■ 東京市日本橋檜物町九番地 東雲堂書店 電話本局一八一七番 振替東京五六一四一番 ■


Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故 石川啄木著

藪野椋十氏序

土岐哀果氏跋

四六判三百五十頁

著者自筆歌挿入

函入美本

定價八十錢 郵税八錢

# 啄木歌集

新刊

著者の第一歌集「一握の砂」久しく絶版となりて江湖の渇望に背くこと久し。今「悲しき玩具」と併せて啄木歌集と名づけ世に出す。蓋し數多からぬ著者の歌のすべてを網羅せるものなり。懷かしき著者の姿見なり。

發行所 東京日本橋區檜物町九番地 振替東京五六一四 東雲堂



Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

久保田柿人
中村憲吉 合著

平福百穗裝幀

# 歌集 馬鈴薯の花

新刊發賣
四六判美本
定價金八十五錢
送費八錢

明治歌壇の急激なる推移の歴史のうちにありて、故正岡子規先生によりて僅かに開拓の緒につかれたる一つの方面があつた。三十年頃から同四五年頃にかけての頃である。我々はそれからずつと後にその方向に於て短歌に對する眼を開き得たる徒輩である。而して今も尚ほ萬葉集を尊重する徒輩である。

然しそれと同時に我々の内部には弱力ながらその發育を欲求する個性が動き、吾々の四圍には絶えず新しい思想情緒の空氣が流れてゐた。我々は其の當時々々に於ては、自分の力の最上の努力で出來るだけ之等に眞面目ならんことを欲したいと思ひつゝ短歌の道を歩むで來たのであるが、その結果から言ふと自ら悲しむべきものが多い。今あまり豐かならぬ最近數年間の勞作を公にするに當つて、顧みて身の不敏をはぢ、何程のものを諸君の前に提供し得たかを自ら甚だ危ぶむものである。

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

木下杢太郎畫
北原白秋著

挿畫「初夏の遊樂」
本文黑と草との二度刷
「朱欒」形、紺と金、紙表紙
定價金壹圓送費八錢

# 東京景物詩 及其他

「邪宗門」以後
第一の詩集
今や新裝成る

内容
章目

東京夜曲
S組合の白痴
青い髯槍持
雪と花火
銀座の雨

發行所 日本橋區檜物町九番地 振替貯金東京五六一四一番 東雲堂

# ほととぎす

本誌は二百號以下激增して各號重版せり

● 二百號　三版　定價二十錢

卷頭小説　椿の花　三十頁　田山花袋

虚子講述　六ケ月間俳句講議（一）

● 二百一號　再版　定價二十錢

卷頭小説　銀座の夜　四十頁　小宮豊隆

虚子講述　六ケ月間俳句講義（二）

● 臨時增刊（二百二號）　定價四十錢

卷頭小説　蒟蒻本　四十頁　泉鏡花

虚子講述　六ケ月間俳句講義（三）

臨時增刊には此外俳論、俳話、能樂談等を滿載せり

● 二百三號　新刊　定價二十錢

卷頭小説　臆病者　四十頁　正宗白鳥

虚子講述　六ケ月間俳句講義（四）

東京牛込區船河原町十二番地　ほととぎす發行所

振替口座東京二三五〇

# スバル

第五年 第七號

定價三拾錢 郵稅貳錢

## 七月號要目


馬丁（小說） 鷗外譯
六月の森のころ（詩） 出野青煙
絕交（小說） 平出修
むく鳥通信 無名氏
受付室（小說） 北尾夕街
歌 原阿佐緒
朝の影（小說） 中島清譯
巡禮（詩） 竹友藻風
日常悲劇（感想） 灰野庄平
歌 三ケ島よし子
青い鳥（戯曲） 齋藤寅一譯
夏二章（詩） 萬造寺齋譯
題未定 高村光太郎譯
伯林の芝居とゼツエツシヨン 平野萬里
伯林にある平野君へ 平出生
消息


東京市芝區芝公園第五號地十二

昴發行所

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 東雲堂藏版書目

| | | | |
|---|---|---|---|
| 歌集 | 桐の花 | 北原白秋 | 定價金壹圓 |
| 歌集 | 水荘記 | 吉井勇 | 定價金壹圓 |
| 歌集 | 別離 | 若山牧水 | 定價金七十錢 |
| 歌集 | 死か藝術か | 若山牧水 | 定價金七十錢 |
| 歌集 | 黄昏に | 土岐哀果 | 定價金五十錢 |
| 歌集 | 收穫 | 前田夕暮 | 定價金七十錢 |
| 歌集 | 啄木歌集 | 石川啄木 | 定價金八十錢 |
| 歌集 | 早春 | 岡稻里 | 定價金七十錢 |
| 歌集 | かろきねたみ | 岡本かの子 | 定價金二十五錢 |
| 英詩集 | The Pilgrimage. | 野口米次郎 | 定價金壹圓 |
| 詩集 | 思ひ出 | 北原白秋 | 定價金九十錢 |
| 詩集 | 邪宗門 | 北原白秋 | 定價金八十五錢 |
| 詩集 | 東京景物詩 | 北原白秋 | 定價金壹圓 |
| 詩集 | 白き手の獵人 | 三木露風 | 定價金壹圓 |
| 詩集 | 霧 | 河井醉茗 | 定價金五十五錢 |
| 詩集 | 路傍の花 | 川路柳虹 | 定價金五十錢 |
| 詩集 | 夜の葉 | 森川葵村 | 定價金六十錢 |
| 小說 | 青鞜小說集 | 青鞜社 | 定價金八十錢 |
| 小說 | 新譯梅ごよみ | 態谷爲蝶 | 定價金五十錢 |
| 戲曲集 | 午後三時 | 吉井勇 | 定價金壹圓 |
| 戲曲集 | 和泉屋染物店 | 木下杢太郎 | 定價金壹圓 |
| 論集 | 演劇新聲 | 小山內薰 | 定價金八十錢 |
| 評傳 | 哲人カアペンター | 石川三四郎 | 定價金八十錢 |
| 隨筆 | 圓窓より | らいてう | 定價金九十錢 |
| 隨筆 | 啄木遺稿 | 石川啄木 | 定價金九十錢 |
| 隨筆 | 歐洲美術遍路 | 石井柏亭 | 定價金貳圓 |

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大内青巒先生著 ▲結城素明畫伯挿畫

# 禪の極致

三六版美本
定價六十錢
郵稅八錢

不立文字の敎理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但借しむ、古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出てゝ愈々迷はしむることを。大内先生學深く德高く、敎禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄『五位頌講話』、また先生獨創の見識を以て、縱橫に講解す、蓋近來の大文字なり。

曹洞大學敎授忽滑谷快天先生著

# 達磨と陽明

定價七十五錢
郵稅八錢

加藤咄堂先生和譯

# 和譯 維摩經評註

定價七十錢
郵稅八錢

振替東京一五六八六 東京小石川區原町六 丙午出版社
振替東京一三五三 東京小石川原町六 鴻聲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 音樂

第四巻 第七號
七月一日發行

□樂壇時評
■雅樂及び神樂、催馬樂と聲明……志田義秀
□音樂教授法沿革史(二)……草川宣雄
■學友會演奏雜感……高折周一
□ディマイスタージンガー……小田島次郎
■ロッシーニ(二)……佐久間孝天
□歌劇『靈笛』……牛山充
■ヨハンネス・ブラームス……高安百合
□バッハの短調司伴樂……牛山充

口繪
□ライプツィッヒなるワーグナーの生家
■樂譜明治天皇奉悼歌……榊保三郎謹作
□歌劇『靈笛』の作曲されし家とモッアールト胸像

■榊博士の師範科全廢論に就いて……關根益三
□創作短評……紫朗
■紅の爵金香(詩)……富田砕花
□小曲三章(詩)……尾山篤二郎
■即與(詩)……中川一政
□歌ふ時は(詩)……西宮藤朝
■靜心なき夕……歌路
□崑山花園より……小原知孝
■海内樂壇、海樂外壇……
□音階の話……田邊尚雄

■發行所
東京音樂學校學友會
振替東京二〇六二番

■發賣所
神田裏神保町東京堂

■會友募集
半ヶ年會費壹圓參拾錢
以上前納者は會友となり、本會所催の演奏會に參聽する事を得
七月五日(第一土曜日)第四回土曜演奏會を開く。入會希望者は本會宛申込まる可し。

■定價一部金貳拾五錢
郵稅一部壹錢五厘
半ヶ年前金稅共壹圓參拾錢、一ヶ年前金貳圓五拾錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東西今古藝術之評論

# 『藝術夏季特別號』

七月一日發行

## 内容

印度波斯の小畫（ミニヱチユア）は源を支那に發して西漸すると同時にビザンチンの影響をも受くるなど東西畫系の接觸點たる處に頗る興味ありて其畫樣の精彩豐麗なる深く考察に價ひするものあり。特に吾邦藝苑の士の研究資料として極めて緊要のものたり。本號は百五十頁の誌面を擧げて之れを最も組織的に且つ最も藝術的に記述し、挿むに本社が苦心の結果蒐集選擇したる代表的作物の複製寫眞十五葉を以てし、卷頭には三色版複製を收め、以て本邦未知の藝術を紹介するに遺憾なきを期せり。

# ▲印度波斯之小畫

## 挿畫

大理石の家（時代不明）…三色版
モンゴルの舞（十六世紀）寫眞版
アレキサンドル大王とダリアスとの戰ひ（十六世紀）…同上
アレキサンドル大王（十六世紀）同上
波斯の婦人（十六世紀）…同上
夜中騎行（時代不明）……同上
アクバルの像（アクバル時代）同上
水牛（十六世紀）……同上

ダーラーシユーの愛馬寫眞版
ラーヂャ其蛙夫人と（十六世紀）同上
鳶色の鷹（十六世紀）……同上
七面鳥（時代不明）……同上
サヂの像（時代不明）……同上
焚火の周圍に集れる旅人の群れ（十九世紀）……同上
ザナーの園にて（十九世紀）同上
音樂の集ひ（十九世紀）…同上

◁特價送料共一部金五拾五錢▷

普通號一部送料共 卅壹錢五厘六部壹圓七十錢

**藝術社**

東京小石川區白山御殿町百拾三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊演劇美術雜誌
七月號
金参拾錢

# とりで

麹町區
富士見町
二ノ卅七
とりで社


## 小說

めくら　井潟清治
アブサロムの首　山崎俊夫
朝湯　岸田辰彌
彫刻(セルナダ)　深市

## 戯曲

片戀　村田實

## 詩

弱き者に　上原群一
墓場　村田實

## 感想

田中一郎君へ　岸田辰彌
自個のために　田中一郎
脱却　村田實
實さんと仲間へ　伊豆四郎
伯林より　伊藤道郎

## 評論

「作曲家と演奏者」に就て　原信子
再び「作曲家と演奏者」に就て　上原群一

## 演劇美術欄

新劇場へ(クレエグ)　伊豆四郎
舞臺監督と戯曲　村雲毅一
帝劇の「魔笛」　伊豆四郎
最近劇壇へ　村田實
クレエグの挿畫解說　伊豆四郎
バラーデに就いて　原信子

## 挿畫

ショパンの第三バラーデ　ビアヅレー
イブセンのロスメルホルム　クレエグ
ショウのシーザーとクレオバトラ　クレエグ
魔の笛　バクスト
表紙　岡本歸一


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## 日本水彩畫會展覽會記念號

みづゑは本邦最古にして且唯一の水彩畫專問研究雜誌なり

□本栖湖（水彩畫原色版）……故大下藤次郎
□夜（全）……相田寅彦
□子、供（全）……中澤弘光
□其他日本水彩畫會出品畫寫眞版三十數葉

# みづゑ

第百一

七月三日發兌

送料共廿五錢

□水彩畫展覽會に就いて……丸山晩霞
□傍觀者として……小島烏水
□展覽會に就いて……大下春子
□日本水彩畫會展覽會批評……渡邊六郎
□水彩畫會の祝宴及會場のスケッチ……鵜澤四郎
□太平洋畫會展覽會の水彩畫……赤城泰舒

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸氏は一日も本誌を座右に欠く可からず

發行所　東京小石川關口駒井町三　振替口座東京六九六三番　春鳥會

# ■ モザイク ■

七月發行第十五號内容


春から夏まで（小說・六十頁）……水島爾保布
ジュール・ルナールの寓話（散文詩）……川路柳虹譯
人生と理性（評論）……太田善男
附錄 サニン（小說・アルチイバシエフ・六十頁）……武林無想庵譯
詩人バリモント論（評論）……昻曙夢
葬式（小說）……五十嵐禎夫
露葉の手紙（感想）……山本露葉



一册參拾錢・郵稅一錢五厘・六册一圓八拾錢

東京市下谷區 モザイク社 中根岸町六九



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回 一日發行

# 現代の洋畫

一冊卅錢 郵税一錢

七月號・第十五號

## 挿畫

パリの行樹街……ルノアル
老爺と小猫……櫻井知足
上野の秋……硲伊之助
風景……岸田劉生
漁師の家……小糸源太郎
朝の裏町……西川哲藏
以上原色寫眞版・此他寫眞版挿畫大小二十餘個

## 記事

オーギュスト・ルノアル……眞田久吉
初夏の三展覧會……川上涼花
後期印象派展覧會……黄紫生
英國のモデル生活……アンドリユズ
新派日本畫に對する感想……石川欽一郎
ロダン氏藝術觀……木村莊八
其他數篇・ロダン氏の藝術觀は毎月連載すべし。

## ゴーホ畫集

○自畫像
○ブザロの復活
○サイプレス
○癲狂院の庭
○夜の酒場

五枚一組五十錢
一枚十五錢

畫は各一尺七寸大にして精巧なる寫眞版に複製せるものなり。畫は額面用として用ゐらる可く厚き畫紙を附し袋に納め一組となす。見本進呈す（二錢切手封入申込まれたし）

ゴーホ畫集

發行所 牛込區水道町五三 振替東京四三七三 日本洋畫協會出版部

# 生活

| 每月一回<br>一日發行 | 七月號<br>〔第九號〕 | 定價廿五錢<br>郵稅二錢 |
|---|---|---|

## 挿畫


種蒔き（油畫）……………ヴアン・ゴーホ
山　　寫眞版……………ポール・セザンヌ
浴せる女の群　〃……………同
座せる女（ブロンズ）……………アンリ・マテイス


## 記事


結婚（近小說 1）……………岸田劉生
べらぼうな戀（〃 2）……………土屋小介
戀想……………千家元麿
日記斷片……………木村莊八
弟に宛てたゴーホの手紙（飜譯）（1）……………同
死人の家（ドストイエフスキイ）……………福士幸治郎
雜事（ガ…）……………木村莊太
反逆（ジヤン・クリストフ…ロマン・ロラン）……………高村光太郎
消息……………成田生・其他


發行所　東京牛込區水道町五三　振替東京四三七三　日本洋畫協會出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第四卷 第七號

# 俳味

毎月一回 一日發行

## 七月號要目


問題である（卷頭語）
一ノ宮壽貞　大野洒竹
俳句の歌澤　文學博士 藤井紫影
夕餐の栞・　沼波瓊音
一般俳人の自覺を促す　岩田月葉
同心の欣求者　大住嘯風
賢翁忌に　志磨鳥亞
權田原所見　都田蠻六
寄席ぞめき　川島風骨
俳句渡し守　拂掛子
あなじよ　長尾素枝
或る時　沼波瀧子

俳句　諸家
俳譯百人一首　同上
俳諧歌　七情法師、蠻六、桑花、瓊音
小さき趣（懸賞文章）　沼波瓊音選

壺燒（懸賞俳句）　都田蠻六選
競馬（同上）　古和簑雪選
五月（同上）　長尾素枝選
夏野（同上）　大野洒竹選

踊（口繪）　繪本常盤謎
まつ風（裏繪）　野上臼川書


| | | | |
|---|---|---|---|
| 一年分税共 | 半年分税共 | 三月分税共 | 定價一部 |
| 貳圓 | 壹圓 | 五十五錢 | 廿錢 郵税一錢 |


發行所　東京本郷西片町十番地　振替東京三四三四番　俳味社



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七月一日發行

# アララギ

定價金廿錢

近刊歌集五種（評論）……古泉千樫
萬葉短歌鈔（其一）……齋藤茂吉
短歌雜論（十四）……茂吉
山家集私鈔……茂吉
草の平地……島木赤彥
飛行船……中村憲吉
雪の野……松島梧風
一步一步……清水謙一郎
愛慕……松井清市
土の香……湯本禿山
わらじ蟲……齋藤茂吉
落日……守屋其翠

會員組織となす○會員を募集す

東京專賣所東京堂書店

東京青山南町五ノ八一齋藤茂吉方
東京根岸短歌會出版部

アララギ叢書第一編

歌集

# 馬鈴薯の花

四六版二百五十頁美本

柿の村人。中村憲吉合著

平福百穗裝幀

定價金八十五錢

日本橋區檜物町九番地

東雲堂發行

毎月一日一回發行
一冊金二十五錢
郵税金一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

# 歌舞伎

百五十七號(七月一日發行)

六冊前金郵税共
金一圓五十錢
○十二冊金二圓八十錢

戯曲「ギヨツツ」……鷗外譯
藝の創作と舞臺監督……清浦青鳥
スキデンの國立劇場……松本苦味
默阿彌著作解題……河竹新水
長唄の研究……大塚梧桐
歌舞伎座漫評……森はいほ
「中將姫」を觀て……立花靜子
大將の家に就て……青々園
高田の中尾と喜多村の艶若……芹影女
國劇史論……伊原青々園
本郷座所感……前田芳柳
「長柄の人柱」と貢……芹影女
再び三崎座を見て……山の手の女
教育的脚色義士劇……山野芋作
須磨子の藝……中村歌右衛門
活動寫眞化せる「椿姫」……旭光
役者の告白……猿冠者
大小劇場見物記(青々園、春浦)……
脚本「忌まれたる人」……佐藤惣之助

本郷湯島切通坂町 書報社内
歌舞伎發行所
振替口座一八一一六番
電話下谷二四八三番

純文藝雜誌

# 詩と劇

毎月一回

一日發行

光明の人バアナアド・ショウ（評論）佐野袈裟美

Kの思ひ出（詩）人見東明

藝術家（評論）本間久雄

女優と舞臺監督（戯曲）國枝史郎

貝殼草と少年（小説）山川亮

大津の宿（小説）清見陸郎

紅焰の塔（詩）尾竹紅吉

## 附錄

歐州演劇交命史　島村民藏

□如何にして新興演劇は發展したるかを研究す□

近代文藝革命史　木村莊八

□革命の内在的生命は何邊より來りしかを研究す□

平和祭（飜譯）秦豐吉

扉に凭りて（感想）清浦青鳥

笑（對譯）田邊若男

蔓草の歌（歌）中川一政

「七死刑囚物語」を評す（評論）中村孤月

濱町情詩（詩）福田夕咲

毒藥の壺（感想）相御編風

常に若き心を持ち新しき文藝を愛する人々のために社友制度を設け、その清規を印刷したれば郵券二錢封入の上申込れたし。

第四年第七號

七月號

定價廿八錢

郵稅一錢半

短歌を募る。若き心より自然に流れ出でたる香ひ高き短歌を募り若山牧水氏之れを選びて毎月の誌上に掲載す。

發行所　東京市小石川區雜司ヶ谷百十四　詩と劇社


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 心の花

第十七號 第七號　**七月號**　七月一日發行


ゼネバ湖畔より　チエンバレエン

蘆庵と景樹　佐佐木信綱

小物使の手帳から（小說）　石榑千亦

雨（小說）　片山廣子

短歌　新井洸太郎

短歌　橘糸重子

少年の春（小說）　久保正夫

澡盤（小說）　長尾素枝

万葉集講義　佐佐木信綱

支那劇梗概　白岩艶子

眠（フヒリンゲル）　天沼匏村

恐怖（ヘッベル）　吹田蘆風

短歌百首　齋藤瀏

短歌百首　丹波豐子

短歌百首　高木篤子



定價一冊金貳拾錢 ○ 六冊前金壹圓 ○ 十二冊前金貳圓 ○ 右稅共

東京日本橋區　**竹柏會出版部**　本石町一ノ一

電話本局五一七〇番・振替口座東京四三〇〇番



Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第十二巻 ✿ 第九號

毎月一回
一日發行

# 美術新報

價三十錢
郵一錢五

✿ 七月一日發行 ✿

## 記事

(時言)趣味の開發と財力の善用……
吉川靈華氏……坂井犀水
シャルル・コッテ……森田龜之輔
日本陶工の大勢……鹽田力藏
パルテノン(上)……大隅爲三

## 繪畫

秋旅(原色版)……吉川靈華筆
篆刻(石版二度刷)……高芙蓉、勤齋、遇所 香遠、敬所、椿所
「海の國の悲哀」の習作(原色版)……シャルル・コッテ筆
山中雪意(アートタイプ)……高鳳翰筆
山水(アートタイプ)……藍田叔筆
素描(網目版)……サアジャント筆

## 要目

巡歐畫談……増田久太郎
露國學藝談……柴山秀子
篆刻雜話……(益田香遠、岡本椿所)
新建築印象記(八)東京美術學校本館……黑田鵬心
伊太利亞通信……(太田喜二郎、水谷鉄也)
初夏の諸展覧會……雪堂生
時報等……

發行所 東京本郷湯島切通 畫報社 振替東京一八一〇六番 電話下谷二四八三番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 新文林

第一卷
第八號

定價金拾錢
郵税金壹錢

## （七月號要目）


□ソログープの新戯曲『生の人質』（評論）……昇曙夢
□觀察と記憶（評論）……馬場孤蝶
□初戀（詩）……人見東明
□ストリンドベルヒ（評傳）……江馬修
□自由（小説）……小川未明
□不幸な幸福（評論）……岩野泡鳴
□旅四題（新文範有島生馬氏、田山花袋氏、ダヌンチオ氏、吉江孤雁氏）……
□短歌の創作と鑑賞（詩論）……尾上柴舟
□寄贈雜誌の評……ＺＺＺ
□文藝閑話……

（口繪）
アルゼリアの女（ドラクロア）……綠陰（高木背水）……夏座敷（前田晁、相馬御風、片上伸、安井正太郎四氏の肖像）……文學者の故鄉（島崎藤村氏、生方敏郎氏）

（文叢）
普通文（雨雀選）……
短歌（通治選）……
俳句（鳴雪選）……
詩（編輯局選）……
短文（編輯局選）……


# 理代小品叢書

第一編（三版）　第二編（三版）　第三編（新刊）

## 椿

田山花袋氏著

田山花袋氏が創作家として將批評家として現文壇の權威たるは言を俟たず同時に氏が小品作家として其の潑溂たる多角的なる而して暗示に富める文章に於て最も獨特の技倆を擅にせるも亦事實也時夏に際して座右に行旅に一たびこれを繙けば鉅匠の清新なる聲の香は正に一腋下清風生ずるの思あらん。

## 青蛙

正宗白鳥氏著

白鳥氏の自序の一節に曰く「私はこれ迄如何なる物を書く時でも自分の腦力の及ぶ限を盡さなかつた事はない從つて自分の凡ての作物に對して同じ程度の價値を置いて居る」と而して氏の藝術に對しては世既に定評あり本書收むる所總て熟したる果實の如き芳香と實質とを有す。

## 途上

前田晁氏著

前田晁氏今や專ら創作飜譯の筆を執つて新生活に入らんとす「途上」はある意味に於て其の出陣の途上にあるを語るもの本書收むる所の諸篇總て是氏が最近數年間に於ける勞作より更に精選されたるものにして何れも獨特の色彩と香氣と生命とを有せり。

菊半截判　裝幀頗る優雅　紙數三百餘頁　正價金五拾錢　郵税六錢

發行所　東京神田今川小路　忠誠堂　振替東京二〇四三一　電話本局四九六六

純詩歌雜誌

# 詩歌

七月號

第三年第七號

特價金三十錢
郵税金二錢

内藤濯（譯詩）
茅野蕭々（譯詩）
土岐哀果（短歌）
米川正夫（飜譯）
三木露風（長詩）
川路柳虹（長詩）
高橋泰（飜譯）
福永挽歌（散文詩）
佐々木繁（對話）
増野三良（譯詩）

水野葉舟（長詩）
加藤介春（長詩）
細谷明（短歌）
金子不泣（短歌）
山田邦子（短歌）
田村飛鳥（短歌）
狹山信乃（短歌）
尾山篤二郎（小曲）
服部嘉香（評論）
前田夕暮（短歌）

短歌

佐藤嘲花　小野深雪　楠田敏郎
奥村博　寺井義　小谷清子
瀧澤謙　佐々木順　米田雄郎
村田光烈　清水白花　矢代東村

□表紙（木版四度刷）

□裏繪　奥村博

發行所　東京市外西大久保　白日社

社友募集

白日社清規往復葉書にて申込まれたし。

發賣所　東京神田雉子町　東京堂

夏目漱石先生序□野上彌生子譯

▲▲最新刊▼▼

# 傳說の時代

## 文藝界の大寶庫

### 神々と英雄の物語

▲文學者の寶典＝畫家の畫題＝說教者の材料＝家庭の好讀物也

▲近代上代を通じ西洋文藝を味ふには神話智識が根本的必要也

▲此書は希臘羅馬の神話を初め埃及北歐印度西藏の傳說を含む

▲原書はウェージル、オヴィイッド以下一千餘種古典研究の産物也

▲小說よりも面白く書かれたる人間の想像力の無限大を示せり

▲讀者は今日迄此飜譯の如き興味を以て勞作を續けたる事無し

▲挿入五十個の寫眞は二千年前の彫刻を初め悉く古藝術の珍品

菊版美裝 約八百頁 挿入寫眞五十枚 希臘古彫刻等皆珍品

定價二圓 郵稅十二錢

東京市神田區南神保町十六

**尙文堂書店**

電話本局四二五四
振替東京一九三四四

昭和44年9月15日発行　【第5回配本】

**青鞜第3巻**　7月号

| | |
|---|---|
| 編著者 | 平塚らいてう |
| 発行者 | 藤原正人 |
| 発行所 | (株)明治文献 |
| 印刷 | 江明印刷 |
| 製本 | (株)三高製本 |

【分売はいたしません】　定価 4,500円



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
B45
V.3
no.7

University of Colorado at Boulde[redacted]
[redacted] 6746319

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## 雜誌規定

■每月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■社費は一ヶ月金參拾錢にして每月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝを便宜とす。
■廣告料（一頁）拾五圓　半頁（八圓）
■振替貯金口座は（東京五六一四東雲堂）に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は青鞜社へ。
■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。
■原稿〆切期日は每月十日限とす。

大正二年六月二十八日印刷納本
大正二年七月一日發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三　青鞜社内　中野初
印刷人　東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地　佐藤保太郎
印刷所　東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地　文祥堂

編輯所　東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三　青鞜社
發賣所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店　電話本局一八七一番　振替東京五六一四番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER